
天使として...

白夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使として…

【Nコード】

N6012M

【作者名】

白夜

【あらすじ】

人を助けることを生き甲斐にしていた少年が女として第二の人生を歩きだす！新しい世界で暮らす彼女は数々の出会いを経験しつつには……

プロローグ（前書き）

どうも、白夜です。他の作品もあるので更新は遅いかもしれませんがよろしくお願いします。

プロローグ

世界には不幸な人が多い。

俺もその一人だ。親に捨てられて何とかアルバイトをしながら毎日をおくっていた。

余裕ができれば困った人達を手伝った。

荷物運び、私生活の世話、時には食料を配った時もあった。

俺みたいに苦しむ人間を一人でも減らすために……

ある時俺は交通事故によって死んだ。まだ19年しか生きてないのに……まあ、悔いはないかな。やりたいことはまだあるけど。少しでも人のためになったなら本望だ。

『ほう……今の時代にはあまり見ない魂の綺麗な若者じゃな』

今俺の目の前にはいかにも神様のな老人が立っていた。

「あなたは……神様ですか？」

『うむ……いかにも、わしが神じゃ』

まさか本物の神様を見れるとは……

「俺に何か御用でしょうか？」

『うむ、実はな、おぬしは多くの人を救った。だからおぬしには我々天界の一員として第二の人生をおくってほしいのじゃ』

「第二の人生…ですか？」

『うむ、おぬし、名前は？』

「……蒼真そうまです」

神様はうむ、と頷いた。

『では、蒼真よおぬしには別の世界の管理人になってもらおう』

「…管理人ですか」

『うむ、その世界を繁栄させるのも滅ぼすのも自由じゃ。おぬしはその世界の一人の住人であり、管理人になるわけじゃ』

なかなかやり甲斐がありそうだ。

「ええ、いいですよ。ひき受けましょう」

『ほう、頼もしいな。その世界ではおぬしは最強の存在じゃ。誰もおぬしには適わん。しかも不老不死じゃ』

それはありがたいな。

「わかりました」

『その世界は魔法が存在する。おぬしは神の力を無限に使えるからまさに最強じゃ』

それから、と言って神様は剣を一本取り出した。

『これを持って行くがいい』

渡されたのは細身の曲刀で刀身は80cmくらいで美しい銀色、鍔元には羽をかたどった模様が刻まれていて金色の宝石が埋め込まれていた。

『神剣シャルインじゃ、その剣には魂が宿っておるからの。良い話し相手になるじやろう。』

「ありがとうございます」

剣を受け取ると羽のように軽かった。

『貴方がボクのマスターですね？よろしくお願いします』

「ああ、よろしくな」

『ボクのことは“シャル”と呼んでくださって構いませんよ』

シャルを軽く振り回して感覚を確かめる。

『では、次におぬしの身体を天使に作りかえる』

「…天使ですか」

俺の身体が光に包まれていく。

光が収まるとそこには腰まである銀色の髪に青い瞳をして白いワンピースを着た美少女がいた。見た目からして14歳ほどに見える。背中には身体を包めるほど大きな白い羽もある。

『すまんの、この姿の方が力を上手く使えるのじゃ』

「まあ、そういうことなら仕方ないですね。普段は元の姿で生活してもいいんですね？」

『もちろんじゃ』

神様は何もない空間に手を広げると白い扉が現れた。

『では、行くがよい。おぬしの第二の人生に幸多からんことを…』

俺は扉をくぐった。さあ、新しい人生の始まりだ！

プロローグ（後書き）

次から主人公は段々と明るくなってきました。

1 1 遭遇（前書き）

どうも！白夜です！

じゃんじゃん行きますよー！

1 1 遭遇

真っ白な扉を抜けるとそこは森のなかだった。

「さて、まずは町か村を探さなきゃ」

俺は意気揚々と歩きだそうとしてすぐに立ち止まった。

「そうだ、せっかく天使になったんだから空くらい飛べるんじゃないかな……」

俺は背中 of 大きな翼を見て呟いた。

身体を包めるほど大きい翼なのだ。きつと飛べる……はずだ。

『マスター、安心してください。ちゃんと飛べますよ』

頭の中にシャルの声が響いた。

ちなみにシャルは必要な時以外は収納空間のような場所に保管されていて会話くらいはできるようにしてある。

「そうか、ならやってみるかな!」

俺はいきよいよく翼をはためかせて空に舞い上がった。

少しきこえないがちゃんと飛んでいる。おそらくそのうち慣れるだろう。

「空を飛ぶのは気持ちいいなあ」

自然と笑顔になった。人間なら一度は空を飛びたいと思うはずだ。俺は今それを経験している。凄く楽しい。

「……ん？」

森の中心らしき部分に湖があるのに気がついた。

「ちょうどいい、気温も高いし、ちょっと水浴びでもしようかな」

俺は湖に降り立った。

「……ふう」

湖の淵の木陰に座って足を水につけた。ひんやりしていて気持ちがいい。

俺はついでにそのまま魔法の練習をすることにした。

手の平に火の玉を作ったり、水の塊を作ってみたり、と色々やっているともう日が暮れてきた。

「ん？もう日が暮れきたな、でももう少しだけ……」

俺は湖の水面に立った。爪先に水の魔法で作った膜をはって、まるで踊るように水面を滑った。

「うん、かなり慣れてきたな」

俺はなんだか楽しくてそのまま遊び続けた。

- ??? ? Side -

私達は森の中を歩いていた。森に入るのはいつものこと。

私の名前はリリイ・クレセイン、母さんに似たセミロングの黒髪に緑の瞳をしてる。

私達は近くの街の学校に通う学生であり、夜中は外出禁止なのだがこっそりと寮を抜けだしてきたのだ。

「なあ、リリイ、今日はどこに行くんだ？」

今話し掛けてきたのは幼なじみのサイマス・ハルバルト。私の数

少ない親友だ。ちなみにあだ名は“サイ”である。

「湖よ。今日は満月だからたぶんとても綺麗で神秘的だと思うわ」

私達はこの森の真ん中にある湖に向かっている。

暇な時はあそこでよく魔法の特訓をしている。ほとんど誰も来ないから静かで落ち着ける場所だった。

「さあ、到着……あれ？…誰がいる」

湖の方に人影が見えた。私はサイに視線を送ると彼は静かに頷いた。

静かに木の陰から湖を覗いてみる。

その瞬間、私達は信じられないものを見てしまった。

「……天使？」

私は思わず呟いた。湖の水面を滑るようにして踊っていた少女はまさに天使だった。

ワンピース姿で腰まである銀色の髪をなびかせ、瞳は蒼くて大きく、くりくりとしていた。歳は13〜15歳位だろう。まさに美少女だった。

そしてその少女の背中には真つ白な翼があった。
月の光をバックにして踊るその姿は一つの芸術品のようだった。

- 蒼真 Side -

『マスター、これから男口調をやめてください』

「なんでだ？普段は男の姿で過ごすんだから問題ないだろ？」

水面で華麗にターンをきめて俺はシャルと話していた。

『マスターの高くて甘い感じの声に男口調が合ってません。元の姿の頃くらいはちゃんと喋ってくださいよ』

まあ、俺は一応女になったわけだからな。仕方ない。

「わかったわよ……これでいい？」

何だか言ってて恥ずかしくなってきたぞ（／／／／）

『はい！バッチリですよ！』

まったく、仕方ないなと心の中でばやいていると近くに人の気配がした。数は二人……子供のようだ。

俺は立ち止まると林の方を見て声をかけた。

「……あんまり人にじろじろ見られるのは好きじゃないんだけどな

あ
」

すると林の中から二人の人間が出てきた。

一人はセミロングぐらいの黒髪に緑の瞳をした女の子。歳は17歳ぐらいだろう。身長は今の自分よりも少し高い。整った顔立ちで少し大人っぽい印象を受ける。

もう一人は茶髪のショートヘアーの男の子だ歳は17歳ぐらいで紅い瞳が印象的だ。身長は170cmくらいだ。

二人とも黒いローブを身につけており、ローブには綺麗な紋章が刺繍されているところをみるとおそらく学生だろう。

「お……私に何か用ですか？」

危つく“俺”と言いかけて言い直した。

「え？……いや、その……」

突然話し掛けられて驚いたのか若干緊張しているようだ。

「……ふふ」

俺はその様子が可笑しくてつい笑ってしまった。

そのまま水面を滑って二人の近くに行くと。

「大丈夫よ、何もしないから」

と言った。二人は一度顔を見合わせて再び俺に向き直ると少女が恐る恐る口を開いた。

「あ、あの……それは……本物なの？」

そう言って俺の翼を指差した。

「ああ、これ？本物だよ。…ほら」

そう言っつて浮かんでみせた。

「す、凄い！」

少女は目をキラキラさせて俺を見ていた。少年はただ啞然として
いるだけだ。

「あなた達はこんな夜中に何でここに？」

俺は少女にそう尋ねた。

「え？えっと、この湖にはよくこっそり来てるの。今日も月が綺麗
だったから…ここで眺めようかと思って…そしたら」

「私がいたわけね」

少女は頷く。しばらく時間を忘れて話した。この森のこと、
彼女達の街のこと、聞いていて楽しかった。

すると隣の少年が時計を見て慌てて声をかけてきた。

「おい！やばいぞ！もうすぐ寮の就寝時間だ！早く帰らないと玄関
に鍵がかかるぞ」

やはり二人は学生のような。隣の少女も慌てている。

「ええ〜！？もうそんな時間なの！？このままじゃ間に合わないよ」

二人の顔は真っ青だ。おそらく門限までに帰らないと寮に入れないらしい。

「あと10分しかないよ！どうしよう！」

二人は急いで帰ろうとしたが俺は二人を呼び止めた。

「ちょっと待って。私がなんとかしてあげる」

二人は首を傾げた。俺は二人の手を取ると翼を広げた。

「え！？まさか…」

少女に軽く微笑むと俺は二人を連れて空に舞い上がった。

「きゃああああ〜」

「うわああああ〜」

二人は驚きの声をあげているが俺は構わず街の方向を確認する。少し離れた所に明かりが見えた。おそらくあそこだろう。

「いくわよ。空なんて飛んだことないと思うけど慣れれば大丈夫よ」

そう言って俺は街へ向かって急いだ。

なんとか門限に間に合った。少女は俺に「また会いましょう」と言って二人で走っていった。俺は手を振って後ろ姿を見送ると再び湖に帰ってきた。

『さすがマスターですね』

ずっと大人しかったシャルが話し掛けてきた。

「ん？……うん、なんか困った人は助けなくなるからね」

俺は少し笑うとその場に座った。さて、これからどうしようかな…

『マスター、ものは相談ですが、彼等は学生でしたよね』

「ん？…ええ、そうね」

『なら、彼らの学校に入りませんか？学校なら魔法や世界のことも学べますよ？』

成る程、それもいいかもしれない。そもそも俺は捨て子だったから学校に行ったことがない。だから学校に行ってみたいという気持ちもある。

「そうだな、明日あの街へ行って学校に入学できるか聞いてみよう」

俺は学校生活を待ち遠しく思いながら眠りについた。

…そういえば二人の名前を聞くの忘れてたな。

1 1 遭遇（後書き）

テスト期間なのでなかなか書けません。（^| ^ ;）

1 - 2 入学（前書き）

こんにちは、白夜です。

今回から学園生活が始まります。

1 - 2 入学

「うーん、こんなもんかな？」

今俺は湖の側で髪の毛をいじっていた。
現在俺の髪は黒髪でセミロングぐらいの長さだ。

『黒髪ならこのぐらいがちょうどいいですよ』

と、シャルからも好評だ。銀髪は目立つので髪の色を変えてみたのだ。

「しかし、何で髪の色や長さは自由なのに見た目は変えられないんだ？」

そう、最初は今までのように男の姿で生活しようとしたが何故かできないのだ。

つまり俺はこのまま女の姿で生活しなくてはならない。

『いいじゃないですか！マスターは可愛いですから』

「……泣きたくなってきた」

この姿になってから涙腺がゆるくなったらしくすぐ涙目になる。

『ああ！マスター！泣かないでくださいよー！』

俺だって泣きたいわけじゃない。

「…まあ、いいわ。とりあえず街にいきましょ」

思えばだいぶ女口調にも慣れてきた。俺：私はもはや男には戻れないらしい。

「こうなったら女として生きてやるわよ！」

『マスター開き直りましたね』

いいじゃない！人生前向きに生きなきゃ！
もはや自分の性別なんて関係ないわ！とりあえず楽しむのみよ！

『じゃあ名前も考えないといけませんね。蒼真は男の名前ですから』

「…名前かぁ」

しばらく二人であれこれ考えながら森を歩いた。なぜ空を飛んで
いけないかというと、昼間は目立つためだ。

今は翼を隠しているため普通の人間にしか見えないが一応天使と
いうありえない存在だ。いきなりばれてしまつては学校どころでは
ない。

『…“エルダ”なんてどうですか？』

「…あつ、それいいかも！」

結局、私の名前は“エルダ・シャルイン”となった。単純に新しい私の名前とシャルの名前をくつつけただけだ。

『僕の名前まで使ってくれてうれしいですよ』

シャルがだいぶ嬉しそうなので私も何だかこの名前に愛着がわいてきた。

「うわあ〜」

30分ほど歩いた後、街に到着した。昨日は夜中で街を見て回る事ができなかったので、私は改めてこの街の広さに驚いていた。

『なかなか大きな街ですね、マスター』

「うん、そうね。ここまで大きいなんて思ってたわ」

しかし、一見平和そうだが街のあちこちに兵士がいるし街の周りには沢山の兵器も設置されていた。

「近くで戦争でもしてるのかな？」

『力を使って調べたらどうです？』

そういえば私天使なんだった。何かまだ実感ないなあ。

「大変だー！街の中に魔物が入って来たぞー！！」

突然一人の兵士が真つ青な顔で街の中央に走ってきた。

「何！？どこだ！」

「西側の入口だ！手の空いてる者は来てくれ！」

どうやら街中に魔物が侵入したらしい。力で調べてみたがだいぶ大きい魔物のようなだ。

「普通の兵士じゃ手こずりそうね。行くわよ！シャル！」

『了解です！』

私は兵士達の後を追って走り出した。

私が西側の門へと走っていると前方から兵士の叫び声と大きな鳴き声が聞こえた。砂煙りのむこうに巨大な猪のような魔物が見える。

「見えた！」

私は収納空間からシャルを取り出した。銀色の美しい刀身が光を受けて輝く。

「さあ、初仕事よ！シャル！」

『わくわくしますね！』

私はそのまま魔物へ正面から突っ込んだ。

- リリイ Side -

「リリイ！街の西側にでかい魔物が出たらしいぞ！」

今日は学校が休みなので私とサイは街中に買い物に来ていたのだ。

「魔物ですって？珍しいわね。普段魔物は街中には入ってこないのに」

街には普段魔物が嫌う臭いを出す装置が置いてあるため魔物は入ってこないのだ。

「なあ、見に行こうぜ！」

「でも危ないわよ？」

「大丈夫だよ。門の上からなら平気さ」

私が断ればサイ一人でも行きそうだったので私はしかたなくついて行くことにした。私も随分甘いわね。

「うわぁ…だいぶでかいな」

西門の下では兵士達が何とか侵入を押し止めている状態だ。

「もう少ししたら先生達や魔導師の人達が来るわ。それまでのgebは何とかなるでしょ」

とはいってもこのままじゃ死者が出るかもしれない。実際何人もの兵士が倒れている。

「リリイ！あれ！」

サイが突然声をあげて兵士達の後ろを指差した。

「一体なによ……あれは？」

私の目に映ったのはセミロングの黒髪をなびかせた少女が美しい片刃の剣を片手に魔物へと走っている姿だった。

- エルダ Side -

私は脇に倒れてうめき声をあげている兵士を見て、

「すぐに治療しますから待っていてください」

と呟き、まだ無事で次の攻撃に備えている兵士達の頭上を飛び越えた。

兵士達は突然現れた謎の少女に驚いている。

私は姿勢を低くして魔物の顎の下に滑り込むと左の前足を膝の関節あたりをシャルで切断した。

「ゴアアアア！！！！」

魔物は叫びながら左に倒れた。巨大な体が倒れたために辺りに地響きが響く。

「やっぱり切れ味は抜群ね！さすがシャル！」

『当たり前です！』

私が笑顔でシャルと向き合っていると魔物が再び立ち上がるうと
していた。

「しつこいと嫌われるよ!」

私は周りに光の槍を20本ほど作ると魔物に一齐に発射した。
光の槍は全て命中し、そのまま魔物はしばらくもがいた後息絶え
た。

「あんまりたいしたことないね」

『そりゃマスターは天使ですから』

全然本気じゃなかったんだけどなあ。

「その君!」

私がシャルについた魔物の血を拭いていると黒いローブを着た中
年くらいの男性が声をかけてきた。

「何でしょう?」

私がつこり笑って答えると男は一瞬顔を赤くしてすぐに元に戻
ると、私を睨むようにして口を開いた。

「あの魔物は熟練の魔導師が10人掛かりでやっとで倒せる奴なん
だ! 一体どうやって倒したんだ!？」

あの魔物はそんなに強かったのか。しまったな、いきなり目立つ

てしまった。

「どうもこうも私は剣で切りつけて魔法で串刺しにいただけですよ？」

ふと、怪我人が一カ所に集まっているのを見つけた私はさっきの男が話し掛けてくるまえにそこに歩きだす。

何だか周りからの視線が痛い。

「怪我をした方々は私が治療しますよ」

私は治癒魔法を全ての怪我人にかけた。皆驚いてる。なぜなら本来治癒魔法は一人一人にしかかけられないからだ。

その法則を目の前の14歳くらいの少女があっさり覆したのだ。驚くに決まっている。

その後兵士達からお礼を言われた私は再び街中へと戻ってきた。

「やれやれ、精神的に疲れたわ」

『いきなり規格外の力を使いましたからね』

私が苦笑いを浮かべていると。

「ねえ！そこのあなた！」

いきなり後ろから声をかけられたので振り向くと昨日の少女が立っていた。

「あつ、あなた確か昨日の…」

私がそう言つと

「へ？私昨日あなたと会つたかしら？」

そう言つて首を傾げた。髪の毛以外変わつてないんだけどなあ。

「まあ、髪の毛だけでだいぶ人の印象は変わるからなあ……………わかない？」

「……………」

少女はさらに首を傾げた。何だか可愛いくて思わず笑つてしまった。

「わ、笑わなくてもいいじゃない！」

少女が顔を赤くしていると昨日一緒にいた少年も追いついたようなので、そろそろばらそうかな。

私の周りに白い羽がいくつか舞い上がった。翼を見せるわけにもいけないからこうしたけれどたぶん気づくでしょ。

「ああっ！！」

少女が何かに気づいたように声をあげてすぐに笑顔になった。

「あなたは昨日の天使さんね！」

「ふふ、正解」

私が正解だと言った瞬間、後ろの少年もやっと気がついたようだな。なかなか鈍いやつだ。

その後私達はお互いに自己紹介を済ませて学校に案内してもらったことになった。

「へえ、あなたも学校に行くつもりなんだ」

少女：リリイは私を見ながら興味津々という目を向けてきた。

「まだ入学の手続きはできるの？」

「まだ大丈夫よ。私達も最近入学したばかりだから。まだちゃんとした授業も始まってないし」

それを聞いて安心した。もしかしたら期限切れで来年まで待たないといけないなんてになったら大変だから。

「あ、でも一つ問題があるわ」

リリイが顔を私に向けながら言ってきた。

「問題？」

「年齢よ。学校は17歳以上じゃないと入れないのよ」

私は何だ、そんなことかと肩を竦めた。

「心配ないわよ。私は19歳だから」

「「19歳!？」」

突然二人が大きな声を出すから驚いてしまった。

「な、何よ。そんなに驚いて」

「嘘でしょ!？そんな外見で19歳なんてありえない!!」

確かにこんな小柄な少女が19歳なんてありえないだろう。しかし事実なのだから仕方ない。

「私よりも年上なんて……」

リリイは何だかうなだれてしまった。

「……私よりも小さいのに……スタイルいいし……」

今スタイルがいいと聞こえたが、実は今の姿は見た目は14歳くらいだがかなりスタイルがいいのだ。出るところは出て締まるところは締まっている。

そんなこんなで学校までリリイの気分は沈んだままで、正直気まぐずだった。

私は受付で年齢をチェックされたがしっかり19歳と装置に表示されたので安心した。

どうやら条件さえ満たせば入学できるらしく、私は明日からリリイ達のクラスに通うことになった。

衣食住は学校の近くの寮で全てまかなえるらしい。部屋もリリイの隣だ。ちなみに寮は男子棟と女子棟がありサイは勿論男子棟だ。

私は部屋につくと収納空間から家具を引き出した。これは昨日の

うちに力を使って作っておいたのだ。それを魔法を使っててきばきと置いていく。

ちなみにこの寮は不審な行動さえしなければ何をしてもいい。わりと広い部屋だからシャルを使って剣の練習もできる。

『しかし、何だか見れば見るほど女の子の部屋ですね』

部屋の中はピンクや赤のクッションやら絨毯が敷いてあり、ベッドには可愛いぬいぐるみまである。

「いいじゃない！もう私は女の子なんだから！」

『何だかあっさりと切り替わりましたね。もっと戸惑うと思ったんですが…』

何を言ってるのシャル。人生切り替えが大切なのよ！

私はこの後襲い掛かる問題に気づかぬままこれからの生活に胸を躍らせる気持ちでいっぱいだった。

1 - 2 入学（後書き）

キャラクタープロフィール

蒼真^{そうま}

年齢・19歳

身長・175cm

性別・男

主人公の転生前の姿、両親に捨てられて一人で生活してきた。生活は苦しかったが決して犯罪は犯していない。お金に余裕があれば自分と同じような子供達にわけていた。

エルダ・シャルリン

年齢・19歳

身長・145cm

性別・女

蒼真が転生した姿。神から一つの世界の管理を任された。天使でありその世界では最強の存在。不老不死であり何でも想像できる力を持っている。口調こそ女になったが性格はかわっておらず、困っている人間を放っておけない。

1 - 3 世界（前書き）

キャラクタープロフィールその2

シャルリン

種類・片刃剣

性別・男？

エルダのために神が作り出した神剣。銀色の細身の片刃剣。鰐元に羽のレリーフが彫られている刀身の根元には金色の宝石がはまっている。性格は頼りになるがなかなか掴みどころがない。エルダの頼りになる相棒。

リリイ・クレセイン

年齢・17歳

性別・女

身長・150cm

明るく元気な女の子。満月の日に湖で月を眺めようとしてエルダに出会う。エルダが天使だと知る数少ない人物の一人。

1 - 3 世界

風が無い……

静かだ……

私は草原に立っていた。

辺り一面緑のはずの草原は真っ赤に染まっていた。

それは血、大量の血液。

月が真っ赤に染まり辺りはまるで色が抜け落ちたような錯覚に陥る。

その中で私は草原に立つ少女を見ていた。周りには沢山の人の死体がある。

その少女は腰まで届く紫の髪に黒い翼。見た目は天使のようだが黒い翼と返り血で真っ赤になった白のワンピースが異様な気配を見せる。

少女は私に振り返った。

私は思わず両手で口を押さえた。

その少女は自分だった。瞳は真紅に輝き血まみれの口元から覗く牙。それはあきらかに今の自分とは違う。

しかし、それは間違いなく自分だとわかった。

血まみれの私がつこり笑った。その瞬間私は叫んでいた。

「いやあああああああ！！！」

『マスター！マスター！しっかりしてください！』

シャルの声が聞こえる。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

私はベッドで体を起こした状態で肩で息をしていた。

知らず知らずシーツを強く握りしめていた。

『マスター！大丈夫ですか！？』

シャルが心配そうに聞いてきた。

「……大丈夫」

私は深呼吸するとベッドから降りた。全身に汗をかいていた。

（…あの夢は一体なんだったの？）

私は部屋にある鏡を見た。セミロングの黒髪に蒼い瞳をした自分が映る。

私はため息をつく、着ていたネグリジェを脱いで浴室に入る。

シャワーを浴びながら私はさっきの夢を思い出していた。

血まみれの自分が頭をよぎる。

「嫌な夢見ちゃったな…」

そう呟くと、私は体を拭いて朝食を食べ、白いフリルのついたシャツを着て黒のスカートをはく。

その上から黒い学園のローブを羽織る。ローブといっても感覚的にはマントのような感じた。

不思議とこのローブは夏は涼しく冬は暖かい。特別な魔法がかかっているようだ。

最後に走りやすい踵の低いサンダルをはく。

「よし、行こうか！シャル！」

私は夢のことを忘れるようにわざと明るく声を出した。

『…はい！』

シャルもちゃんと返事をしてくれた。

私の管理しているこの世界は中央の巨大な大陸と3つの小さい大陸からできている。

まず中央のセイガルント大陸。最も大きく、国家の権力も最大である。しかし、この巨大な大陸を一つの国家がまとめるのは難しく、実際にはあちこちで反乱を考えている者もいる。

そして、北にあるのがカンバライス大陸。一年を通して雪と氷に閉ざされた大陸である。人間ではない種族が大半を占めている。

南東にあるのがロストグラウンド。未開の地と呼ばれており、人間はまだ誰も足を踏み入れたことがないため情報がない。

西にあるのがフランダイト大陸。砂漠と火山があり厳しい環境だが人間はちゃんと住んでいる。

私がいるのはセイガルント大陸の最も東にある街で名前は“アスタル”という。

次に種族について話そう。

種族は様々だが一番多いのは人間、他にも妖精、魔族、エルフ、獣人、そしてかなり少ないがバンパイアもいるようだ。

実は私はこの世界のあらゆる種族の技や肉体的変化を発動させることができる。

最後に魔法についてだが、使うのはあまり難しくない。魔力は誰でも持つており、それを頭でイメージすれば発動できる。

魔力は個人差があり得意や不得意もある。ちなみにリリイは炎が得意でサイは風の魔法が得意だ。私は何でもできるからあまり関係ない。

私は学校の玄関をくぐり、教室へ向かう。

「あつ！エルダ！おはよう！」

リリイが朝の挨拶をしてきたので私も返事をする。

「おはよう、リリイ」

私が笑顔で言うところリリイは顔を少し赤らめた。

「そつだ！ねえ、エルダ、朝あなたの部屋から叫び声が聞こえた気がしたけど？」

私はドキッとして慌てて首を横に振った。

「な、何でもないよ！ちよつと嫌な夢をみてね…」

「そうなんだ、ふふふ、天使にもそんなことあるんだね」

私は苦笑いをしながら黒板の方を向くと、午前中は森で演習をするらかった。

「ちょうどいいわね。魔法の練習にもなるし」

10分後、私達は学校裏の森に来ていた。

「いいか！今から演習を行う！この森の中で一時間の間チームを組んで戦ってもらう」

そう言うのは体格のいい先生だ。

「チームは四人一組だ。何でもありだが絶対に相手を殺すなんてことはするなよ」

おいおい、何でもあるのか。私達のチームは……

「あの…よろしくお願いします！私は“シャーリー・センネル”で

す！」

「僕は“ルイス・センネル”だ。足手まといになるなよ？」

二人は顔がそっくりだ。おそらく双子だろう。茶髪の髪はシャリーが少し長い。瞳はどちらも薄い緑色だった。身長は私と同じくらいだ。

「よろしく、エルダ・シャルリンよ」

私が二人に挨拶をすると最後の一人がこちらに歩いてきた。

「あら？確かエルダさんでしたわね！」

いかにもお嬢様といった感じの女子だった。彼女は私を軽く睨みながら

「私はフィアナ・ルツ・フレイラルです！貴女には負けませんわよ！」

フィアナはそう言うと言髪をかきあげる。背中まで伸びた金髪がさらさらとながれる。少し鋭い茶色い眼差しに整った顔スタイルはいがおそらく胸は私の方が大きいだろう。身長は165cmと女子の中では高い方だ。

なぜか私はライバルとして見られているらしい。なぜなのだろう？

「私を差し置いての学年トップの容姿と学力なんて認めませんわよ！」

「あ、あはは」

私の笑顔はそうとう引きつっているだろうな。

「頑張りましょうね！」

「ふん、僕とシャーリーで十分だ！」

このメンバーで大丈夫なのかなあ。

1 - 3 世界（後書き）

こんにちは、白夜です！

今日からテストが始まりました。私は6つテストがあるのですが最初の一日ですすでに半分の3つが終了しました。

大学のテストは下手をしたら一日にいくつもテストが入る場合があるのです。

残りの教科は時間もあるのでこつこつ頑張ります！

1 - 4 侵入者（前書き）

どうも、白夜です。

梅雨^があけて急に気温があがったので大変です。私は夏^が苦手な
んです（^| ^ ;）

1 - 4 侵入者

私達のクラスは40人いるため4人一組なら10チームできる。

リリイ達と一緒にじゃないのが残念だが仕方ない。

今回の演習は制限時間が一時間、その間にできるだけ相手を倒さなければならぬ。相手を気絶させるか降参させれば勝利だ。

私達は先生の合図で森のあちこちに飛ばされた。

「さあ、皆さんいきますわよ！」

フィアナが突然大声でそう言ったので私は慌てて彼女の口を押さえた。

「ち、ちよっと！そんなに大声出したら見つかるでしょ！」

私が小声でそう注意するとフィアナは恥ずかしそうに“しまった”という顔をしていた。

「ふん、安心しろ。僕達だけでも十分だ。お前達はあてにしていなからな」

ルイスが馬鹿にした態度で私とフィアナを見ていた。

「ちょっと、ルイス。そんなふうに言わなくてもいいでしょ」

シャーリーがルイスを注意するがルイスは気にせずさっさと歩き始めた。

「何なの！あの態度は！私が足手まといというのはですか！」

フィアナは怒ってルイスと口喧嘩を始めた。

私達のチームは大丈夫なのだろうか。心配になってきた。

あれから私達は2回他のチームと戦闘をした。

フィアナは足手まとい扱いされたのが余程嫌だったようで、魔法でどんどん相手を攻撃していた。

ルイスとシャーリーは双子であるためか息の合ったコンビネーションで次々と相手を弱らせる。

私は戦闘は3人に任せて回復やバリア等の補助をしていた。私が戦えばすぐに終わってしまうからね。

「ふん、大したことありませんのね」

フィアナがそう言って近くの木の本根元に座った。

「少し休みましょう。ルイスもそれでいいわよね？」

シャーリーの問い掛けにルイスは頷いた。

私は力を使って森全体を調べた。どうやら私達を含めてあと3チム残っているようだ。

すると、シャルが私に話し掛けてきた。

『マスター、何か妙な気配がします』

「妙な気配？」

私は再び森を調べた。すると、森の外から誰かが侵入してきた。

「……！」

そしてその反応は真っ直ぐこっちに向かってきている。

「みんな！誰か来るわ！」

私の言葉を聞いた瞬間全員が立ち上がり構えた。

「気をつけて！学園の生徒じゃないわ！」

私は反応があった方向を睨みつける。

すると、何かを感じたルイスが顔をしかめる。

「…空気の流れがおかしい」

私はルイスの呟きを聞いた瞬間バリアでその場にいる全員を包んだ。何かがこっちに飛んできているのがわかった。

「ふせて!!」

私が叫ぶのとバリアに巨大な風の塊がぶつかるのが同時だった。

「きゃあ!」

あまりの大きな衝撃にフィアナが尻餅をついた。

「これは!」

「風の魔法だ!しかもかなり高度な術みたいだ」
バリアにひびが入る。咄嗟に作ったから強度が足りない。

「はあああ!」

私はバリアを前方に押し付けるようにして破裂させた。その衝撃で風の塊は消え去る。

「よし!」

私が小さく呟くとシャルが叫ぶ。

『マスター！まだです！』

消えたはずの風の塊があつた場所に小さな風がいくつも集まっている。

「……………いけない！」

私は双子にバリアを張る。しかしフィアナには間に合わない。

私はフィアナの前に立つて両手を広げてかばった。

その瞬間集まっていた風が弾けた。小さな風は鎌鼬となり周りの木々を切り付ける。

フィアナを庇った私は身体の数十カ所が裂けて血が吹き出した。

「……………え？」

フィアナは何が起きたかわからないようで呆然としている。

フィアナの安全を確認した私はその場に倒れた。

私の服は裂け、真っ赤に染まっており倒れた私を中心に血が広がっていく。

「いやあああああああ！！！」

やっと目の前の光景を理解したフィアナが叫ぶ。

「エルダさん！」

「おい！しつかりしろ！」

シャーリーとルイスが私の所まで走ってきた。

すると林の中から白いローブを着た人物が出てきた。

「ふん、手こずらせやがって」

声から男であることはわかった。その男はフィアナを見ると近づいていく。

「フィアナ・ルツ・フレイラルだな？」

フィアナは怯えながら後ずさる。

「お前をさらってこいと命令を受けている……さあ、来てもらおうか」

男がフィアナに手を伸ばす。

「……ひっ！」

フィアナは震えながら更に後ずさる。

「待て！」

ルイスが声を上げながら男の頭上に魔法で岩を落とす。

「邪魔をするな！」

男は魔法で風を起こし岩を砕いた。そしてルイスの腹に素早く蹴りを入れた。

「……ぐっ！」

ルイスは近くの木まで飛ばされ背中を打ち付けた。

「ルイス！」

シャーリーが叫ぶと男はロープの中から剣を取り出した。

「邪魔をするやつは殺していいと言われている。死にたくなければ動かないことだ」

シャーリーは悔しそうな顔のした。おそらくシャーリー一人ではこの男には勝てない。

「ふん、わかるばいいんだ」

私はこのままではまずいなと思い、仕方なく傷を再生させる。そして立ち上がった。

「……何だと！」

「………！」

男とシャーリーが同時に驚く。今のエルダの肌は血がついてはいるが傷が無くなっている。

「…お、お前はいい…」

男がそう言った瞬間、エルダは男の背後に回り込むと魔力を放出して吹き飛ばした。

男はそのまま気絶したようだ。

「……ふう」

私が息を吐くとフィアナが私に飛び掛かってきた。

「きゃあ！」

思わず変な声を出してしまった。

「フィアナ？どうしたの？」

フィアナは私にしがみついたまま何も言わない。

「…フィアナ？」

私はそこで気がついた。フィアナは泣いていた。

「……よかった…本当に……」

涙を流しながら私を心配してくれたフィアナに私は微笑みながらしばらく頭を撫でてあげた。

その後、先生達が捕まえた男のことを調べた結果、その男は反政府軍であることがわかった。

フィアナは貴族であるため、彼女を人質として捕まえていざという時には交渉に使うつもりだったらしい。

現在このセイガルント大陸は政府軍と反政府軍があちこちで戦いをしている。

どうやら近々大きな戦争があるらしい。

私はあの後大変だった。

私は考え事をしていて服を着替えずに教室に入ってしまった、クラスメイト全員を驚かせた。

そこでやっと気がついた私はおそらく顔が真っ赤だっただろう。なぜなら裂けた服の隙間から胸やら太股やらがきわどい感じで見えていたからだ。

リリイやサイは私を心配してくれた。私はそのことが嬉しくて思わず泣きそうになっていた。

しかし、この時私の身体にはある異変が起こっていた。それを私が知るのは次の日になってからだった。

1 - 4 侵入者（後書き）

先日新たに感想をいただきました。送ってくださった方々ありがとうございました。
とっごくざいます。

これから頑張ります。

1・5 リリィとの休日（前書き）

こんにちは、白夜です。

今回はちょっとリリィのキャラが壊れます（＾－＾；）

1 - 5 リリイとの休日

暖かい光が窓から入ってきている。

外から小鳥の声が聞こえてきて実に気持ちのいい朝だ。

「んっ……うん」

私は全身に倦怠感を感じながら起き上がった。凄くだるいし喉が渴いている。

私はふらふらと台所に向かうとコップに水をくんで飲んだ、しかし何故か渴きは癒せなかった。

『マスター？どうしました？』

シャルが心配そうに声をかけてきた。

「…うん、何だか喉が渴いて……でも水飲んでもおさまらないの」

シャルは少し黙った後、

『マスター……もしかして…血がほしいんじゃないですか？』

「……………え？」

私はシャルが言ったことを理解できなかった。

私が血を欲しがる？なぜ？

夢で見た自分を思い出す。真っ赤な目をして血の海に立つ自分を…

『マスター？大丈夫ですか？』

私はハッとして慌ててシャルに返事をした。

『マスターは昨日自分の体の怪我を高速再生させましたね？』

昨日の森での出来事の時私は全身を切り裂かれたが、一瞬で治してみせた。

『本来高速再生等はヴァンパイアにしかできません』

「じゃあなんで私は使えたの？」

私は天使であってヴァンパイアではないはずだが…

『あなたはこの世界の管理者です。この世界に住む全ての種族の力だつて使えて当然ですよ』

私はだいたい理解した。もしかしたら獣人族のように動物にもなれるのだろうか……後で試してみよう。

「…それで？この渴きとの関連は？」

『おそらくヴァンパイアの力を使ったので人間の血が欲しいんだと思います。ヴァンパイアは人間の血を吸って力を使いますから』

それがこの渴きの原因が……

「でも人を襲うわけにもいかないし……」

もしそんな事をして人を殺したりでもしたら大変だ。

『マスター、大丈夫ですよ。今なら軽く噛み付く程度で十分です』

「……うん」

コンッコンッ

私が考え込んでいると突然部屋の扉をノックする音が聞こえた。

「……はい、どうぞ」

私が返事をする、と、リリイが入ってきた。

「おはよう、エルダ」

相変わらず元気な様子で私に笑いかける。

「おはよう、リリイ」

私もリリイに挨拶をする。ちなみに今日は休日、リリイと買い物に行こうと約束をしていた。

「……エルダ？なんか疲れてる？」

リリーの言葉にちょっとドキッとした。

「そ、そんなことないわよ？」

「本当に？」

リリーは私の額に自分の額をあてる。

「熱はないみたいね」

私は恥ずかしくなって、思わず目線をそらした。
すると丁度リリーの首筋が見えた。

ドクンッ

「……………！！」

私の心臓が突然大きく跳ねた。

自然と息が荒くなる。

「……………はぁ……………はぁ」

リリーは驚いてエルダの顔を覗き込んだ。

「エルダ？大丈夫？」

エルダの瞳が徐々に虚ろになっていくのがリリイにもわかった。

「待ってて！今誰か呼んでくるから」

リリイが私から離れようとした瞬間、私はリリイの腕を掴んだ。

「…エルダ？」

私は朦朧とした意識でリリイの肩を両手で握り、向かい合う形になった。

「…エルダ？」

私はもう我慢ができなかった。

「…いただきます」

「……え？」

リリイが啞然としているうちに、私はゆっくり彼女を抱きしめると首筋に自然と伸びた牙を突き立てた。

「………あつ」

リリイの体がビクツと小さく跳ねる。

口の中に暖かい液体が流れこむ。

それを飲み込んでからゆっくりと体を離す。

「……………はあ」

自然と口から吐息がこぼれる。リリイの血は暖かくて、甘かった。リリイは頬を赤くしながらぼーっとしている。

「…ごちそうさま」

私はそう言っでリリイの首についた傷に手をそつと被せて治療した。

手を被せた時についた血をそつとなめた。

「……………甘い」

私がそう言っでた時ようやくリリイが我にかえつたようにあたふたしだした。

「え？ええ！？何で！？エルダ…今…」

私はまだ口の中に残る甘い感触に酔いしれながらリリイに微笑んだ。

「…美味しかった」

「~~~~っ／／／／」

リリイは顔を真っ赤にしておろおろしている。それが小動物みたいで可愛かった。

私はそれからさっきの事に対する説明を求められた。

「つまり、体を再生させただけ人の血を吸わなきゃいけないのね？」

私はゆっくり頷くと微笑んだ。

「でも、せめて一言かけてくれたらよかったのに……」

「ごめんね。急に我慢できなくなっちゃって……」

私が申し訳ないように肩を竦めると。

「うつ……べ、別にいいわよ。過ぎたことは……（結構気持ち良かったなんて言えないし……／＼／＼／＼）」

「リリイ、ありがとう」

私がリリイに笑顔を向けるとリリイはまた顔を赤くして目をそらした。

「リリイ？」

私が心配そうな顔を見るとリリイは目をそらしたまま、

「わ、私でいいなら今度からも血を吸ってもいいからね？」

「……………え？」

リリイは更に顔を赤くして涙目になっている。それを見た私もおそろく顔が真っ赤だろう。

「べ、別に变なふうに思わないでね！私はエルダが困ってるから仕方なく助けてあげるだけなんだからね！」

「（ツ、ツンデレ！？）」

私はリリイがもしかしたら变な方に目覚めてしまったのではないかと心配したが、その原因は自分なので複雑な気持ちだった。

その後、リリイと一緒に食材や道具を買いに行った。

「ねえ、エルダ！服買いにいかない？」

リリイが目をキラキラさせながら私に聞いてきた。

「私は構わないわよ？」

「じゃあ決まりね！」

私達は服屋に入ってから色々を見て回った。

「ねえねえ！エルダ」

私が動きやすい服がないかを探していると、リリイが後ろから声をかけてきた。

「なに？リリイ……………！！」

振り返った私はそのまま固まった。リリイが目をキラキラさせながら私に差し出している物。

「これ着てみて！」

そう、白いフリルやレースで飾り付けられた白を基準にしたゴスロリの衣装だった。

「リリイ…それは…ちょっと……」

リリイはゆっくりと近づいて来る。背中がゾクリとした。

「エルダに似合うと思うんだけど……」

リリイは笑顔のまま近づいてくる。それが逆に怖い。

「い、いや……それは」

「着てくれるよね？」

「……え？だから……その」

「着てくれるよね？……それじゃ行きましょ？」

必死の言葉を見殺してリリイは私の手を掴み、試着室に連れていかれた。

「ちょっと待って！私まだ着るとは言っ……」

「大丈夫よ……私が着せてあげるから……うふふふ」

「い、いやあああああああああ……！！！」

私は勘違いをしていたようだ……リリイはもともと百合属性に目覚めていたらしい

私はその後、リリイに着せ替え人形にされてしまい、しかも散々体を触られた。

おそらく今日はある意味私の忘れられない一日となっただろう。

1・5 リリィとの休日（後書き）

自分ながらやりすぎた感じがします。エルダ……ごめんなさい）
・
（；）

1 - 6 縮まる距離（前書き）

ついに引き返せないところまで……

1 - 6 縮まる距離

学園の中にある寮のとある一室、そこに一人の少女がいた。腰まである銀色の髪をなびかせ蒼い瞳を細めて窓から外を眺めている。

コンコン

するとドアがノックされる。

「エルダ？リリィよ」

少女：エルダは扉へと視線を移した

「どうぞ」

扉を開けてセミロングの黒髪を揺らしながら緑色の瞳の少女：リリィが入ってきた。

「わざわざごめんなさいね」

エルダは少し申し訳なさそうに苦笑いを浮かべた。

「いいのよ、私がお願いしたんだから」

リリィは微笑んだ。瞳を細めてエルダを見る。

「…それで？どうだったの？」

リリイの言葉にエルダは少し頬を赤く染める。

「…ちゃんとできたわよ」

エルダの言葉にリリイはにっこり微笑む。

「じゃあ、見せて？」

エルダはゆっくり立ち上がるとリリイを上目遣いで見上げる

「…目を閉じてて」

「…うん」

リリイはゆっくり目を閉じた。エルダはそれを確認して一度深呼吸すると呟くように言葉を発する

「…チェンジ」

部屋が一瞬光に包まれた。

「もう、いいわよ」

リリイがゆっくりと目を開ける。そしてエルダを見て。驚いた顔をする。

「……どう？」

心配そうに聞くエルダをリリィは頬を赤くしながら見つめる。

「……………か」

「……………か？」

エルダは首を傾げる。しかし、次の瞬間

「可愛い〜〜！！」

「ふにゃ〜〜！！」

二つの叫びが寮に響いた。

私は現在リリィに抱きしめられている。何故か？それは……………

「エルダ！あなた凄いわね！本当に猫になるなんて！」

リリィが私の頭に顎をのせてはしゃいでいる。

そう、現在私は獣人族の力を使い猫に変身しているのだ。毛の色

は髪と同じ銀色で瞳も蒼だ。

一週間前、つまりリリイに噛み付いた日に私は彼女に自分の力について話していた。すると彼女はぜひ猫に変身してみせてほしいと言ってきたのだ。

どうしようか悩んだが私としても自分の力をきちんと使いこなしたいので練習ついでに承諾したのだ。

「もう完璧な猫じゃないの～～！！」

「リリイ、そろそろ降ろしてくれない？戻りたいわ」

リリイは渋々私を床に降ろした

「リバーズ」

私がそう唱えると体が一瞬輝きもとに戻っていた。

「他の動物にもなれるの？」

リリイが興味津々な顔で聞いてくる

「そうね、結構なれるわよ」

「いいなあ」

リリイが私に羨ましいという視線をむけてくる

私は最近リリイの笑顔が直視できなくなってきた。何だか胸の奥

がドキドキするのだ。前世が男だったからだろうか……

「ねえ、エルダ？聞いてる？」

リリイの言葉にハツとして私はリリイに向き直った。

「あ、ごめんなさい。ちょっと考え事してたわ」

「もう、仕方ないなあ。もう一回言っよ？今から湖に行かない？」

「湖って、私達が出会ったあの湖？」

「そう、大事な話があるの」

リリイはそう言つと少し頬を赤くした。私はいつもと様子が違うリリイに首を傾げつつも承諾した。

その頃、とある廃墟が並ぶ森のなかに大勢の人間が集まっていた。皆真っ白なローブやマントを着ている。

「隊長、準備が整いました」

鎧をきた男が隊長である男に声をかける。

「…そうか」

隊長と呼ばれた男はゆっくりと目を開けた。黒い瞳が鋭く光る。

隊長と呼ばれた男は立ち上がる。身長は190cmはあるだろう。青い髪は肩にかかるほどの長さだ。その身体は鍛え上げられた筋肉によって一回り大きく見える。

「全軍に伝える。これより新たな拠点を確保し、そこから首都に向かう」

「了解！」

兵士はそう言って部屋から出て行った。

「…さあ、開戦だ」

隊長が見下ろした机には地図があり新しい拠点とする街の名前に印がついていた。

その街の名前は……“アスタル”

私は寮の入口でリリイを待っていた。私の服装は白いワンピース。私が最初に着ていた服だ。

「お待たせ〜！」

寮からリリイが出てきた。ピンクのシャツの上に水色の薄いジャケットを羽織って黒のスカート姿だ。足は動きやすいようにサンダルである。手には花柄のランチボックスを持っている。

「今日は空を飛んでいくの？」

リリイが私に聞いてきた。私としても空を飛ぶのがいいが今は昼間である。人に見られる可能性があるので空は無理だ。

「リリイ、悪いけど空は駄目よ」

「ええ〜、私空を飛ぶの好きなんだけどなあ…」

リリイは私が初めてリリイに会った日に空を飛んで寮まで送った事で空を飛ぶのが好きになっていた。最近はや夜中にリリイの手を引きながら一緒に夜の空中散歩を楽しむほどだ。

「大丈夫よ、考えがあるから」

私はリリイに微笑んでみせると目を閉じる。

「チェンジ」

私が呟くと同時に私の身体が光に包まれ、そして光が消えるとそ

こには銀色の毛をした狐の姿をした私がいた。尻尾は9本、九狐である。大きさはジブリのもの○け姫に出てきた二匹の山犬くらいだ。

「うわぁ〜綺麗…」

リリイがうつとりと私を見ていた。何だか恥ずかしい。

「さあ、乗って」

するとリリイが驚いた表情になる。

「ええ！？まさかエルダに乗って行くの？」

「そうよ」

リリイは恐る恐る私に触れる。リリイの手の平にそって私の銀色の毛が流れる。

「凄い…感触はさらさらなのに意外とふわふわしてる」

私が身を屈めるとリリイがゆっくりと私にまたがる。しっかり座ったことを確認して私は立ち上がる。

「しっかり掴まってね」

「う、うん」

リリイは少し緊張しているようだ。私は微笑むと湖に向かって走り出した。

- リリイ Side -

ああ、私は今なんて貴重な経験をしているんだろう……

狐の姿になったエルダにまたがって森の中を疾走するだけならまだ我慢もできたのに……ああ、この毛並みの良さ！

私の頭の中では今まさに半獣化した狐耳と尻尾のついたエルダと『ピュ〜』している光景が…

「うふ…うふふふふ…だめよ…エルダ…そんなところ……」

- エルダ Side -

ソクリッ

「……………ひっ！」

私は突然背中に寒気を感じ変な声を出してしまった。

「うふ…うふふふふ……だめよ…エルダ…そんなところ……」

背中でリリイが何か呟いていたけど気にしないことにした。

- Side Out -

湖についた二人は湖のふちで休憩していた。

到着した時にリリイが鼻から赤い液体を出していたがエルダはあえてその事に触れなかった。

「リリイ…落ち着いた？」

エルダが引きつった笑顔を向ける先でリリイはまだ鼻息が荒かった。

「ハア…ハア……だ、大丈夫よエルダ…うふふふふ」

エルダはまたゾクリと背中に寒気を感じた。

『マスター……頑張ってください』

シャルが励ましの言葉を送ってくれたが全然嬉しくなさそうなエ

ルダは今にも逃げ出しそうだ。

- リリイ Side -

今日こそ私は自分の気持ちを目の前にいる愛しい人に打ち明けた
い！

思えば初めてこの湖で出会ったあの日から私は彼女をずっと見て
いた。

それから毎日学校で過ごすうちに更に惹かれていった。彼女のあ
の美しい容姿だけではない。仲間を思う優しさ。

そして…

一週間前のあの出来事。彼女の部屋に入った途端に抱きしめられ
て噛み付かれた。

不思議と恐怖や驚きは無く、ただ嬉しかった。形はどうあれ私は
あの時この人には全てを捧げていいと思った。

そう、私はエルダを……愛してしまったのだから……

- エルダ Side -

先程と違ってリリイは頬をうつすら染めながら何かを考えていた。
何故か私はその顔を見た途端に彼女を守ってあげたいと強く感じた。

- いつまでも一緒にいたい -

私にとってリリイはこの世界にきてから最初の友達だ。

いや、親友か?...それも違う...私が怪我をした時は私を一番に心配してくれた。

一週間前には「私の血なら吸ってもいい」とまで言ってくれた。

胸が暖かくなる感覚：鼓動が早くなり体が熱くなる。

この感覚は一体何だろう？

リリイは私にとって何だ？

私はリリィをどう思っている？

離れたくない……そう……一緒にいたい……そうか……私はリリィが

……

……好きなんだ

1 - 6 縮まる距離（後書き）

次回はついに……

1 - 7 届いた思い（前書き）

やっちゃんいました……

1 - 7 届いた思い

- エルダ Side -

どれくらいこうしていたのだろう。私はリリーの横顔をずっと眺めていた。

（私は…リリーのことが好きなんだ）

自然と浮かんだその気持ち。その気持ちに答えるように鼓動が早い…体が熱い…

リリーがゆつくりと顔をこっちに向けた。

「……………」

私は咄嗟に顔を背けた。今私の顔は真っ赤にちがいない。

「ねえ…エルダ」

リリーの声がやけに大きく聞こえた。風や草木がざわめく音さえもはや聞こえない。

私はゆつくりと振り返る。そこにあっただのは恥ずかしそうに私を見つめるリリーがいた。緑の瞳は潤んでいる。

「エルダは…私のこと…どう思ってる？」

心臓がドクンと大きく跳ねる。

「わ、私は……その……」

リリイは静かに私を見ている。

「リリイは……私にとって…大切な……人…かな」

私は頭の中が混乱していてうまく考えられない。心臓も今にも爆発するのではないかというくらいに跳ねている。

「私はね……エルダが好きだよ……」

私はハッとしてリリイを見た。

「ううん…愛してるって言ってもいい」

私は一瞬呆然となったがリリイが同じ 気持ちだったことを知って嬉しかった。

「リリイ…私も……リリイのこと…好きだよ……」

その言葉を聞いた瞬間、リリイは私に抱き着いた。

「ひゃっ！……リリイ、ちょっとま……んっ！」

私が言い終わる前にリリイの顔が目の前に迫り、唇を塞がれた。

「……んっ……くちゅ……あ…リリイ……」

「……くちゅ……ふっ……ちゅ……」

そして、私はそのままリリィに押し倒された。

・リリィ Side・

嬉しかった

彼女が自分を見てくれていたことが

だから思わず抱きしめた

そしてそのままキスをした

彼女が欲しくてたまらなかった

「エルダ…」

私は今彼女を押し倒してその上で四つん這いの状態だった。

「…あ…リリィ」

彼女は顔を赤くしてその蒼い瞳は涙で潤んでいる。そんな彼女が愛しくてまたキスをした。

「……ん」

「……ふ」

さつきと違って触れるだけのキス。それだけで全身が痺れるような感覚に陥る。

私はそのまま彼女の左耳をくわえた。

「……ひっ！……んああああ！」

その途端、彼女の体がビクンと跳ねた。耳が弱いようだ。それなら……

私は反対の耳も同じようにくわえた。

「……！ひっ！だめええええ！……そっちは……だ……めえ……」

さつきよりも大きく体が跳ねる。右耳のほうが弱いようだ。

「リリイ……ちょっと……まっ……」

「……待たないよ」

彼女が言う前に耳元で息を吹き掛けるように囁く。

「……ひっ！」

それだけで彼女は身をよじる。

私は手を胸にある二つの膨らみにもっていく。小柄な体なのに自分よりも大きい膨らみ。それを優しく撫でる。

「あつ……んっ」

私が指を動かすたびに彼女の口から漏れる喘ぎ声がひどくいやらしい。

「エルダ…愛してるわ…」

- エルダ Side -

ゆっくりと瞳を開ける。目の前にはリリイの寝顔があった。

いつの間に気を失っていたのか…確か3回目の絶頂を迎えたあたりから記憶がない……

「……………！」

私はリリイとの行為を思い出して顔がいつきに赤くなった。

（わ、私はリリイとな、ななななんてことを！）

私の隣にはまだリリイがすやすやと寝息をたてている。

その顔を見るとさっきまでの執着心は綺麗に消えてしまった。かわりに頬が自然と緩む。

「……………ん…エルダ？」

しばらくリリイの顔を見ているとリリイが目を覚ました。

「おはよう、リリイ」

「……………うん／＼／＼」

リリイは頬を染めながら頷いた。

「エルダって凄いね……………」

「……………え？」

私は言われた意味がわからず首を傾げた。

「初めは私のペースだったのに……………3回イッたあたりから逆に私が弄られて……………あの時のエルダ…凄かった」

「……………なっ！？」

私の記憶がない間にいったい何があったのだろうか。

私達がやっと帰り支度をすませたのはすっかり日が暮れるころだった。

「…エルダ？」

「……なに？」

リリイが私を見つめながら呟いた。

「……ずっと一緒にいようね」

「……！……うん／＼／＼／」

私は恥ずかしくなって目を逸らした。

「じゃあ……帰ろうか」

「……うん！」

私達は手を繋ぎながら湖をあとにした。

帰り道はまた狐になった私にリリイが乗って帰ることになり、私達は森の中を走っていた。

（私…これからどうしよう……）

私はずっとさっきから同じようなことを考えていた。

私はリリイとずっと一緒にいたい……でも私は天使。不老不死であり死ぬことはない。

でも…リリイは普通の人間。寿命だつてある。私はリリイがいなくなつた後はどうすればいいのだろう。

実はリリイを不老不死にすることもできる。管理者である私なら…しかし、それがリリイを苦しめないか心配なのだ。私のためだけに永遠と一緒にいてくれるかが……

「ねえ…リリイ？」

私は思いきつて聞くことにした。後で後悔した方が辛いから…どうせなら早い方がいい。

「なに？エルダ」

「私はね…寿命がないの」

「天使だから？」

「…うん」

背中から真剣な眼差しが伝わってくるのがわかる。

「人間……いや、私みたいな天使でも永遠の時間は一人で過ごすのは……辛い」

「……………」

「だから……リリイ……私と一緒に生きてくれない？この世界が終わる……その時まで……」

私はおそらく震えていただろう。全身から力が抜けそうな感覚だった。

「……………」

リリイは何も言わない。この沈黙が辛かった。

「……………エルダ」

私は自然に立ち止まった。足がガクガクしている。

「……………私は……」

ドゴオオオン！！

「……………！」

「……………え？」

突然の爆発音に私は即座に走り出していった。森を走り抜けて近くの丘の上に出る。

そこから見えた光景に私もリリイも啞然となった。

丘の向こうの広大な平原をうめつくす程の人の列。真っ白なローブと鎧を着た人の波がゆっくりだがまっすぐこちらに向かってくる。

「あ、あれは……反政府軍……なんて数なの……」

リリイの震える声が聞こえる。

私達の後ろにはアスタルの街がある。

間違いない。この街に攻め入るつもりだ。私は直感的にそう感じた。

「リリイ……街に行つてこのことを伝えて！」

「……え？」

「私はあいつらをなんとかするから！」

「嫌よ！エルダだけ置いていくなんて！」

私はもとの姿に戻るとリリイを抱きしめる。

「大丈夫、私は天使だから……」

「……でも！」

私はリリィからゆっくり離れると背中を向けた。

「さあ！行って！」

「エルダア……」

リリィは泣きそうになっていた。

「大丈夫、私が守るから」

私は翼を広げてその場から飛び去った

街を、大切な人を守るために……

1・7 届いた思い（後書き）

白夜「どうも白夜です」

エルダ「エルダよ！」

白「次回から戦闘になります。やっと戦闘シーンが書けますね」

エ「そうね、今まで戦闘している時間はあまり長くなかったし」

白「今回は魔法もばんばん入れていきます！」

エ「よし、暴れるわよ〜！」

白「愛する人を守るために！」

エ「~~~~~／／／／／／」

白「あれ？エルダ？どうかし……ま、まった！それは今使ったら駄目……」

エ「問答無用！〜！」

白「ぎゃあああああああああああああ〜！」

1 - 8 平原の激戦（前書き）

うまく書けていたらいいんですが……

1 - 8 平原の激戦

- エルダ Side -

平原の真ん中に私は立っている。目の前には何十万人という数の反政府軍がいる。

「隊長は誰ですか？」

私は魔法で大きくした声で尋ねる。

すると軍隊の最後尾あたりから同じように声が返ってきた。

「私が隊長のメウガ・バルバラスだ。子供がここで何をしている？」

私は軍隊全体を睨む。

「あなた達はこの先の街を襲うつもりですか？」

私としては無駄に人の命は奪いたくない。

「その通りだ。我々には拠点が必要なのだ」

「街の人はどうするのですか？」

私はいつでも動けるように構える。

「街の住人には悪いが現在の政府に加担する者を許すつもりはない」

「関係ない人達を巻き込むのですか！」

「今までもそうしてきた」

「ふざけるな！」

私が叫ぶと同時に右手にシャルが現れる。

『マスター…人は殺したくないですか？』

「……………」

確かに私は迷ってる。街の守りたい、でも天使として…管理者としては誰一人として殺したくはない。

『マスター…神様が言っていましたよね。マスターは管理者でありその世界の住人なんですよ。』

何かを守るために何かを犠牲にしなければならない時もあります…だから』

私はシャルをゆっくり胸に抱く。シャルに一粒の雫が落ちた。

『泣かないでください。マスター…仕方のないことです』

「わかってる…覚悟はできてる」

この間軍隊はなぜか一步も動かなかった。

「私はもう迷わない…」

髪がゆつくりと紫に染まりだした。

「もう泣かない」

開いた瞳は血のように赤い。

「全力で」

開いた口からは牙が見える。

「守るべきものを守る！」

ゆつくりと自分に聞かせるように唱える。浮かぶのは夢で見た自分

『アンチモード、発動』

黒い翼が現れ、私は飛んだ。

- リリイ Side -

私は走った。少しでも早く愛しい人を救うために。

先程街への連絡は済んだ。今は街の住人を避難させているはずだ。
でも私は彼女のそばにいたい。

「…まだ私、返事言ってない！」

彼女が言ったことを思い出す。

『私と一緒に生きてくれない？この世界が終わる…その時まで…』

伝えなきゃ、私の思いを！

だから…少しでも早く彼女のもとへ…

- エルダ Side -

私は空中で魔法を避けながら魔法を唱える。

『大気を廻る風達よ 我が呼び声に応え 敵を滅せよ - サイクロ
ン！-！』

私の目の前に巨大な竜巻が発生する。近くにいる人間は竜巻が起す鎌鼬でバラバラになるだろう。

「まだ終わらないわよ！『昇華』！！」

私が新しく魔法に複雑な呪文を追加する。

『わずかな塵も残さず虚無へと消え去れ――テンペスト！』

呪文の言葉に導かれるように竜巻が分裂し辺り一面の空気を排除する。

「弾ける！」

私が叫ぶのと同時に竜巻が作り出した真空の空間が弾け飛び、その衝撃は鋭い刃となって辺りを切り刻む。

今でおそらく先兵は全滅だ。

「シャル、行くわよ！！」

『了解です！』

シャルを顔の横で突きの状態に構える。

「幻影剣・朧月」

夕日を背にシャルを突き出す。するとシャルの分身がいくつも現れる。

「降り注げ！幻影剣・流星！」

一斉に放たれたシャルの分身はまるで隕石のように地面にクレターを作った。

「まだまだ！」

シャルを振りかぶるように構える。

「シャル！限定解除！」

『了解！』

シャルが金色に輝く。そこから魔力が溢れてくる。

『「閃光一閃！黄龍槍！！」』

振り下ろしたシャルから黄金の龍が現れ軍隊の半分を飲み込み大爆発した。

- メウガSide -

「凄まじいな…」

長年軍人として戦場を見てきたがこのような光景は初めてだった。

竜巻を起こすあの魔法は風属性最上級魔法だ。更にその次に出たあの魔法は『テンペスト』…失われた古代魔法だ。

それをあの14歳程の少女が使っている。それだけはない。剣の幻を作り出しそれを雨のように降らせた。あのような魔法は見たことがない。

ドゴオオオン！！

爆音と共にまばゆい光に一瞬辺りが見えなくなった。

「報告です！新たに敵が再び詳細不明な魔法を発動！我が軍の半数がやられました！」

「…ふむ」

まさか少女一人に我が軍が壊滅状態にされるとはな。

「魔術師達は一カ所に集め協力して魔法を放て！剣士は相手を包囲して隙を狙え！見た目に惑わされるな！」

「了解！」

おそらく我々は勝てないだろう。しかし退くつもりはない。それが我等の生き様なのだから。

- エルダ Side -

「はあ…はあ…まさか…あの技を見せても怯まないなんて」

あれだけの威力の技を見せたら多少は士気を落とせると思っていたけど……

『まさか全然怯まないとは…』

大技を使ったせいで魔力が足りない。私は無限に魔力があると最初に言ったが実は弱点は存在する。

確かに魔力が底をつくことはない。しかしそれは周囲の空間から無限に魔力を得られということで、この体に蓄えられる魔力は決まっている。

それでも最上級魔術師の軽く3倍は蓄えられるが…とにかく、今私にはあまり魔力が残っていないため回復するまであまり魔法は使えない。

私はシャルを構えると敵の中心に飛び込んだ。

「はあ！」

着地と同時に目の前の兵士の首を飛ばす。返り血で白のワンピースに赤黒い染みができる。

『マスター！避けてください！』

「……………！」

25メートル先に魔術師が固まって魔法を詠唱している。

私は反射的に左に跳んだ。

その瞬間巨大な炎の槍が飛んできて爆発した

「…っあっ！」

爆風で吹き飛ばされた私は地面を数回転げて仰向けに倒れた。

「……………っ」

背中を強く地面にぶつけたためにうまく体が動かない。

「っおおおお」

すると一人の兵士が私の腹目掛けて剣を突き刺した。

ドスッ

「……………！！」

私は声にならない叫びをあげながもその兵士を蹴り飛ばした。

「…うつ…げほっ」

口から大量の血が流れる。すぐに傷を再生させて再び前方を睨む。

左手に一丁の銃を創造の力で作り出す。真っ白な銃身の長いリボルバータイプの銃だ。これにはあらかじめ魔力が込められた球をセツトしてある。

私はさっきの魔術師の集団に向かって引き金を引く。するとまるで雷のような音と共に紫電が走る。すると着弾地点に空から雷が落ちた。

魔術師は全員黒焦げになっていた。

「はぁ…はぁ…」

まだ半分くらいしか魔力が溜まってない。

私は呼吸を整えると再び走り出した。

- Side Out -

あれから何時間たったのか…

辺りは暗闇に包まれていた。

少女は一人の男と向かい合っていた。

「……ふむ」

男は顔をしかめる

「まさか、お前のような娘に我が軍が全滅とはな…」

「あなたは何故残っていたのですか？逃げようと思えば逃げられたでしょう？」

少女：エルダは男に問い掛ける。エルダは全身が返り血赤黒く染まっている。それでも傷は全て回復し、真っ赤な瞳には今だにゆるぎない決意が見えるようだった。

「ははは、部下を全てなくしてまで逃げたところで何が出来ようか」

「……………」

目の前の男、メウガは敗北が決定的なこの戦場で今だに威厳をなくしていない様子に見えた。

「一つ問う…お前は何のために戦う？」

鋭い男の視線を真つ正面から受けてエルダは答える

「私の大切なものを守るため…」

男は微かに笑うと武器である剣を構えた。

「お前の決意は確かなものだ…それに私は全力で答えよう」

「……………」

お互いに武器を持ったまま動かない。

二人の間に飛んできてきた落ち葉が突然弾けた瞬間、二人は地面を蹴った。

「はあああ！」

「やあああ！」

二つの武器がぶつかり合う。満月を背に戦う二人はまるで剣舞を舞っているようだった。

エルダは光の光弾を3つメウガに飛ばす。メウガはそれを剣で弾き飛ばした。

エルダは一歩下がると詠唱を開始する。

『汝きらめく……』

「さっせんぞー！」

メウガは一瞬で距離を縮めると剣を横に振り抜く。

「……っ！」

エルダは一步下がって回避しようとするが遅かった。

「――斬！」

エルダの体に剣が触れる瞬間、幻のように彼女は消えた。

「何！？」

そしてメウガの全身から血が吹き出した。

「幻影剣・陽炎」

エルダはメウガの後ろに立っていた。

「……ぐっ、見事だ」

その言葉を最後に反政府軍隊長はその場に倒れた。

「……終わった」

エルダは満月を見上げてその場に立ち尽くしていた。

エルダは満月をただ眺ていた。

いつまでそうしていたのかわからない。すると不意に背後に気配を感じたので振り返った。

「…リリイ」

口が自然と動いた。そこにいたのは自分の愛した愛しい人

「……………」

リリイは何も言わずにエルダを見つめていた。普通なら恐怖を抱くような惨劇の跡よりも目の前に立つ少女に目を奪われた。

満月を背に漆黒の翼を広げ紫の長い髪、真っ赤な瞳、全身血だらけだがそれさえ一部として取り込んでしまったような彼女をみてリリイはただ“美しい”そして“愛しい”と感じた。

リリイはゆっくり近づくとゆっくりと、そして優しくエルダを抱きしめた。

エルダの翼が真っ白に変わり、瞳と髪も元に戻り、そしてリリイに抱きしめられたままエルダはゆっくりと意識を手放した。

「…エルダ……お疲れ様」

リリイは安らかな寝顔を見せるエルダにそう呟いた。

月が二人を照らしていた。

1 - 8 平原の激戦（後書き）

白夜「ふう、疲れた」

エルダ「あなたまだテストが残ってるのに勉強しなくていいの？」

白「大丈夫だよ、ちゃんと勉強してるよ」

エ「本当に？」

白「ホ、ホントだよ」

エ「（……大丈夫なのかな）」

1 - 9 契約（前書き）

キャラクタープロフィール3

フィアナ・ルツ・フレイラル

年齢17歳

身長160cm

長い金髪に茶色い瞳が特長のいかにもお嬢様みたいな感じの女の子。負けず嫌いで成績がエルダに負けていたので彼女をライバル視していた。しかし、彼女に助けられてからは密かに好意を抱いている。

1 - 9 契約

真っ暗な部屋で一人の女性が椅子に座っていた。

見た目は20代前半くらいの美しい女性だ。漆黒の髪は立ち上がっても床につくほど長い。瞳もまがましい雰囲気をもしだす程の漆黒。

「……あらあら、やっぱり普通の人間では駄目ねえ」

女は鋭い目つきで何もない空間を睨んでいた。

「忌ま忌ましい……この結界がなければ私自ら手を下すのに……」

女はそう言つとその場から消えた。後に残るのは静寂のみ……

「……んっ」

淡い眠りから目覚めてエルダはゆっくりと体を起こした。

そこは見慣れた自分の部屋。それをぼんやりと眺める。

ふと隣を見るとリリイが椅子に座ったまま眠っていた。

（そういえば私あのまま寝ちゃったんだっけ…）

エルダは戦場の光景を思い出す。自分が奪った数々の命。本当にあれ以外に方法はなかったのだろうか…そう今でも思ってしまう。

でも、私は選んだのだ。甘さはすてる。皆を守ると…

「……うん」

しばらくしてリリイが目を覚ました。
まだ眠いのか目が虚ろである。

「リリイ、おはよう」

リリイがエルダの方を向いてそのままぼーっとしていたがやがて意識がちゃんと覚醒したリリイは勢いよくエルダに抱き着いた。

「エルダァー！」

「きゃあー！」

そのまま押し倒されてしばらくリリイはエルダを離さなかった。

「よかったよー！酷い怪我とかしてなくて」

「…うん、心配かけたね」

エルダがリリイを抱きしめ返すとリリイは再び椅子に戻った。

「あの時は大変だったよ。だってエルダってば血まみれなんだから。どこかがしたんじゃないかって心配したよ」

エルダはリリイの言葉に苦笑いを返す。確かに殆どが返り血だが全く怪我をしなかったわけではない。

実際に腹に剣を突き刺された。普通の人間なら間違いなくそのままあの世行きである。

「……痛かったな」

エルダは小さく呟き腹を少しさすった。

「どうかしたの？」

「…いや、何でもないわ」

エルダは改めて自分の回復力に感謝した。しかし、あれだけの深手を治療したわけだから当然以前のように血が欲しくなるわけで…

「ねえ、リリイ？」

「何？エルダ？」

リリイがエルダを見ると何やらもじもじと落ち着かないように体を動かしている。

「（はあ〜可愛いわあ〜）」

リリイが危うく別の世界に行きそうになったところでエルダが決心したようにリリイを見ると口を開いた。

「その、血が欲しいの…」

恥ずかしそうに赤くなりながら上目遣いでお願いをするエルダの姿は今のリリイの中の悪戯心を十分に刺激した。

「……って呼んで」

「……え？」

「お姉ちゃんお願いしますって言ったらあげるわよ？」

「……なっ!？」

リリイの言葉にエルダは思わず顔を真っ赤にする。

「な、なな何でそうなる…のよ」

リリイは意地悪な笑顔を向けるとわざと服の衿元を開いて見せる。

「ほらほら〜欲しいいでしょ〜？」

「…うつ…あ、ああ…そんな」

本能が血を欲しがるのに近づけばリリイは巧みにそれを避けてみ

せる。そんな一種の生殺しみたいな状態にエルダはとうとう観念した。

「…ううゝお、お姉ちゃん！私に血をください！」

「ぶはっ！！」

先程の顔を赤くした上目遣いに加えて涙目とお姉ちゃん発言にリイは鼻血を出してその場に倒れた。

「……これ、私が血を飲んだら貧血になるよね」

結局リイが復活するまでお預け状態だったエルダはリイが復活した後、何かを言う前に即座に噛み付いて血をもらった。

その後はいつものように髪の色を黒にして学校に行く支度を済ませ、二人で寮を出た。

サイとシャーリーとルイス、フィアナに挨拶をして教室に入る。

全員で一カ所に集まるとサイが最初に口を開く。

「それにしても、反政府軍の奴らもこんな時に来なくてもいいのになあ」

「私としては二度と関わりたくないですわ…」

フィアナはおそらく森での演習を思い出していたんだろう。

「でも、結局反政府軍を倒した人は誰かわからないんでしょう？」

シャーリーの言葉にエルダとリリイが一瞬表情を歪める。

「確かに、実際の戦場は見えていないが、相当の人数だったようだ。それを一人で全滅させるなどにわかには信じがたい」

淡々と告げるルイスを横目にエルダはため息をはいた。

あの後、リリイがなんとか他の人達が来る前にエルダを連れて帰ったがどうやら戦闘を一部見ていたらしい人物がいたらしく戦ったのは一人で、しかも翼のある人だったとあちこちに言いふらしたらしいのだ。

エルダとしては自分だとばれていないだけでもかなり良かったかもしれないがどうも不安でしょうがないのだ。

「変なことにならないといいけど…」

エルダがそう呟くと同時に授業開始の合図が鳴った。

学校が終わり、夕食を済ませた後、リリイとエルダは寮の屋上に来ていた。

「じゃあ、今日も行くのか」

「…うん」

リリイの手をしっかりと握り、エルダは翼を羽ばたかせて空に舞い上がる。

最近日課になったリリイとの空中散歩だ。夜ならば人目につかないため二人はゆっくりと星空を見ながら空を飛ぶ。

「……やっぱり空を飛ぶのは気持ちいいね」

「…そうね」

リリイの言葉にエルダは頷く。エルダの銀髪が月の光を反射してキラキラ光る。リリイは手を引かれながらそれを眺めていた。

「…ねえ、エルダ」

不意にリリイがエルダに声をかけた。

「どうしたの？リリイ」

リリイはしばらく俯いて何も言わなかったがゆっくりと顔を上げた。

「この前の返事なんだけど…」

エルダはその場に止まってリリイを自分と同じ高さまで引っぱりあげて体を支える。そうすると自然に抱き合うような形になった。

「私はね、家族がいないんだ…」

リリイの言葉をエルダは黙って聞いている。

「皆、五年前に反政府軍に殺されたの」

リリイは父と母と姉とリリイの四人家族だったらしい。

「いつもと同じような朝だったわ。私は元々小さな村に住んでいたの。あの日は私がお昼ご飯を食べたあと一人で山に花を摘みに行ったの。村の近くの山には年中色々な花が咲いてる場所があつてね…私はそこで花を摘んでるうちに眠くなっちゃって、起きたのはすっかり夕方だった。」

リリイの抱き着く力が少し強くなる。

「私は急いで村に帰った。そしたら…村は無くなつてた。跡形もなくね。ただ一面焼けた家と、人がころがってるだけだった…朝まで平和だった村は…もう、なくなつてた…」

リリイの声が震えてるのがエルダにはわかった。

「私は…それから親戚の人に引き取られて今まで生活してきたわ…そして今の学校に入った…周りの皆が羨ましかった…入学式にはちゃんと親や祝ってくれる人がいて…」

リリイはエルダと向かい合う。

「入学してすぐに私の村を襲ったのが反政府軍だつてわかったの。私は悔しくて必死に勉強して、いつか仕返しするんだって思ってた」

エルダは黙って彼女を見つめる。

「そんな時にあなたに出会った。あの湖でね。そしてエルダを見てたら何だか今までの自分が馬鹿みたいに思えてきたのよ。」

エルダは誰かのためなら自分を犠牲にするような人だからさ……それに比べたら復讐なんて考えてる私は何だろうって考えたの」

リリイは少し笑うと話しを続ける。

「今まで自分のことばかりで他人のことなんて考えたこともなかったのに……エルダに初めて噛まれた日にね、私も誰かの役に立てるって初めて気がついた。」

それを教えてくれたエルダが今まで以上に好きになって、エルダと一緒に生きてくれないかって聞かれた時は本当に嬉しかった……だから」

リリイはエルダを真っ直ぐ見つめて言う。

「あなたと……一緒に……生きていいですか？」

エルダの答えは最初から決まってる。今更だというようにリリイを抱きしめる。

「もちろん。これからよろしくね……リリイ」

それを聞いた瞬間リリイの目から大粒の涙が零れた。しかし、リリイの表情はどこか満足そうだった。

「リリイ、手を出して？」

リリイが右手を出すとそこに緑色のリングが現れた。

「これは私との契約の証だよ」

エルダはリングをリリイの右手の薬指にはめた。

「…不思議、何だか暖かい」

リリイはリングから暖かいものが流れてくるように感じた。

そして、ふわりと体が軽くなり自然とエルダの体から手を離す。

「……あ」

思わずリリイは声を漏らす。リリイの背中には純白の翼があった。エルダよりも一回り小さいが、確かにリリイの背中に繋がっている。

「……エルダ、私達…ずっと一緒だよね？」

「ええ、ずっと一緒よ」

月を背にして二つの影が再び重なり合った。

1 - 9 契約（後書き）

すみません、今回はちょっと駆け足でした。文章力なくてすいません（汗）

誤字を訂正しました。たぶん大丈夫です。

1 - 1 0 魔法学（前書き）

なんだかどんどんエルダのキャラが変わってきたような…

晴れ渡る青空を見ながらエルダは窓側の席に座り、頬杖をついていた。

ちなみに現在は数学の授業中である。そんな時でもエルダは窓から外を眺めている。

季節も夏に変わりそろそろ蒸し暑くなってくる頃であり生徒が気分転換に席替えをしようと言い出して窓際が一番後ろという場所を確保したエルダはほとんど外ばかりを眺めている。

別に勉強をサボっているわけではない。空を眺め、なおかつ平和だなあと心で呟きながら耳から入ってくる先生の言葉を理解し、ノートに書くという素晴らしい荒業をやつてのけている。

天使だから、という理由だけでなく元々エルダの情報処理能力が高いからこそできるのだ。

「では、エルダさん。この問題を解いてみてください」

「はい」

教師に名前を呼ばれたエルダは黒板にすらすらと答えを書いてまた自分の席に戻ると、再び外を眺めた。

慣れとは恐ろしいもので、全く黒板をみていなかったエルダが完

壁に答えを書いてしまったことに驚く者はもはや極少数であり。ほとんども「まあ、エルダだからなあ」という感じである。

すでに全校生徒が知っていることであり、先生達さえこの現状を見て仕方がないと言わせるほどだ。

実際エルダはほとんどの授業では窓から外を眺めるか、寝ている。寝ていても手はしっかり動いているのでもはやパソコンよりも高性能と言えるかもしれない。

午前中の授業全てをやる気のない形で受けるエルダだが、一つだけ真剣に取り組んでいるものがある。

「リリイ、午後からの授業は何だったかしら？」

「ああ、確か魔法学じゃなかったっけ？」

それを聞いた瞬間にエルダの顔色が変わった。そう、エルダが真剣に取り組んでいるのは魔法学、いわゆる魔術やそれに関係することを学ぶための科目である。

「エルダって本当に魔法学好きよね」

リリイの言葉にエルダはムツとした表情を作る。

「楽しいじゃない。私は魔法が好きだし、オリジナルの魔法の研究にもなるしね！」

ちなみにエルダは現在新しい魔法の研究に乗り出している。色々と属性を混ぜ合わせてみたり二種類同時に使ってみたりしてみるのが、

中々上手くできない。

「うーん何がいけないんだろ」

なんとか原因を探るが中々いい結果が浮かばない。

しかし、意外なところでその問題は解決した。

「よし、今から魔法学の授業を始めろ。今日は魔法の相性と多重発動についてだ」

「（ラッキー！丁度いい時にきたわ！）」

その後の話を簡単にまとめると、魔法には相性があり相性がいい魔法どうしを組み合わせることにより多重魔法と呼ばれる魔法を発動できるらしい。

例えば火と風の二つを組み合わせた場合は火の魔法を風の魔法がサポートする形になりスピードや威力、範囲が格段に上がる。火だねに風を送るといきよいよく燃えるのと同じ原理だ。

ちなみにエルダ本人とエルダと契約したりリイには天使だけが使える光属性の魔法があるが、これは全ての属性と相性がいい。

「凄い、これなら一時間もあれば50個くらいはオリジナルの魔法が作れるわね…」

今のエルダは完全にオリジナル魔法の研究に没頭しておりリイ以外の人が話かけても反応しないほどだ。

「エルダさん、授業終わりましたよ？」

「……………」

シャーリーが話しかけるが反応無しである。

「……リリイさんよろしくお願いします」

「はぁ……仕方ないなあ」

リリイはエルダの耳元で何かを呟く。

「うわあああああああゝ！！！」

するとエルダは顔を真っ赤にして飛び上がった。

「エルダ、授業終わったよ」

「リ、リリイ……あ、ありがとう……」

シャーリーやサイは何を言われたのか知リたがったがエルダが猛反対するので結局わからず仕舞いである。

寮に帰った後、エルダはリリイと共に草原に出かけると魔法の練習を始めた。

「えつと火は風と、水は雷、氷は土と相性がいいのよね」

リリイが今日の授業の復習をするかのように呟く。

「そう、まずは試してみましよう」

エルダは右手を真つすぐに伸ばして詠唱する。

<我が前に現れるは焰の嵐、フレアトルネード！>

すると目の前に炎の竜巻が現れる。普通に炎や風を単体で出すより強力だ。

「す、凄い…」

リリイは啞然とした表情をしている。

「成る程、確かに強力ね…」

エルダはどこか満足そうである。

「……あつ！ひらめいた！」

エルダがいきなり顔を輝かせたのでリリイは首を傾げる。

「ふふ、リリイ見てなさい！面白いもの見せてあげる」

そう言つてエルダは両手を伸ばす。

<重力に従い大地にひれ伏せ、グラビティ！>

すると目の前の空間が歪み突然直径十メートルくらいのクレーターができた。

「……なっ！」

リリイは思わず驚きの声を漏らした。

「エルダ、今のはどんな属性を組み合わせたの？」

「今のは光をベースにして雷と地を組み合わせたの」

リリイは首を傾げる。雷と地は相性が悪いはずだ。

「普通なら相性が悪いけど私達には光属性があるから、それを土台にして調節したのよ。これなら私達は属性の相性なんてあまり関係ないのかもね！」

リリイは驚愕する。もはや世界の理を無視した力である。改めてエルダは凄いと実感した。

つつい夢中になりすぎて寮に帰ったのは夜中だった。玄関は閉まっているので空を飛んで屋上から中に入った。

しかし、このことが後に大変な騒ぎを起こすことを二人はまだ知らない。

1 - 10 魔法学（後書き）

明日から大学の部活の合宿が始まります。

はたして私は生き残ることができるでしょうか…
生きていたら執筆しようと思います。

1 - 1 1 忍び寄る影（前書き）

白夜「…合宿が…ここまで…つかいとは……」
「がくっ」

エルダ「もうやめて！白夜のライフは0よ！…」

1 - 1 1 忍び寄る影

ここのところ晴ればかり続いていた空も今日は厚い雲がかかり、
今にも一雨きそうな雰囲気だ。

そんな空の下を歩くのはセミロングの黒髪を揺らした二人の少女、
エルダとリリイである。

「何だか一雨きそうだね…洗濯物乾くかなあ」

リリイの呟きにエルダもため息をつく。エルダは雨が嫌いらしく
雲を睨んでいる。

「魔法で雲なんか吹き飛ばしてやろうかな」

「…エルダ、大自然に喧嘩売るつもりなの？」

リリイが呆れた顔をしながらエルダをみる。

「…大自然に喧嘩かあ、上等じゃないの」

諦めるどころか更にやる気になったエルダの態度にリリイは額に
手をあててため息をはいた。

学校が見えるにつれて生徒の数も増えてくる。学校の入口が見え
た時、不意に二人は足を止めた。

「……何？…あれ」

リリイとエルダの視線の先にあるのは掲示板。そこに固まる人、人。まさに人の大群。

あまりの数にエルダとリリイは啞然とする。

おそらく全校生徒が集まっているのだろう。

「……おい」

突然近くの林から声が聞こえて二人はビクリとして同時に振り返った。そこにいたのはリリイの幼なじみのサイ。

「…あなた、何してるの？」

あきらかに引いている二人にサイは慌てて首をふる。

「ち、違つぞ！？色々大変だから隠れているだけだ！」

サイに言われて渋々林の中に入った二人にサイは一枚の紙を手渡した。

「…なにこれ、校内新聞じゃないの」

この学校にも校内新聞は存在する。主に先生からの連絡や学校行事の連絡等に使われる。

「…その新聞の見出しを見てみな」

エルダとリリイは新聞の見出しを同時に見て、同時に固まった。

見出しには『二人の天使あらわる！？』学生寮に入る天使らしき影を確認！……』と書いてあった。

- 内容 -

『昨夜、我が学園の学生寮の屋上に二人の天使が降り立つのをある学生が目撃した。

その学生の話によると、二人はどちらもセミロングの黒髪をしており、背中には純白の翼があったらしい。魔術で作り出した可能性もあるが、その生徒によると魔術が発動している気配はなかったらしい。

我々は学生の中に本物の天使がいるのでは、という可能性にいたった。先日 of 平原での目撃情報もあるためすぐにでも調査を始めたいとおもつ。

新聞部
『

二人が声をなくしていると、サイが更なる爆弾発言をした。

「ちなみに俺の記憶に間違えがなければ……この学校でセミロングの黒髪の女子はおまえらだけだ。つまり必然的におまえらが真っ先に疑われるわけだな」

サイの言葉にエルダ頭を抱え、リリイは木にもたれかかる。二人の周りに黒いオーラが見えるほど二人は落ち込んでいた。

「ところで、エルダはわかるがリリイに翼があるのはなんでだ？」

サイが真剣な顔で聞いてきたのでエルダは先日のリリイと契約し

た夜のことを話した。

「……そうか、まあリイが決めたんなら俺は何も言わないさ。リイがしたいようにしたらいいよ」

サイは普通に納得して、リイを励ましていた。その後、学校には入らず湖でしばらくは過ごすことにした。とてもじゃないがあの学校に今は近づきたくない。

しかし、結局この行動は真実を認めて逃げたようなものである。結局、噂が更に広がり、それに行方不明の生徒の搜索も絡み。ついにはエルダ達を探し出そうとするやからが何人も現れた。

結局、この一週間だけで街全体に広がったこの話はこの街の貴族達の耳にも入った。

「ほう、天使か…そんなものが本当に存在するのか？」

豪華な部屋の真ん中にも自分は地位が上だといわんばかりに着飾った男がいた。その男と向かい合うのは漆黒のドレスをきた女性。

女性は確かに目の前にいるのに妙に存在感が無い。まるでこの場には実際にはいないかのようだ。

「ええ、間違いなく本物よ。この街の学校に通っているわ」

女は振り返って出口に向かう。

「ああ、そういえば」

女は振り返ると男を指差す。

「彼女達が欲しいなら、全力で挑みなさい。あの子達は強いわよ」

そう言って女は部屋をでる。そのまま廊下を歩きながら小さく笑う。

もとよりあんな男に期待はしていない。女の目的は少女達を街から出して旅をさせることだ。

「そして、いつか私を解放してもらわよ」

その言葉を最後に女は廊下から姿を消した。まるで最初からそこにいなかったように。

森の真ん中にある湖のほとりに小さな小屋が建っていた。これはエルダが物質創造の力で作ったものだ。

物質創造は思い描いた物を自在に作り出せる能力だ。しかし、旅に出る必要も予定もないエルダにはあまり必要ない。せいぜい壊れた家具を新しくするくらいだ。

「なんかエルダって反則的な力ばかり持ってるよね」

リリイが笑いながら呟く。

「そうかな？ 私はまだまだだと思ってるけどね」

そう言うとシャルを取り出し磨き始める。シャルは特別な剣なので錆びたりはしないが汚れはつくため、たまにエルダが磨いている。

『マスター、いつまでここにいますか？』

シャルがエルダに問い掛けるが、エルダは考える仕種をしてから肩を竦める。

「わからないわね。一応例の騒ぎが終わればいいんだけど……」

定期的に学校の様子を教えてくれているサイによると、

「今だに学校の騒ぎはおさまってない、フィアナが連絡欲しいってさ」

エルダは考えた末に仲のいいフィアナ、シャーリー、ルイスにはこの場所を教えることにした。

サイは頷いて今日のところは帰ると言って帰っていった。

『そういえばリリイは僕の声が聞こえますか?』

リリイは首を傾げてあれ?という顔をした。

「そうか、リリイは私と契約したからシャルの声が聞こえるのか」

リリイが納得したように頷く。

「そうかあ、この声がシャルさんの声かあ」

エルダからすればシャルの声が聞こえるのが自分だけだったので少し嬉しい。

「改めてよろしくねシャルさん!」

『こちらこそ』

二人はすぐに意気投合したようだ。

「そういえばシャルさんは男ですか?女ですか?」

リリイが首を傾げた。確かにシャルは声が高くて女に思えなくもないが“僕”という一人称からエルダは男だと思っていた。

『僕ですか?...女ですよ』

「……は？」

エルダが口を開けて啞然としているとシャルがやれやれといった感じの声を出した。

『まあ、こんな喋り方だし僕って言うてからわからないかもしれませんか』

そう言つとシャルは懐かしそうに自分のことを話した。

『僕はもともと人間でした。500年前に大きな戦争があつたのは知ってますか？』

「えつと、確か“聖魔戦争”だっけ？」

リリイが歴史の授業中に習つた名前を答える。

『そうです。あの戦争は狂暴な魔族とそれ以外の種族との間で起こりました』

シャルは遠い昔の記憶を呼び覚ます。砂塵舞う戦場に立つ自分の姿を。

500年前、確かに彼女はそこにいた。

1 - 1 1 忍び寄る影（後書き）

白夜「今、合宿先のホテルから投稿しました」

エルダ「ちなみに白夜は何の部活してるの？」

白夜「私は剣道部なんです。一年生のうちは仕事が多くて大変です。洗濯とか大変で…」

エルダ「そうなんだ…」

白夜「合宿が終わったらペースも戻ると思うので、それまですいませんね。では次回をお楽しみに！」

過去編 1 - 1 聖魔戦争（前書き）

白夜「しばらくエルダ達はお休みです」

リリィ「エルダ〜イチャイチャしようよ〜!!」

エルダ「…ちゃんと話聞きなさいよ」

過去編 1 - 1 聖魔戦争

今から500年前、二つの大陸を巻き込んだ戦争があった。後に聖魔戦争と呼ばれる戦いである。

一年間を氷で閉ざされた大陸、カンバリス。この大陸に人間はほとんどいない。かわりに獣人や魔族といった特殊な種族がいるのだ。

ある時、魔族の中の一人が世界に向けて宣戦布告をした。理由は自分達を見下した世界への復讐。各国は驚き半分、呆れ半分の面持ちで軽く治安を乱すやからを捕まえる気持ちで兵を送った。

その結果は…全滅

わずか百人程度の軍勢に一万の軍隊が敗北したのだ。これに焦りを覚えた各国は直ちに戦闘態勢に移行した。

魔族のリーダーは自らを魔王の生まれ変わりだと宣言した。かつて全ての大陸を支配し、その後天使によって滅ぼされたと言われる存在。

魔族の力は増し、数を増やし、ついにはカンバリス大陸を完全に支配下に置いた。

それを危惧した魔族以外の種族が国や思想も関係なく一丸となって立ち向かった。これが聖魔戦争の始まりである。

戦争が始まって数年、連合軍は最新の兵器を開発し、今までの戦況を覆した。そのことで勢力を増した連合軍は次々と魔族を押し返していった。

そしてついに敵の本陣があるカンバリス大陸に乗り込んだ連合軍は拠点を確認し、ついに最終決戦を前にしていた。

連合軍本部は谷を見下ろすように山の上に作られていた。その谷を見ながら夜風にあたる一人の軍人がいた。

身長は150センチあるか、というぐらいの小柄だが顔は全体的に整っていて長い金髪を一つにまとめて背中に垂らしている。瞳は青空のようなスカイブルーで顔だけ見れば間違いなく女だとわかる。

しかし、その顔とは対称的に身につけているのは男物の軍服である。

「断罪の谷……か」

凜とした声でそう呟く。この谷は魔王が天使との戦った時にできたと言われている。天使が放った最後の一撃が大地を割ったそうだからついた名前が“断罪の谷”ということらしい。

「まだ起きてたのか？……シャル」

「……眠れないんですよ」

後ろから聞こえた声に振り返らずにシャルは答えた。

「そうか、だが明日は最後の拠点を確保する大事な作戦がある……しっかり休んでおけよ？」

「……わかってますよ」

シャルは振り返って声の主を見つめる。肩まである青い髪を風に揺らして立つその男は第7部隊隊長である、ラグナ・クライラスである。

黒いロングコートを着て立つその出で立ちは力強く、一つ一つの動作に無駄がない。しかし、見た目とは反対に彼の黒い瞳は優しい。

「……今日は月が綺麗だな」

ラグナの言うとおり、夜空には美しい満月が輝いていた。

「まったく、ここにいるお前が女だったらいいムードなんだがな」

「……何言ってるんですか隊長」

二人はしばらくその場で笑い合った。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

私は、アイナ・シャルリン。現在は連合軍第7部隊の副隊長をしている。私は女だが、連合軍で女性は非戦闘員にされるので私は男装をしてこの部隊に入った。私はどうしても自分の力を人々のために使いたかったのだ。ちなみに現在はクロドという偽名を使っている。

入隊の時も体までは調べられなかったので何とかごまかした。周囲からは女みたいだとよく言われているが、実際女だから気にしていない。

「シャル、いくぞ」

ラグナから声をかけられて私は立ち上がり彼の後をついていく。ラグナは誰にでも平等に接しており彼の人気は連合軍のなかでトップといえるだろう。

「なあ、シャル」

「何でしょう?」

「今日は俺とお前の二人で別行動だ」

確か昨日のブリーフィングでも言っていたな。

「確か囀の部隊が敵を混乱させているうちに僕達で拠点のリーダーを潰すんでしたね」

ラグナは満足そうに頷く。

「俺達は敵拠点の側面から一気に最深部に突入する。俺とシャルなら大丈夫だろ？」

そう言うラグナは私を見て微笑んだ。

「…ええ、そうですね」

私もつられて微笑んだ。ラグナと知り合ってもう二年だ。すっかり兄弟のような関係になっていた私達のコンビネーションはばっちりだった。

「さて、そろそろ出発だ！」

ラグナに背中を叩かれた。痛かったが彼なりの仲がいい者どうしの挨拶みたいなもので苦笑いしながら私は急いで彼の後ろをついていった。

- - -
- - -
- - -
- - -

谷を見下ろす山の中にその砦はあった。主に谷に近づく敵を迎撃するために作られたのだが、現在は補給ラインを潰されており、さすがの魔族も士気がかなり低下していた。

「よし、作戦開始だ！」

ラグナの掛け声とともに囀の部隊が正面から突撃する。予想通り敵は正面入口にバリケードを作り、そこにほとんどの戦力を投入してきた。

「いくぜ！シャル！」

「了解！」

私達は岩場を利用し、砦の側面に魔術で大穴を開けてそこから中へと突入した。

作戦は順調だ、しかし何故か胸の内にはもやもやしたものが残っていた。

「……嫌な予感がする」

私の弦きは戦場の叫び声に掻き消されて誰にも聞かれることはなかった。

過去編 1 - 1 聖魔戦争（後書き）

キャラクタープロフィール（過去編 1）

アイナ・シャルイン

22 歳

性別・女

身長・150cm 前後

さらさらの金髪とスカイブルーの瞳をした女性。連合軍の第7部隊の副隊長に就いている。軍隊に女性はいれないためクロドという偽名を使い男装をしている。

隊長のラグナとは二年前に出会い、様々な任務と一緒にこなした。そのため兄弟のように仲がいい。

過去編 1 - 2 人形使い（前書き）

合宿が終わりました！これでしばらく執筆に専念できます！

過去編 1 - 2 人形使い

砦の長い廊下をラグナとシャルは走っていた。時々魔族の兵士が現れるが所詮は下っ端程度。二人にとっては倒すのはたやすい。

現在砦の正面入口で囷の部隊が戦闘中であり砦の戦力は全て入口に集中している。つまり、現在シャル達がいる砦の内部にはほとんど兵士が残っていない。たまに見張りと出会うが相手がこちらに気付く前に全て切り捨てられている。

「…隊長」

シャルがラグナに横目で話しかける。

「二人きりの時は呼び捨てでいいって言っただろ？」

ラグナは微笑みを浮かべながらシャルを見る。

「…そうでしたね。じゃあ…ラグナ、気づいてますか？」

シャルが今度は真剣な顔で尋ねる。

「ああ、さっきから戦ってる魔族達…最初から死んでるな」

「…ええ」

そう、さつきから戦っている魔族達はまるで感情が無く、切り付けても断末魔さえあげない。さらに、普通なら死んでいるはずの傷を負わせても構わず向かってくるため、ラグナの使う炎の魔術で完全に灰にしてしまわなければならないのだ。

「…何か嫌な予感がします」

「…これは死者を操る能力なのか？」

廊下に現れる魔族の兵士を次々に灰に変えていく。

「……？」

すると、シャルはラグナの炎に焼かれる兵士の体に光る糸のような物が繋がっていることに気づいた。

「（…あれは何だ？）」

シャルは疑問に思いながらも今はラグナの援護に集中することにした。

「…シャル、あれだ！」

前方に赤い色をしたドアがある。おそらくあれが砦の最深部なのだろう。

二人は警戒を崩さずに扉を開ける。薄暗い部屋はそれなりに広く、中央には飾りのついた豪華な椅子が置いてあった。そして、その椅子には一人の少年が座っていた。

「やあ、いらっしやい」

少年はにこやかに二人に挨拶をする。見た目は15歳ほどの少年だが魔族は普通の人間よりも老化が遅いためおそらくは25歳前後だろう。

「お前がこのリーダーか？」

ラグナが険しい表情で尋ねる。少年は静かに首を振る。

「僕はこのリーダーではありません」

その答えにシャルとラグナは眉をひそめる。

「…それでは、あなたはここで何をしているのですか？」

シャルが尋ねた瞬間少年の笑顔の“質”が変わった。

「……っ！」

「………！」

少年からは今までに感じたことがないくらいの殺気が伝わってくる。シャルの頬を冷や汗が流れる。

「僕がここにいる理由かい？……そろそろ調子にのってるそちらの戦力を削りにきたのさ」

シャルは横目でラグナを見る。するとラグナも険しい表情をしていた。

「君達は連合軍の中でも特に強いらしいね……だから君達を殺したら連合軍の奴らはどう思っかなあ……」

少年がゆつくりと立ち上がる。白いショートヘアの髪に紫色の瞳。顔立ちも良く美少年ではあるが恐ろしいほどの殺気を放ちながら立つ姿は死神のようだった。

「さあ、君達はどんな踊りを見せてくれるかな？」

少年がゆつくりと手を上げる。するとどこにいたのか大勢の兵士に二人は囲まれた。

「……！？気配はなかったのに」

ざっと見回しただけでも30人はいるだろうか。ラグナとシャルは背中を合わせて警戒する。

「気配がないのは当然だよ……なぜなら、彼らはもう死んでるんだからね」

「……なに！？」

少年が指を動かすと一斉に兵士達が二人に襲い掛かった。ラグナは先程と同じように炎の魔術で確実に兵士を灰にしていく。シャルは近づくものから次々と切り捨てていき、転ばせる。さすがに腕や足を切断すれば兵士は戦えない。

「シャル！おそらくこいつらは操られているだけだ！あの少年を狙え！」

シャルは頷くと持ち前のスピードで兵士の間をかい潜り少年へと走った。基本的に何かを操るタイプの戦闘をする者は接近戦に弱い。

「（おそらく周りの兵士よりも力は強くないはず…）」

突然目の前に走り込んできたシャルを見て少年は少し驚いた表情をした。

「……もらった！」

シャルが素早く剣を振り下ろす。しかしシャルの剣は少年には届かず途中で停止する。

「……なに！？」

シャルの言葉に少年はニヤリと笑う。シャルの剣を受けとめたのはいくつも束ねられた糸だった。

「自己紹介がまだだったね。僕はシグナス・ガルテングス、またの名を“人形使い”そして、魔族軍の総司令官でもある」

シャルは驚く。まさか目の前にいる少年が敵の総大将だとは思ってもいなかったからだ。

「…それと」

少年がシャルに向かって手の平を向ける。

「……ぐっ！？」

次の瞬間シャルは何かにつ張られるように後方の壁まで吹き飛ばされた。

「人形よりも操っている本人が弱いなんて誰が言ったんだろうね？…言っておくけどそれは間違いだよ」

シグナスはまるで見下すように二人を見た。

「シャル！大丈夫か！？」

目の前の敵を蹴散らしたラグナがシャルの側に駆け寄る。

「大丈夫です。しかし気をつけてください。彼は糸を使います」

シャルの言葉にラグナは頷く。

「やっぱりただの兵士達じゃ相手にならないみたいだね。仕方ないから…僕が直接相手してあげるよ」

シグナスが両手を上げるのを見て二人も戦闘態勢に入る。

「さあ、開幕だ」

シグナスは優雅にお辞儀をすると二人に向かって跳んだ。

過去編 1 - 2 人形使い（後書き）

次で過去編は大詰めを迎える予定です。

過去編 1 - 3 戸惑い（前書き）

キャラクタープロフィール（過去編 2）

ラグナ・クライラス

28 歳

身長 175 cm

体重 70 kg

連合軍第 7 部隊の隊長でありシャルのパートナー。剣の腕は連合軍のなかでもトップクラス。魔術は主に炎を使う。

誰にでも平等に接するため、人気を集めている。シャルとは二年前に出会い意気投合。今では兄弟のように仲がいい。

過去編 1 - 3 戸惑い

シグナスが二人に向かって両手を振り下ろす。シャルとラグナは左右に別れて攻撃を回避する。二人がいた場所には深い引っかかり傷のような跡がついていた。

「…なるほど、糸を使う…か」

ラグナは険しい表情をシグナスに向ける。シグナスはラグナを見てニヤリと口元に笑みを作る。

「なかなかいい動きですね。では、これはどうかな？」

シグナスはラグナに向かって両手をクロスさせるように振り下ろす。するとラグナの目の前に糸が編み目状になって向かってきた。

「……チツ！」

ラグナは舌打ちしながら炎の魔術を放つ。普通の糸なら簡単に燃え尽きるはずだがシグナスの糸は違った。

「…甘いよ」

糸は逆に炎を吸収して燃え上がる。

「…なに！？」

ラグナは大きく横に跳んで糸を回避する。そこにシグナスが右手を突き出す。その手からは糸を何十にも束ねて作った槍が放たれていた。

「……くっ！」

態勢が崩れているラグナは回避が間に合わないことを知って唇を噛む。すると横から金色の風が目の前に立ち塞がる。

「僕のことを忘れてませんか？」

金色の風の正体は髪だった。先程の攻撃でほどけた背中まである金髪をなびかせてシャルは糸でできた槍を剣で弾き飛ばした。

「すまない、シャル」

「いいんですよ。僕はあなたのパートナーですから」

ラグナの言葉にシャルは笑って返事をする。しかし、すぐにシグナスへと視線を戻す。

「おやおや、仲がよろしいことで…」

シグナスは興味がないとでも言うように溜息混じりで言う。

「じゃあ、二人仲良く死んでください！」

シグナスが手を上げると頭上にいくつもの糸が現れる。それは次第に集まり針のように鋭くなる。

「行け！」

シグナスが腕を振り下ろすと同時に何十、いや何百という数の槍が二人に襲い掛かる。二人は剣を構えて姿勢を低くするとまずラグナが右手を前に突き出して魔術を発動させる。

「《ファイアーウォール！》」

二人の目の前に炎の壁が立ち上り槍を防ぐ。この魔術は魔術だけでなく物理的な攻撃も防ぐことができる。そして、時間をかせいでいる間にシャルが素早く詠唱を始める。

「《現れよ水流、その力で敵を飲み込め！アクアスパイラル》」

ファイアウォールの一部を消し去りながらシグナスに向かって水の塊を発射する。シグナスはその水の塊を片手で弾いた。

「……なっ！」

その行動にシャルは驚く。今の魔術は城の城壁すら砕く程の威力があるのにシグナスはそれを片手で弾いてみせた。

「…一体どうやって」

その時、シャルはシグナスの手が黒い炎で包まれているのを見た。

「あれは…闇の！？」

シグナスがニヤリと笑う。闇の炎、それは魔族しか使えない炎。しかし使うにはそれなりの対価を払わなければならない。

「あなたは…そこまでして何をしたいのですか？」

シャルはシグナスを見つめる。シグナスから笑顔が消えて無表情になる。その瞳にはどこか悲しみが宿っている。

「僕は生まれてからすぐに捨てられて今まで色々な人を頼りにしてきました…」

攻撃を止めてシグナスは語り始める。ラグナもシャルの横に並ぶ。

「…でも、誰も僕にかまってくれなかった…魔族同士が駄目ならと思つて他の種族に助けを求めたこともあったけど…」

どこでも結局同じだったよ。酷い時には利用するだけ利用して捨てられたこともあった」

シグナスは怒りで肩を震わせる。

「…だから、僕はこの世界に復讐しようと誓った。最初に殺したのは両親だったよ…この炎でね」

そう言つと手の平で燃える黒い炎を見つめる。

「呆気なく死んじゃったからつまんなかったよ…それから魔族のほとんども殺して皆僕の操り人形にしたんだ…まあ対価として片目が見えなくなつて、更に寿命もだいぶ削られたけどね…」

シグナスは二人に向き直ると黒い炎を両手に纏う。

「さて、ちょっと話し過ぎたね…続きをしようか」

再び糸を構えるシグナスを見て二人も構える。しかし、シャルは心の中ではシグナスと戦いたくないという思いができた。シグナスが家族を殺したと言った瞬間の寂しそうな顔が忘れられなかった。

シャル自身、今までそういう経験をした子供を何人も見てきた。今のシグナスは過激ではあるがそんな子供達と変わらない。

ただ自分を見てほしい。愛してほしい。しかしそれを伝えるすべがわからずに暴れることで周りにアピールをする。

シグナスも同じだ。ただ彼はいきすぎて戦争になってしまっただけ。そしていつしか目的を忘れて自分は世界を滅ぼすという考えだけに縛られてしまっただけだ。

シャルはシグナスを見る。糸を使いこちらを殺そうとしている。しかし、今の彼の瞳にはどこか寂しさを感じるのだ。

「…ラグナ、頼みがあります」

シャルがラグナに真剣な顔を向ける。ラグナはシャルの顔を見て何か考えたのだろうとすぐにわかった。

「なんだ？」

「僕一人で戦わせてください」

ラグナは驚くがシャルの真剣な目に小さく頷く。

「…無理はするなよ」

「…わかっています」

ラグナが一步下がりシャルはシグナスと向かい合う。

「…シグナス」

シャルは初めて彼の名前を呼んだ。

「…なんです？」

名前で呼ばれたことに若干戸惑いながらもシグナスは返事をした。

「あなたは後悔していないのですか？」

シャルの言葉にシグナスはわけがわからないと言いたげな顔を向けた。

「…実は、両親を殺したこと…後悔しているのではないですか？」

シグナスの顔色が急に変わった。真っ青になりガタガタと震え出す。

「…違う、後悔なんて…」

あきらかにシグナスは動揺していた。シャルはやはり、と自分の考えが正しいことを確信した。

そう、シグナスは後悔しているのだ。自分の恨みや怒りで家族を殺して世界を混乱させたことに。おそらく本人は気づいていない。

いや、気づいていないようにしているだけだ。

おそらく彼は自分を止めてほしかったのだ。だから連合軍でも特に強いと言われた二人の所に来て、自分の身の上を話した。

「本当はもう止めたいのでしょうか？」

シャルがシグナスを真っ直ぐ見つめたまま言う。

「ち、違う！違う！違う違う違う違う違う違う違う違う違う！……！」

シグナスは頭を抱えてうずくまる。

「……今までずっと寂しいと感じていたのではないですか？」

ぴたりとシグナスの動きが止まる。

「……寂しい？……僕が？」

「ええ、本当は普通に友達と遊んだりしたかったんでしょう？」

シグナスは顔を上げてシャルを見ている。その顔は涙に濡れていてただの子供としか見えなかった。

「ぼ、僕は……僕をこんな目にあわせた世界が憎い……けど……人を殺すつもりはなかった……なのに……いつからか何も考えられなくなつて……世界を壊せば楽になれると思って……」

シグナスは自分の両手を見る。

「…僕は…何でこんなことをしたんでしょうね…」

シグナスがそう呟いた瞬間。彼を中心に黒い炎がまるで爆発するかのように放たれた。

「シグナス！」

シャルが叫ぶ。シグナスは虚な目をしたままただその場に立ったままだった。

「これは…魔術の暴走だ！」

ラグナがシャルの隣に駆け寄る。

「…魔術の暴走」

シャルが慌ててシグナスを見る。

魔術の暴走は魔術を使用する人物の精神状態が極端に不安定になると発生する。魔術の威力や能力は使用者の精神によって決まる。つまり精神が不安定になると魔術を支える土台がなくなり過剰に魔力が放出されてしまうのだ。その結果、本来よりも魔術の威力が上がり自分では制御できなくなってしまう。

「やばい！このままだとこの砦ごと吹き飛ぶことになるぞ！」

ラグナはシャルの手を掴んで急いで避難しようとするがシャルは動かない。

「…ラグナ、先に行っててください。僕にはまだやる必要があります」

ラグナが驚くの見ながらシャルははつきりと言う。

「…彼をもう一人にしてはいけないですよ……彼には彼の人生があるんですから」

振り返ったシャルの肩をラグナは掴んだ。

「待て！お前まさかあいつと一緒に死ぬ気なのか！？」

シャルは振り返るとラグナに笑顔を見せる。

「…安心してください。“私”は死ぬつもりはありませんよ」

シャルはラグナの唇に自分の唇を重ねた。

「……シャル！？」

「私が無事に帰ったら……」

最後だけ耳元で囁くとシャルはありったけの力でラグナを外に向かって吹き飛ばした。

「シャルー！！」

ラグナがシャルを呼ぶ声が聞こえたがシャルは何も言わなかった。ラグナが無事に外に出たのを確認してシャルはシグナスへと向き直る。

「さて、終わりにしましょう」

シャルはゆっくりとシグナスへと歩きだした。

過去編 1 - 3 戸惑い（後書き）

最近色々な方々から感想をいただくようになりました。私としては嬉しいかぎりです。

これからも頑張りますので応援よろしくお願いします。

過去編 1 - 4 決着（前書き）

いよいよ決着です！

シャルは少年を見つめる。愛されることを知らず、ずっと孤独な人生を送ってきた少年。

「シグナス」

シャルは彼の名を呼ぶ。しかしシグナスは答えない。彼の瞳には光がなく、ただ前を向いているだけだ。

「シグナス！」

シャルはもう一度名前を呼ぶ。今度は強く。するとシグナスは微かだが反応した。今だ瞳に光はないがシャルの方に顔を向ける。

「……てくれ」

シグナスは小さく呟いた。彼の瞳から涙が流れる。シャルは彼が何を言おうとしたのかわかった。だからこそ何としても止めなければと思った。

「……僕を……殺してくれ」

彼がそう言った瞬間、彼を包んでいた黒い炎がまるで意志を持つかのように襲い掛かってきた。それをシャルは横に回避する。

「……っ！」

シャルは今まで自分がいた場所を見て驚く。石できていた床が炎が触れた場所だけ消えた。いや、正確には蒸発したのだ。つまりあの炎は石をも蒸発させるだけの温度がある。少しでも触れようものなら一瞬であの世行きである。

「…これは…ラグナの炎の10倍は強いですね…」

さすがのシャルも冷や汗を垂らした。魔術の暴走は使用者を気絶、又は殺すことでしか止められない。しかし、シグナスがいるのはこの炎の中心であり生身のシャルでは近づけない。

「…ならば!」

シャルは手の平を前に突き出し詠唱をする。

「《大いなる水流、我に従い敵を討て!…アクアスパイラル!》

シャルの手の平から巨大な水でできた弾丸が発射される。しかし、黒炎がそれを防ぐと水の弾丸はあっさりと蒸発する。

「…この程度では駄目ですね」

黒炎を回避しながらシャルは舌打ちをする。黒炎はまるで蛇のようにシャルを追いかける。シャルは思いつく魔法を全て試すがどれも効果が無いようだ。

「…まずいですね」

シャルは最後の手段を考えるがそれを使うかどうか迷っている。

シャルは腰のベルトにぶら下げていた袋を掴む。

「……すいません、ラグナ。あの言葉…実現できないかもしれません」

シャルはラグナの顔を思い浮かべる。

- - -
- - -
- - -

初めて出会った時はとても爽やかな印象を受けた。青い髪に力強い体、優しい瞳。孤立していた私に初めて話し掛けた時の笑顔。

私は初めて人を信じられるようになった。その後、ラグナの部隊の副隊長になって一緒に戦場を駆まわった。ラグナは強くて、誰にでも平等だった。私は彼を尊敬していた。

そして…いつしか私達は兄弟のような関係になっていた。私はラグナを兄と思って尊敬すると同時に一人の女性として彼が好きだった。だからこの戦争が終わったら思いを打ち明けるつもりだった。

「…ちょっと早めに言ってしまったけど…」

シャルは剣を構える。

ラグナ、私が無事に帰れたら……

シャルはあの時の言葉を思い出す。

私と一緒に生きてくださいね

-
-
-
-
-

ラグナは皆から吹き飛ばされて少し離れた林の中にいた。

「……ぐっ！」

落下の衝撃から上手く体を動かせない。

「……シャル！」

ふらふらと立ち上がり何とか林を抜け出したラグナが見たのは壁がなくなった砦の最上階でぶつかり合う黒炎と金色に輝く光だった。

-
-
-
-
-

-
-
-

シャルは腰につけた袋から金色の水晶を取り出した。

《リミットブレイク
…限界突破》

そう呟きながらシャルは水晶を握り潰す。その瞬間、金色の風が吹きあれる。

『さあ、終わらせますよ！』

風が止むと、そこには銀色のドレスを着たシャルがいた。薄い羽衣を纏い、金髪の髪は羽の形をした髪飾りでまとめてある。その姿はまるで女神のようだった。

これがシャルの最後の手段である、リミットブレイク限界突破である。長い間水晶に溜めてきた魔力を使って自分自身の存在を作り変えるというシャルが考え出した完全オリジナルの魔術である。

『この姿は長く持ちません。シグナス…今助けます！』

黒炎の中心でシグナスはシャルを見ていた。その瞳に微かに光が宿る。「…助ける？…僕を？」

シャルは頷く。

『…ええ、助けます。あなたはまだやり直せる』

シグナスは首を振る。

「僕なんかが生きていたって…僕は誰にも必要とされない…家族さえいない。そんな僕が生きていたって……」

『ふざけるな!』

シャルの怒声にシグナスは驚いて目を丸くした。

『…なぜそんなことを勝手に決めるんですか？あなたは自分のことばかりで周りを見てないんですよ!』

右から迫る黒炎を光の玉で相殺させながらシャルはシグナスを睨む。

『そんな人を誰が助けるんですか！あなたは魔族の中ではまだ子供でしょう？ならもつと周りを頼りなさい!』

シグナスは俯いて肩を震わせる。

「でも、僕には…もう…家族さえいない」

シャルは俯くシグナスに優しく語る。

『なら…私があなたはの新しい家族になります』

シグナスが目を見開いて顔を上げた。シャルは先程と違って笑顔だった。

『私があなたを支えます…それでいいでしょう？』

シグナスの瞳から涙が溢れる。シグナスは初めて人の暖かさを感じたのだ。

『だから…終わらせます！』

光を纏ったシャルがシグナスへと飛ぶ。すると黒炎がシグナスを奪われまいと塊となりぶつかってきた。シャルは黒炎からシグナスの負の感情を感じた。

『…やはり、シグナスの負の感情を吸い込み、ここまで巨大化したようですね…でも』

シグナスは知った。人の暖かさを、黒炎は先程と比べるとあきらかに勢いが無い。

『彼は前に進もうとしている……邪魔を…しないでください！』

その瞬間、光が黒炎を吹き飛ばした。

- -
- -
- -
- -
- -

- -
砦の入口にラグナは立っていた。最後の激突から何も音がしなくなつた最上階を見る。

「……シャル」

そう呟くと目を閉じて再び待つ。すると聞き覚えのある声が響いた。

「……お待たせしました」

ラグナが目を開くと彼女がいた。ボロボロの軍服で腕のなかにシグナスを抱き抱えて微笑んでいた。

「……シャル」

ラグナは笑顔でシャルを抱きしめる。

「……あつ……ちよつと……シグナスもいるんですから……苦しいですよ……」

慌てて体を離れたラグナにシャルは笑顔を向けると、救護班にシグナスを預けてラグナの隣に立った。

「……心配かけてすみません」

ラグナはシャルの頭を撫でながら微笑んだ。

「まあ…色々言いたいが…今は休め」

シャルは苦笑いを浮かべてラグナに寄り掛かる。

「…そうですね…ちょっと…疲れ…ま…した」

シャルはそのままラグナに支えられながら眠りについた。

「…おやすみ…シャル」

シャルの静かな寝息を聞きながらラグナは優しく微笑んだ。

過去編 1 - 4 決着（後書き）

どうも、夏休みを満喫中の白夜です。

皆さんも夏バテに気をつけてくださいね！

それではまた次回をお楽しみに。

過去編 1 - 5 : さよなら（前書き）

キャラクタープロフィール（過去編ラスト）

シグナス・ガルテングス

25歳（見た目は15歳）

種族 魔族

身長 155cm

体重 45kg

白髪のショートヘアで紫色の瞳をした魔族の少年。幼いころから誰にも受け入れてもらえずに孤独な生活をしていた。あるときついに世界に復讐しようとして殺した魔族の死体を使い軍隊を結成。世界に戦争をしかける。結果、シャルに人の温もりと生きる喜びを教えてもらい戦争が終わった後はシャルとラグナとの三人生活をしている。

『魔族について』

魔族は人間よりも長生きで、シグナスも見た目は15歳だが実際は25歳前後、魔族はある程度成長するとそれからはあまり見た目は変化しない。平均寿命は1000歳前後と言われている。

過去編 1 - 5 : さよなら

青空の下でシャルは別荘の自分達のへやの窓辺に座り本を読んでいた。

「おい！それは俺の獲物だぞ！」

「残念でした！早い者勝ちだよ！」

ふと聞こえた声にシャルは顔を上げる。目の前には海が広がり砂浜を二人の男が走り回っている。

「こらシグナス！まちやがれ！」

「ほらほら、こっちだよ！」

二人の男、ラグナとシグナスを見ながらシャルは微笑む。

あの戦争が終わって3週間がたった。

シグナスはシャルとラグナが嘘の報告書を出して戦争に反対して捕まっていた少年兵ということにして今はシャルとラグナが面倒を見ている。

シャルとラグナは戦争が終わり普通の生活に戻ると一緒に暮らし始めた。シグナスとは最初はぎこちなかったが次第に打ち解けいまではすっかり家族の一員である。

「おい、アイナも泳がないか？」

ラグナが手を振るのでシャルも振り返す。今3人は疲れを癒すことを目的に海に遊びに来ていた。ラグナとシグナスには本名を教え、もはや男装の必要もないので今のシャルはフリルのついた薄い水色のワンピースという女性らしい姿をしている。

「……平和ですね」

シャルはそう呟くと立ち上がり外に出ようとする。すると突然目眩がしてその場に座り込んでしまった。さらに胸が締め付けられるように苦しい。

「……うっ！……はぁ……はぁ……」

息を整えてシャルは立ち上がる。

「……もう、時間がないのですね」

シャルは自分の手の平を見つめながら呟いた。あの日、シャルが使った“リミットブレイク限界突破”はシャルの体に深刻なダメージを残していた。ラグナとシグナスにはばれないように隠してきたが最近頻繁に目眩や胸を締め付けられるような痛みが襲ってくる。

「……………」

シャルは立ち上がり外に出る。ドアの向こうに出ていく彼女の後ろ姿は日の光を浴びて優雅で、美しく、そして儚い幻のようだった。

-
-
-
-
-
-
-

その日の夜、シャルは一人砂浜を歩いていた。羽のあしらわれた銀色のネグリジエを着て波打際まで歩いた。長い金髪が風に揺れる。

「……もう少し一緒にいたかったですね」

ぽつりと呟くとシャルは空を見上げる。月が辺りを明るく照らしている。

「……眠れないのか？」

不意に後から声をかけられてシャルはビクリと肩を震わせて振り返る。

「…ラグナ」

そこにはいつもの黒いコート姿のラグナがいた。

「…シグナスはともかく俺はごまかせないぞ？」

真剣な顔のラグナにシャルは肩を竦める。

「ラグナにはかないませんね……」

シャルは再び海を眺める。ラグナも横に並んで立った。

「……体の調子はどうなんだ」

「……もう限界です。無理矢理に存在を作り変えたのでいつ消えてもおかしくないです」

ラグナの方を向いてシャルは困ったように笑った。

「……何か方法はないのか？お前が消えなくてもいいような……」

シャルは人差し指でラグナの口をふさぐと首を横に振る。

「……いいんです。私はこうして幸せな時間を過ごせました。これ以上は我が儘というものです」

ラグナは拳を強く握ると悔しそうに俯いた。

「……さて、もう時間がありませんね……悪いですが……シグナスを呼んできて……ぐっ！」

突然の目眩と胸の痛みにシャルがふらつきラグナが慌ててそれを支える。

「……アイナ！」

ラグナがシャルの本名を呼ぶとシャルは嬉しそうに目を細めた。

「……大丈夫です。それよりシグナスを呼んでください……あまり時間ありません」

「……待つてろ！すぐに呼んでくる！」

そう言うつとラグナは別荘に走って行った。シャルは空に浮かぶ月を見上げて呟く。

「……なかないいい人生でしたね」

すぐにラグナとシグナスが駆け付ける。

「……シャル」

シグナスがシャルのそばにしゃがみ込むと不安げな顔を見せる。

「……大丈夫、あなたのせいじゃありませんよ」

シャルは微笑むとゆっくりと立ち上がる。するとシャルの足元から光の粒子が舞いはじめる。

「……っ！」

「……っ！」

二人は驚愕すると同時に大切な人がいなくなるという恐怖に襲われた。

「……ダメだ！」

シグナスがシャルの腕を掴む。

「……まだ、僕はあんたから教えてもらいたいんだ！人の素晴らしさを！生きる喜びを！」

シャルは微笑みながらシグナスの頭を撫でる。すでに足元だけでなく全身から光の粒子が舞いはじめる。

「私はきつかけを作ったに過ぎませんよ……これからは自分で生きるんです……まだラグナもいます。ラグナと一緒に生きてください……」

シグナスが涙に濡れた顔をあげてシャルを見る。シャルはシグナスを抱きしめる、時間はほんの数秒だった。お互いに無言で離れる。

「……アイナ」

ラグナが名前を口にする。実はシャルを本名で呼んでいるのはラグナだけであり、シャルはそれが嬉しかった。

「……ラグナ、後は任せましたよ？シグナスのこと、ちゃんと支えてあげてくださいね？」

「……ああ！」

ラグナの返事に合わせて光の粒子が強く光る。

「……アイナ！」

ラグナはシャルを抱きしめた。シャルもラグナの背中に手を回す。

「私はいつでもあなたのそばにいますよ…いつまでも」

「…ああ」

ゆっくりと唇を合わせる。数秒の時間が何時間にも感じた。ゆっくりと唇を離してシャルは微笑む。そして名残惜しそうに二人は離れるとシャルは並んで立つ二人を見つめる。

「ラグナ…愛してる」

ラグナはゆっくり頷く。

「シグナス…強くしっかりと生きてくださいね」

シグナスも頷く。

シャルの姿は光の粒子に包まれ見えなくなっていく。

「……さよなら」

その言葉を最後にアイナⅡシャルインという一人の女性が世界から消えた。

- - -
- - -
- - -
- - -

『それからのことは覚えてません。気がついたら神様に拾われ、体がないのでこうして剣としてマスターと共にあるわけです』

シャルが話を終えると、エリスもリリイも泣いていた。

「……シャル、辛かったですよ？」

エルダの問いにシャルはしばらく黙ったあと優しく答える。

『…確かに辛かったですよ？でも私はまたこの世界に来て、確かにここに存在しているんですよ…一度死んだ人間には大きすぎる幸せです…そうは思いませんか？』

シャルの答えにエルダとリリイは頷いた。

それからしばらくしてエルダとリリイが眠ったところ、壁に立てかけてあったシャルから光の粒子が舞い上がり、湖のふちに集まると

人の形を作り出した。

長い金髪を風にゆらしスカイブルーの瞳を細めてシャルは夜空に浮かぶ月を見上げる。

『…ラグナ、シグナス、私は…今、幸せですよ』

夜空に向かって話すシャルの姿は月明かりに照らされた景色の中でも一際輝いて見えた。

過去編 完

過去編 1 - 5 : さよなら（後書き）

やっと過去編が終わりました。次回からまた現代に戻ります。

ちなみに前書きのプロフィールを見た方でさっしのいい方はフラグが立っているのに気がつくと思います。まあ、実現するかは未定ですが。

特別話 黒の訪問者（前書き）

反省も後悔もしておりません！

べ、別にやってみたかったとかじゃないんだからね！

特別話 黒の訪問者

シャルから昔話を聞いた翌日、エルダとリリイは街のギルドの力ウンターにいた。

「ねえ、エルダ。何でギルドに来たの？」

首を傾げるリリイにエルダは溜息をはく。

「リリイ…食料にしても何にしてもお金は必要でしょ？だからここで稼ぐのよ」

エルダの説明にリリイはなるほど、と呟いた。

その後、登録の手続きを済ませてから二人は森に向かった。

「初めての仕事だね」

「…そうね」

今回受けた依頼は森に住むフェンリルという大型の魔物の討伐である。

「フェンリルは夜行性らしいから夜まで待つわよ」

二人は他の魔物に襲われないように木の上に登り、そのまま夜になるのを待つことにした。

「ギルドを出たのが　夕方だったからすぐに夜になるわね」

そう言うとエルダは夕焼けに染まる空を見た。しばらくそうして二人で綺麗な空を眺めていると、突然森に狼の遠吠えが響きわかる。

「……！」

「…来たわね！」

二人は木の上から飛び降りると遠吠えが聞こえた方向に走り出した。

「ちょっと早いけどさくつと倒して帰りましょう！」

エルダはリリイに向けて笑顔でそう言うとリリイは鼻を押さえながら頷く。

「……早く帰ってエルダと……うふふ」

リリイが増血剤を飲むのを見ないふりをしてエルダは再び前を見る。

少し開けた場所に出ると大きな白い狼と、それを囲むように小さな灰色の狼がいた。

「いたよ！あのでかくて白いのがフェンリルだ！」

その時、エルダは見た。フェンリル達の前に一人の人間が立っているのを。真っ黒な黒髪を腰まで伸ばし、真っ黒な服を着た少女だった。

「…いけない！」

エルダはこのままでは少女が襲われると思いシャルを右手に持つ。
その瞬間小さな狼達が一斉に少女に襲い掛かった。

「（間に合わない！）」

エルダがそう思った瞬間、狼達は一斉に血を噴き出して倒れた。

「……え？」

何が起こったかわからずにエルダとリリイが啞然とする。すると目の前の少女がゆっくりと振り返る。その真つ黒な瞳は吸い込まれそうなほどに綺麗だった。

「はじめまして、かな？エルダ、リリイ」

凜とした透き通る声で話した少女はニッコリと笑顔を見せる。不思議と違和感を感じさせない笑顔だった。

「…エルダ」

不意にリリイから声をかけられて振り向くと鼻から血を流したりリイが息を荒くしながら少女を見ていた。

「はあ…はあ…エルダ…あの子…襲っていいかしら…」

「リリイ！こんな時に何考えてるのよ！」

リリイを見ていた少女がクスクスと笑う。

「いいですよ？ただしあの魔物をどうにかしてからにしてくださいね」

「いいの！？」

少女の言葉に驚きつつも白い狼を見る。

「そうそう、私は夜^よっていうのよろしくね」

少女：夜は自己紹介すると何もない空間から日本刀を取り出すと魔物に向かって構える。

「…日本刀！？」

この世界にないはずの武器を持っていることに驚くが今は魔物を倒すことに集中することにする。

刀を納めたまま夜が走る。フェンリルは右の前足を振り上げると爪で夜を引き裂こうとする。

しかしフェンリルの爪は夜には届かずに終わる。振り下ろした前足は夜に触れる寸前でバラバラになったのだ。いつの間に抜いたのか手に持つ日本刀には血がべっとりとついている。

「……速い！」

エルダは驚いた。夜は一瞬で数十回も刀を振り回していたのだ。

余程の者でなければ刀を一回振ったようにしか見えないだろう。

「夜ちゃんと少しでも長くイチヤイチヤするためにもさっさと倒れなさい！《フレイムランス》」

夜が足を切り裂いたために驚いていたフェンリルの顔面にリリイの魔術でできた炎の槍が直撃する。

「ガアアアアアア！」

フェンリルは顔面に攻撃を受けて完全にキレたようだ。するとフェンリルの目の前に薄い緑の壁ができる。

「エルダ、これは結界よ！」

リリイが叫ぶと同時に再びフレイムランスを撃つが防がれてしまった。

「…それなら！」

すかさず夜が走り込み刀を振るう。しかしその刃も結界に阻まれる。

「…くっ！固いわね」

エルダはシャルを前にかざして魔力を練る。あれを破壊するなら強力な威力の魔術を使うしかない。

「…刹那！いい魔術教えてくれてありがとね！」

ちょっと危ない発言をしたがお構い無しにエルダは魔術を放つ。

「《グラビティレーザー！》」

放たれた光は鈍い紫色で、結界に激突するとズンツと鈍い音を響かせる。

「さあ、質量を100倍にしたとっておきよ！いつまでもつかしら？」

すると結界にひびがはいりついにパリンという音とともに砕けるとレーザーはフェンリルの頭を消し飛ばした。

その後、フェンリルの爪と牙と毛皮を剥ぎ取り、報告は明日にして家に帰ることにした。

シャワーを浴びた三人はテーブルを挟むように座る。

「それで？あなたは何者なのかしら？」

エルダの質問に夜は笑顔で答える。

「私は別の世界の管理人です。ここには遊びに来ただけですよ」

エルダは無茶苦茶なことをする子だと思いつながらも納得した。

「じゃああなたも天使なのね？」

「ええ、そうです」

そういつと夜は翼を見せる。色は見た目とは反対に真っ白だった。

「それで、今日は宿もとってないですし……ここに泊めてもらってもいいですか？」

翼をしまいながら夜が尋ねる。

「ええ、構わないわよ？リリイもそれでいいでしょ？」

エルダがリリイに視線を向けるとリリイは既に夜をベットに押し倒していた。

「……って！リリイ何してるの！」

リリイは止めに入るエルダの腕を掴むとそのままエルダも押し倒す。

「ああ、こんな可愛い女の子が二人もいたら我慢できないじゃないの！」

そういつとリリイは夜の唇に自分の唇を重ねる。

「……ん……くちゅ……んあ……」

「……あっ……ちゅく……ん……」

それを見ていたエルダはしばらくもじもじとしていたが次第に涙目になりリリイに飛び掛かる。

「ずるい！私も！」

「ここからは音声のみでお楽しみください」

「エルダもやつと素直になったね」

「ち、違うわよ……ってリリィ！そこはダメ……あつ……んああ！」

「私も手伝つよ……」

「ふえ？夜さん？待って……あつ……ああ！……だめ！……ひゃう！」

「夜さんって……意外と激しいんだね」

「うふふ……」

「じゃあエルダがイツたら交代ね？」

「……ええ」

「待って……あう！何で……ひゃあ！私ばかり……ああ！」

「「だって可愛いんだもの」「」」

「そんな……あ！だめ！そこは……あつ！……だめ……」

「可愛いわよ……エルダ……」

「……ひつ……もう……うあああああああああああ！……」

-
-
-
-
-
-

「お世話になりました」

小屋の入口で夜は深々と頭を下げた。

「いいのよ、気にしないで」

「でも」

夜はベットにねているリリィを見た。まだ少し顔が赤く、幸せそうな顔をしていた。

「あれは私が悪いから……」

エルダは苦笑いを浮かべる。

「……ええ、まさか本気になったエルダがあそこまで激しいなんて……」

夜は顔を赤くしながら俯く。同じようにエルダも顔を赤くする。

「そ、それじゃあ…私はもう行くから」

そう言つと翼を広げて夜は空に舞い上がる。

「エルダ…また会いましょう？」

「…うん！」

エルダに手を振るとリリイによろしくと言って夜は空に舞い上がって見えなくなった。

「さて、リリイを起こさなきゃ！」

エルダは小屋の中に戻っていった。

-
-
-
-
-
-
-

夜は赤くなつた顔を深呼吸を繰り返して冷ますと右手を前に突き出す。すると真つ黒な扉が空中に現れひとりでに開くと夜はその中に吸い込まれるように消えていった。扉が閉まると真つ黒な扉はもうどこにもなかった。

-
-
-
-
-
-
-

白と黒が混ざり合う世界に二人の人物が同時に現れた。
一人は真つ白なショートヘアーので真つ白な服を着た少年。
もう一人は長い黒髪を揺らす真つ黒な服を着た少女だった。

「...やあ夜^よどうだった？」

少年が少女に話し掛ける。

「うん、エルダもリリイも元気そうだったよ。白^{はく}はどうだった？」

「ああ、由宇も神子も元気だったよ」

二人は笑い合つと白が手を前にかざす。すると一本のペンが現れた。
た。

同じように夜が手をかざすと分厚い本が現れた。

白と黒が混ざり合う世界で二人は寄り添いながら呟く。

白「…さて」

夜「…次は」

二人は笑いながら本の空白ページにペンを走らせる。

白&夜「…どんな話を書こうかな？」

特別話 黒の訪問者（後書き）

最後に出て来た白はくの話は猫パニの方に載せてます。

2・1 そうだ！学校行こう！（前書き）

新しく学校編2へと入ります。エルダ達の新たな活躍をお楽しみに！

2-1 そうだ！学校行こう！

「……ん……あれ？」

もうすっかり昼間となった時間にエルダは目を覚ました。

「……私どうしたんだっけ？何か全身がだるいし……」

エルダはベットから出ようとして自分が何も着ていないことに気がついた。

「え？あれ？ええええええええええ！？」

わけがわからずに混乱していると不意にリリイのことが気になり部屋を見渡すと、床一面が真っ赤でその床にリリイが裸で倒れていた。

「リリイ!？」

エルダは慌ててリリィに駆け寄ると怪我がないかを確認する。

「（…昨日は夕飯あたりから記憶がないけど…まさか敵が来たのかしら）」

エルダは不安になりリリイを揺さぶる。

「……リリイ！しっかりして！何があったの！？」

するとリリイが緑の瞳をゆっくり開く。

「あれ？…おはようエルダ」

眠たそうに目を擦りながらリリイは欠伸をする。エルダがリリイが無事なのを確認して安心していると、リリイの顔が赤くなりはじめる。

「リリイ？どうしたの？」

「エルダ…の…裸で…膝枕…ぶはあ！」

盛大に鼻血を撒き散らしてリリイは再び気絶した。

「あ！リリイしっかり！」

エルダはリリイを再び揺さぶるが今度は何かをやり遂げたような顔をするリリイを見て首を傾げる。

…裸、鼻血、床の血、記憶がない…

「まさか」

エルダは幸せそうなリリイを冷やかな目で見下ろすとニヤリと口元を緩めた。

サイSide

「……一体なんだこりゃ」

久しぶりにエルダとリリイに会いに来た俺の第一声はこれだった。真っ赤な床に正座しているリリイを物凄く美しい笑顔だが逆にそれが怖いエルダが見下ろしていた。

「……あら、サイじゃないの……悪いけど今からリリイと『おはなし』するからまた後にしてくれないかしら？」

エルダは笑顔で俺を見た。なにこの人こわいです。

リリイを見ると助けてくれと涙目で無言の訴えをしているが、今の俺はエルダの方が怖いので……

「……邪魔しました」

小屋のドアを閉めた。

「サイの裏切り者おおおおおおおおおおお！……」

リリイの叫び声が聞こえたがとりあえず無視した。

エルダSide

私はリリイと『おはなし』した後、サイを呼んで三人で今後の予定を話し合うことにした。

「…結局お前達は何をしてたんだ？」

サイが恐る恐る尋ねてきた。私はリリイから聞き出した話を聞かせた。

昨日リリイはとある人（お姉様と呼んでいるらしい）からもらった媚薬を私の料理に混ぜ、意識が朦朧としている私を襲ったらしい。記憶にないがそれはそれは凄かったらしくリリイの鼻血が止まらなくなる程だったようだ。

結果、鼻血を流し過ぎて途中で気絶。そのまま朝になった…ということらしい。

「…まったくリリイには困ったものよ」

私の言葉にリリイはしゅんとしてしまった。…言い過ぎたかな？

「……反省してます……後悔はしてないけど」

前言撤回、まだ『おはなし』が足りないようだ。

「……ひっ！待ってエルダ！ごめんなさい！反省してます！だからその素敵な笑顔でこっちを見ないで！」

私は無言でシャルを構えると空いている左手をリリイに向ける。

「……少し、頭冷やそっか」

「待て！エルダ！色々危ない！作者の立場的にも！そういうのは番外編でやれ！」

サイ、メタ発言はいけないよ？まあ今回はサイに免じて許してあげようかしら。

Side Out

改めて話を切り出すことにしたサイだったが、正直今の状態でちゃんと話を聞くのか心配だった。

「…さて、エルダ。さすがに話をきりだしてもいいよな？」

エルダは溜息をつきながら頷く。その横ではリリィがテーブルに突っ伏している。

「このままじゃちがあかないからね…」

サイは頷くと真剣な顔でエルダを見据える。エルダもその顔を見て気を引き締める。

「そろそろ学校に来てもいいころかと思うんだ」

エルダは顎に手をあてて考える。エルダとリリィが天使ではないかと噂になってから既に3週間程たっている。さすがにこのままにしておくわけにもいかない。

「俺はいつそのこと二人が天使であることをばらしてもいいと思うんだ…」

サイの考えにエルダは首を傾げる。

「何か考えでもあるの？」

サイは小さく息をはくと頬をかく。

「いや、特にない」

「……はい？」

エルダはさらに首を傾げる。

「こうやってウダウダしてるよりも開き直って学校来た方が手っ取り早いと俺は思うぞ？学校に行かない時点で認めてるようなものだしな…それに」

サイは苦笑いを浮かべた。

「おまえらが来なくなってからフィアナがご立腹だし、シャーリーとルイスも心配してる」

サイが話し終わるとエルダは俯く。サイは何かまずいことを言ったのではと思ったが、エルダは突然笑いだした。

「…エルダ？」

「あははは！そうだよ、何で深く考えてたのかな。ばれても別に困ることなんて無いじゃない！」

サイは突然のエルダの変わり様に啞然とする。

「私は一人じゃない。リリイやシャルやサイ、フィアナ、シャーリーにルイス。私の周りには頼れる仲間がいるじゃない！」

エルダはすっきりした笑顔でそう言う。と窓の外を眺めた。

「いつまでも管理人が閉じこもってばかりじゃいけないよね」

サイはエルダを見て安心したように笑っていた。

「ありがとう、サイ！明日からちゃんと学校行くよ。リリイと一緒に」

「にね！」

「ああ、待ってるよ」

そうやって今日の話し合いは終わり、エルダとリリイは明日の学校の準備をしていた。

「ねえ、エルダ？ちょっといいかしら」

リリイは悪戯を思いついた子供のような顔をエルダに向ける。

「てどうしたの？」

「明日の学校なんだけど…どうせばれてるなら空を飛んで行きたいなって」

「…新聞部に捕まっても知らないわよ？」

エルダは苦笑いを浮かべながら鞆に本を入れる。

「大丈夫よ！エルダもいるし、あの学校に私達より強い奴なんている？」

「あはは、いないわね」

思わずエルダも笑みをこぼす。

そうやって二人は再び学校に戻ることを楽しみにしながら眠りについた。

2 - 1 そうだ！学校行こう！（後書き）

白夜「新しく学校編2に入ったからまた忙しくなるね」

エルダ「あれ？白夜は何で戻ってるの？」

白夜「あれは私の気の迷いだから気にしないで…」

リリイ「えゝまた夜ちゃんに会いたいよう！」

夜「呼びましたか？」

リリイ「夜ちゃん！」

白「あれ！？いつの間に！？」

エルダ「あなた達って結局なんなのよ…」

白「…自分でもわからなくなってきた」

2 - 2 戦慄（前書き）

やっと学校に戻ってきました！

2 - 2 戦慄

エルダとリリイは現在雲一つない空を並んで飛んでいた。

「やっぱり空飛ぶのは気持ちいいね」

リリイは笑顔でエルダを見る。エルダも笑顔でリリイを見ると前に向き直る。

「あつ！学校が見えた！久しぶりだなあ」

前方に3週間前まで通っていた学校が見えてきた。エルダもフィアナやシャーリー達に会うのが待ち遠しかった。

学校から少し離れた場所に降りると歩いて学校に向かう。ちなみに現在エルダは髪の色を元の銀色に戻しているため周りの視線を感じて少し居心地が悪い。

「…あ、フィアナだ」

リリイの言葉にハツとなって前を見ると校門にフィアナとサイ、シャーリー、ルイスが立っているのが見えた。リリイが手を振って声を上げた。

「おーい！」

するとフィアナがこちらを見た瞬間物凄い勢いで走ってきた。長い金髪が優雅になびく。

「エルダ〜!!」

「ひゃあ!？」

フィアナが勢いよく抱き着いてきたのでエルダは思わず変な声を出してしまった。

「エルダ〜！どこに行ってましたの!？私はもう心配で心配で……」

「く、苦しい……」

エルダは小柄なので長身のフィアナに抱き着かれると顔が胸の辺りに埋まってしまうため息ができない。

「フィアナ…苦しい」

「…あつ…エルダ…嬉しい…ん…からって…そんなに顔を動かさなくても…」

フィアナは顔を赤くしながらもまんざらでもないような顔をしていた。

「フィアナ！何してるのよ！エルダは私の恋人なの！離れなさいよ〜！」

そこにリリイが乱入してエルダの取り合いになった。エルダを引き離そうとするリリイと離さないようにさっきよりも強く抱きしめ

るフィアナ。エルダにとってはどちらに転んでもいいことはない。

「二人とも、その辺にしておきなさいよ。エルダが可哀相だよ」

シャーリーの言葉に我に返った二人の腕の中でエルダは疲れきった表情をしていた。

「「ごめんなさい」」

エルダの前でリリイとフィアナは頭を下げていた。あの後とりあえず教室に行こうという話になり移動したのだ。しかし移動中エルダがまったく二人に話し掛けないので二人は居心地が悪く、ついに教室に入った瞬間に二人同時にエルダに謝ったのだ。

「…はあ、もういいわよ。私を大切に思ってくれてるのは伝わったから」

その言葉に二人はホッとする。なんとかエルダの機嫌が直ったところでフィアナがエルダをまじまじと見つめてきた。

「エルダ…あなた髪の色が変わりましたのね…」

フィアナとシャーリーとルイスの三人は黒髪のエルダしか知らないのだ。

「違うよ、これは元に戻したの。私はこれが地毛なの。…似合わない

いかな？」

「とんでもありませんわ！今のエルダの方が可愛くてよ！」

フィアナにそう言われてエルダの顔が赤くなる。

「あ、ありがとう／＼／＼／」

リリイが隣でいいなあと言っていたがとりあえず気にしないことにしてエルダは授業の準備に入る。

「（そういえば…私達が学校に来たのに新聞部の奴らが来ないわね……諦めたのかしら）」

なんだか少し引つ掛かるのだがまあ、いいかと心の中で呟くと授業に集中することにした。

そして放課後に事件は起きた。魔法演習の授業を終えて更衣室で着替えを済ませたエルダが教室に行くと黒板の前に入だかりが出来ていた。

「あ、エルダ！」

先に戻っていたリリイがエルダの方に駆け寄ってきた。

「何かあったの？」

リリイは小声でエルダに説明する。

「それが…新聞部が私達を捕まえて連れてきた人には豪華賞品をプレゼントっていう貼紙をしてたのよ」

黒板に貼ってある紙がそれらしいのだがエルダは首を傾げる。

「その割には皆興味なさそうね」

「まあ賞品の中身がわからないしね」

しかし新聞部が何をするかわからないので早目に帰ることにした二人は玄関を出て校庭に出た瞬間に数名の男子に囲まれた。

「…何か用ですか？」

エルダがやや不機嫌そうに質問すると男子生徒達の一人が口を開いた。

「おまえらを新聞部に連れていけば賞品がもらえるらしいんでね。悪いが一緒に来てもらおうか」

「その賞品が何かしってるの？」

リリイがその男子生徒に問い掛けるとニヤリと笑いながら頷いた。

「知ってるさ、賞品ってのは…」

「女子の着替えの様子の写真でしょ？」

男子生徒よりもエルダが先に答えたためにエルダ以外が驚愕する。

「お、お前なんでしってるんだ？」

エルダはふつと溜息をついて男子生徒を睨む。

「私が気づかないとでも思ったの？明日注意しに行こうと思ったんだけど…気が変わったわ」

エルダは楽しそうに笑うと周りの男子生徒は何故か恐怖を覚えた。

「どうする？私を捕まえる？言っておくけど容赦しないわよ？」

エルダの極上スマイルを見た男子生徒達は一斉に土下座した。

「……すみませんでした！！」「……」

エルダはその笑顔のままリリイに向き直る。顔が笑っているのに目が笑っていない。あまりの恐怖にリリイは冷や汗が止まらなかった。

「リリイ、少し待っててね？ちょっと新聞部と『おはなし』してくるわ…すぐに戻るから」

そう言つとエルダは校舎の中へと消えていった。

その後学校にいる全ての生徒が戦慄するほどの笑い声や悲鳴が聞こえたという。

そしてその日以降、この学校から新聞部が消えた。

2 - 2 戦慄（後書き）

お気に入り登録の数が増えました！
皆さんありがとうございます！！

2・3 エルダ達の日常（前書き）

今回は楽しんで書けました。楽しんでもらえたら嬉しいです！

2 - 3 エルダ達の日常

エルダSide

いつもの窓辺の席で私は外の景色を眺めている。あいにく今日は曇り空だ。

「…むっ、曇り空だと気分が沈むわね」

などと独り言を呟いていると背後から何やら怪しい雰囲気近づいてくるので振り返りながら強めのデコピンをする。

「にゃあ!？」

案の定、何やら手をワキワキさせながら近づいていたリリーの額にヒットしてそのまま彼女は後ろの壁まで吹き飛んだ。

「……加減を間違えたかしらね」

強めのデコピンで人が吹き飛ぶなんて…全力ならどれくらいだろうか…いや、考えないようにしよう。これ以上やると周りに迷惑がかかるから。

授業が始まったので私は再び空を見ながらノートにペンを走らせる。最近鼻歌を歌いながらも授業を受けれるようになった。私はどれだけ万能なのだろう…

ちなみにリリーはもう復活して授業を受けている…案外タフみた

いね、感心するわ。でも、額を撫でながら何故か嬉しそうなよね……リリイってMなのかしら……ちよつと不安だわ。

フィアナSide

皆さんお久しぶりですわ。私のことを覚えていらっしやるかしら？ 忘れた方は最初の方を読み直してくださいな。

現在は二時間目の魔法演習の授業ですわ。

説明がなかったので変わりに説明いたしますけど、このアスタル魔法学校は優秀な魔術師を育てるために主に魔法についての知識を勉強する場所ですわ。

今行われている魔法演習も魔法の訓練、及び危険性を理解するためですの。

「……それにしても」

私は今、集団から外れた場所にいるエルダをみていますの。彼女は周囲の温度を下げて自分の周りだけ雪を降らせているみたい……ああ、なんて美しいのかしら。さすがはエルダ、何でも出来ますのね……

「ほらほらサイ！避けないと火傷するわよ！」

「…ちょ！？リリイ！それは危ない！そんなたくさんのファイアーボール避けれないから！！」

エルダから少し離れた場所でリリイが30個程のファイアーボールをサイに向かって発射していますわね…彼女は鬼なのかしら…サイには後で治癒魔術をかけてあげないといけませんわね…

サイSide

皆久しぶりだな、サイマスだ。さっきは酷い目にあったが今は三時間目、魔法薬学の時間だ。魔法薬っていうのは体力や魔力の回復を助ける薬のことで、魔力が切れて動けなくなるのを防ぐために使われたりする。ちなみに今作ってるのは体力回復のための薬だ。様々な薬草を決められた量混ぜ合わせるだけで作れるから割と簡単なのだが…

「…あ！フィアナ！その薬草入れ過ぎだよ！？」

「…え？そうなのですか？」

「どう見ても入れすぎよ！…あっ！シャーリー助けて！」

「エルダどうしたの…って何これ！？何で綺麗な緑になるはずの薬が紫に！？」

「……これはあきらかに毒よね」

どうやらフィアナは魔法薬学にはむいてないみたいだな…気をつけなくては、あんなもの飲ませられたらたまったものではない…

「ちょっと色が違うだけですわ！…あ、サイ！ちょっと味見してみてくださいな！」

「何だと！？そんなものを俺に飲めって言うのか！？」

い、いけない！早く逃げなければ！

「逃がしませんわよ！」

「…何！？は、離せ！俺はまだ死にたくない！！」

腕を捕まれて逃げられなくなったのでエルダ達に視線を送るが…

「サイ、骨は拾ってあげるわ…」

「いや助けてくれよおおおおおお！！！！」

その後紫の液体を無理矢理飲まされたところで俺の意識は途切れた。

シャーリー Side

今は四時間目、さつき気絶したサイを保健室まで運んできたから少し遅れちゃったけど先生に事情を話したら顔を引きつらせながら納得してくれました。

今は音楽の時間です。あんまり勉強ばかりだと精神的に疲れるからって理由でこの時間は作られたみたい。今私達は音楽室で自由に音楽を演奏したり歌を歌ったりしてすごしてるの。

「あら、ピアノがあるわね」

私の隣にいたエルダがピアノに近づいて目を輝かせていた。

「ねえ、エルダはピアノ弾けるの？」

「うん、少しならね」

私が何か弾いてみてっってお願ひしたらエルダはしばらくは考えた後、ゆっくりとピアノを弾きはじめた。とてもゆっくりとした優しい曲で不思議と心が安らぐ感じがした。いつの間にか周りの皆もエルダの音色にうつとりとした表情を浮かべていて、曲が終わった瞬間拍手が沸き起こった。

「エルダ凄いね！」

「え？…そ、そうかな…あ、あり…がとう／＼／＼／」

そう言って顔を赤くして恥ずかしそうに俯くエルダはとっても可愛かった。うん、やっぱりエルダと友達になってよかったなあ

ルイスSide

ルイスだ、今は昼休みで僕はシャーリーと一緒に食堂で昼食をとっている。そういえば言ってなかったがシャーリーが姉で僕が弟だ…別にどうでもいいが。

「それにしても私達は双子で見た目はそっくりなのに性格は反対よね」

シャーリーが突然そんなことを言ってきたので僕は溜息をつく。

「いくら双子でも全く同じなわけないだろう…」

「ええ、そっなのかなあ…」

シャーリーが考えていることは僕には理解できないな。何でそんなことをいきなり考えつくのか僕にはさっぱりだ。

「あら、二人とも難しい顔をしてどうしましたの？」

いつの間にかフィアナが僕の隣に座っていた。考えることに集中していて気がつかなかった…

「…何でもない、ただの考え事だ」

僕はそれだけ言うと腕を組んで溜息をついた。

「ねえ、私達って双子なのに性格が反対じゃない？見た目以外で似てるところがないかなあって…」

シャーリーがさっきの疑問をフィアナに尋ねている。自分達にわからないことが他人にわかるわけがないじゃないか。

「あら、二人ともよく似ていますわよ？」

「え？例えば？」

フィアナは僕達の昼食を指差した。

「これのどこが？私達は違うものを注文してるから同じところなんて…」

確かに、僕は焼き魚にサラダとライスで、シャーリーはパンとコーンスープだけだ。

「ふふ、あなた達って甘い物が好きみたいですわね」

そういうとフィアナはあるものが乗った二つの皿を僕達の前に差し出した。

「厨房の人から渡し忘れたから渡してきてくれと頼まれたのですわ」

「「あっ！」」

それを見た瞬間、僕達は同時に声をあげた。皿に乗っていたのは……大好物のプリンだった。

リリイSide

やつほー！皆元気？リリイだよ！今は五、六時間目連続で薬学の授業をしてるの！この薬学は三時間目の魔法薬学と違ってちょっと危ない薬品について学習する時間なの！

ちなみに私は今、自由時間を使って知り合いのラストお姉様から頂いた薬を使ってどうすればエルダにうまく飲ませることができるか研究してるの

（ラストお姉様については七つ夜& a m p ;夜つ七さんの“俺の異

世界物語”を読んでね！)

うーん、やっぱりラストお姉様はすごいわね、こんな複雑な媚薬をどうやって作ったのかしら…直接聞いた方が早いかしらね…

「リリイ？何してるの？」

「ひゃあ！？な、何だエルダじゃない…どうしたの？エルダは違うチームでしょ？」

あ、あれ？何だかエルダの目が笑ってないよ？何で！？私ばれなようにしてたのに！？

「リリイ…そんなピンクのオーラ全開なら誰でもわかるわよ？」

「……ひっ！？」

エルダの手が肩に触れた瞬間思わず小さく悲鳴をあげてしまった。
…だってエルダ怖いんだもん！

「リリイ…ちよっと『おはなし』しながら頭冷やそっか？」

「…え？まさかのダブルですか？同時にするの！？エルダ！？」

「ふふふ」

そのままずるずると教室から連れ出された私がエルダに何をされたかはご想像にお任せします。

2・3 エルダ達の日常（後書き）

最近暑い日が続いていますが皆さん大丈夫ですか？私も夏の暑さにも負けない作品を書き上げるために頑張りたいです！o(´・´)(

2 - 4 新キヤラ誕生！？その名はエルちゃん！？（前書き）

最近部活のせいで疲れてすぐに寝てしまいます。：更新大丈夫で
しょうか（汗）

2 - 4 新キャラ誕生！？その名はエルちゃん！？

アスタル魔法学校…それは優秀な魔術師を育成するための学校であり様々な魔術に関する知識を学ぶ場であり、同時に将来独り立ちをした時に生活が困らないようにするための知識も学習する…例えば…そう、料理である……

エルダSide

「……えっと、これ何？」

私達が今いる場所は調理実習室、読んで字のごとく料理を実際に作りながら学習するための場所…のはずなのだが…

私達は今日授業でハンバーグを作る予定だった……私とリリィは以前お互いに交代で料理をしていたから大丈夫、ルイスとシャーリィも美味しそうだ、サイは少し形が崩れているがまあ、食べられないこともない…問題はフィアナだ。

数日前の魔法薬学の時間にとんでもない未知の液体を作りだし、サイを一日行動不能にした彼女は何かを作るのが苦手というか…不器用というか…はつきり言って料理の腕は壊滅的だ。

「料理は楽しいですね」

そう言う彼女の持つ皿にはハンバーグという名では絶対ないであろう物が乗っている。何故か色は紫色、しかもたまにゴボツという音がする。

「…リリイ、あれ何が入ってると思う？」

私が隣にいるリリイに小声で話しかける。

「…わかんない。でもさっき調味料の棚を見たらほとんどの調味料が無くなってたんだよね…」

私達は同時にフィアナの皿に乗っている謎の物体を見る。

ゾクッ

「~~~~っ!!」

突然謎の寒気に襲われて私は思わず小さく声にならない悲鳴をあげた。

「（あれを普通の人間に食べさせたら間違いなく死ぬわよ!?）」

私は直感的にそう悟った。しかし現実残酷なもので既にフィアナはある一人の人間をロツクオンしていた。

「さあ、サイ！味見をよろしくねお願いしますね」

そう、数日前にも謎の液体を飲まれたサイだ。何故かこういう時に限ってサイとフィアナは同じグループになる。

「ガクガク…ガクガク…ガクガク」

さつきからサイの様子がおかしい、これは助けてあげなくては…

「フィアナ…サイは今疲れが溜まってるみたいだから後で食べてもらったら？」

私は何とかしてフィアナから謎の物体を手放させようと思える。

「大丈夫ですわ！これを食べたら疲れなんて飛んでいきますわよ？なんせ私が作ったのですから！」

「（疲れどころか意識がとぶわよ！！）」

私は心の中でそう叫んだ。…まずい、このままではサイが危ない！…そう思った瞬間フィアナはとんでもない爆弾発言をした。

「…たしかにサイの調子が悪いみたいですね。…じゃあ、エルダがかわりに味見してくださいな」

「……………っ！！！」

わ、私にこれを食べと！？私は後ろを振り返って皆に助けを求めるが皆悲しそうな目で私を見ていた。

「さあ、エルダ」

落ち着くのよ私！私は不老不死だから死にはしないはず、ここは皆を助けるためだと思って…！

「…わ、わかったわ」

私は覚悟を決めると振り返り、リリイを見た。

「リリイ…私が倒れたら…後はよろしくね」

「…ええ！？エルダ！？なに縁起でもないことを！？」

リリイの叫びを背中であきながら私は一口大に切ってあったフィアナの料理を恐る恐る口に入れた。

「（…あれ？意外と味は悪くな…）」

思っていたよりも味が悪くないと驚いた瞬間、私は目の前が真っ白になった。

リリイ Side

私が心配しながら見守る中でエルダはゆっくりと謎の料理を口に

運ぶ。すると味は何ともないのか平気そうな顔をしている。

「あれ、意外と平気そう……」

私が思わずそう呟いた瞬間、エルダは突然糸が切れた人形のように椅子から崩れ落ちた。

「う、うそ……エルダー!!」

私が急いでエルダの顔を覗きこむと顔色が悪く苦しそうだ。

「誰か急いで保健室の先生呼んできて!」

私がそう叫んだ時、突然エルダが私の腕を掴んだ。私が驚いていとゆっくりと瞼が開く。

「ああ、よかった〜心配したのよエルダ……え?」

私は目の前にいるエルダに疑問を持ち、言葉が続けなかった。今のエルダの瞳は綺麗なスカイブルーではなく、ルビーのように真っ赤だった。

エルダ？Side

私は何故か痛む頭を我慢しながら目を開けた。目の前には黒髪で綺麗な緑の瞳をした女の人がいた。歳は私より上かな？

「ああ、よかつた！心配したのよエルダ……え？」

私を見ていたお姉さんは私の目を見て驚いた表情をしていた。

「…あの～」

私が声を出すと黒髪のお姉さんが優しく私の体を起こしてくれた。

「あ、ありがとうございます」

私がお礼を言うと黒髪のお姉さんは首を傾げた。私何か変なことを言ったのかな？

「あ、あの…私何か変なこといいました？……というかお姉さんは誰ですか？」

リリイSide

今エルダはなんと言った？

「エルダ？…私のこと忘れちゃったの！？何で！？」

私が泣きそうになるとエルダは慌てて私の手を握ってきた。

「あ、あの…な、泣かないください！ああ、どうしたら……ふええええ」

私につられてエルダまで泣き出した。彼女が泣く姿なんてほとんど見たことがなかったけど……

しばらくして泣き止んだ私達は保健室にいた。

「ふむ、原因は間違いなくフィアナさんが作った料理ね……」

保健室の先生であるナナリー・リナクル先生はエルダにしばらく魔力による身体検査をした後そう言った。

「あの、先生。エルダの記憶は……」

私が不安になって質問すると先生は笑って私を見た。

「大丈夫よ、一時的な記憶障害みたいだからちよつとしたきっかけさえあればすぐに思い出すはずよ」

私は安心して一気に気が抜け、そのままベットに座って息を吐いた。

「あ、あの…私はどうしたら……」

エルダはいつもの大人っぽい印象ではなく少し幼い印象を受ける。これはこれで可愛いかも……

「そうね、今日はもう帰りなさい。リリイさんも一緒に帰ってあげて？家についたら何か思い出すかもしれないし」

「わかりました」

私達は保健室を後にすると並んで玄関に歩き出した。

「あの…リリイさん？」

エルダが私に話しかけてくる。しかしエルダが私よりも背が低いので自然と上目遣いになっている。……か、可愛い！恥ずかしいのか頬が赤いから更に可愛く見える！ダメよりリリイ！エルダは今記憶がないんだから、襲ったらダメよ！

「何かしら？」

抱き着きそうになるのを必死に我慢して私は笑顔で答えた。

「あの、私とリリイさんはどんな関係ですか？」

「うーん、恋人ね」

私は笑顔のまま答えた。

「こ、恋人！？ええ！？でも、私達女の子同士じゃないですか！！」

「まあ、そうなんだけど…愛に性別は関係ないわよ」

エルダは私を愛してくれて私もエルダを愛してる。一緒に生きよ

うと誓い合った。この思いに性別なんて関係ない。

「……………／／／／／」

するとエルダが顔を赤くして私を見ていた。…可愛いな。

「なんだかわかる気がします……………リリイさんを見るとドキドキするんです」

私は少し驚いた。エルダは私を思い出せなくても私を感じてくれているのだろうか。…嬉しい。

「ねえ、記憶が戻るまでエルちゃんって呼んでいい？」

「……………え？何ですか？」

エルダは可愛らしく首を傾けた。…うん、やっぱり可愛いなあ。

「記憶が戻ったらそんな風に可愛いしぐさなんてしてくれないからね。今のうちに堪能しとくのよ」

「……………いいですけど、普段の私ってどんな感じなんですか？」

そんな会話をしながら私達は帰り道を歩いて帰った。今のエルダは普段見せない満面の笑みを見せてくれている。私は少しだけこのままでもいいかな、と思ってしまった。

2 - 4 新キャラ誕生！？その名はエルちゃん！？（後書き）

エルダの運命ないかに！！

2・5 忍び寄る魔の手？（前書き）

今回はちょっとしんみりした感じです。

2 - 5 忍び寄る魔の手？

リリイと記憶が戻らないままのエルダは湖の側にある家に帰ってきた。

「うーん…4時間目の途中から早退したから今はだいたい昼休みの時間よね」

リリイはドアを開けながらそう言うとエルダの方に向き直る。

「ねえ、エルちゃん！お昼は何が食べたい？」

リリイの問い掛けにしばらく考えたエルダは可愛らしく首を傾げる。

「…何でもいいです」

「それが一番困るのよね…」

リリイがそう言うとエルダはクスクスと笑いだした。

「ああ！エルちゃん酷い！せっかく真面目に考えてるのに！」

「ごめんなさい、なんだか可笑しくて」

そして二人でしばらく笑い合った。

結局、昼食は簡単なものですませた二人は湖の淵に座り、リリイ

「
というわけ。わかった？」

リリィは微笑むとエルダの頭を撫でる。

「大丈夫よ、すぐに全部思い出わ。それに、私とシャルもいるし……ね？」

「あの……そういえばシャルって誰のことですか？」

エルダが反対の方を見ると一本の剣が置いてあった。さっきリリイが一緒に持ってきたのだ。

「……へ？……ええええええ！？け、剣が喋った！？」

その後シャルのことを説明しているとすっかり夕方になってしま
い、二人は夕食を食べるとテーブルを挟んで向かい合う形で座った。

254

ナさんの料理を食べたのが原因で私はこうなったんですね？」

「ええ、フィアナには明日お仕置きするとして、今日はもう寝ましようか」

二人は今日のことを振り返りながら明日の予定を確認していた。エルダは明日も普通に学校に登校するつもりらしく、リリイはそれをサポートすることにした。

「…喉が渴いたから水が飲みたいですね」

「あ、じゃあ私がくんでくるよ」

「ありがとう、リリイさん」

まだ名前から“さん”が抜けないことを少し寂しく感じながらもリリイは台所に入った。

「（やっぱり調子狂うなあ…）」

リリイは水の入ったコップを見つめながら溜息をついた。いつもならエルダにちょっかいを出して怒られたり反応を見て楽しむのがリリイの楽しみなのだ。

しかし、エルダは現在記憶が曖昧ではっきりとしていない。わかっているリリイにとっては精神的に辛い。

「……私はどうしたらいいのかな、エルダ……」

リリイは一人台所で呟いた。

エルダ Side

リリイさんが台所に行くのを見ながら私は心の奥にすっきりしない気持ちを抱えていた。

「…ねえ、シャル」

『なんですか？マスター』

私はシャルに相談しようと話しかけた。

「リリイさんってなんだか無理してる気がするの…」

『……………』

シャルは何も言わない。でも私は構わず続ける。

「私に優しくしてくれてるのはわかるけど…何かを我慢してるっていつか…堪えてるように感じるの。シャルはなんでかわかる？」

シャルはしばらく黙っていたけど答えてくれた。

『リリイはいつものようにあなたと触れ合えないから不安なんですよ…』

「いつものように触れ合えない…」

『はい、以前からリリイはマスターと恋人だということは聞いてますよね？』

「…うん」

『リリイはいつもあマスターにべったりでした。そしてマスターも嫌な顔をしてましたがおそらく心の中ではそう思っではいなかったと私は思いますよ？』

そう言ってシャルは黙ってしまった。私がリリイさんの行動に違和感を覚えるのはそのせいなのかな…わからない。

私はリリイが好きだよ

「……！」

何？今の…私の声だけど…私じゃないみたい…

あなたはリリイのことが好き？

うん、私はリリイが好きだ。一緒にいたら何故か安心できて…温かい気持ちになる。

リリイは優しいから…あなたを不安にさせないようにしてるのよ

私のために？

そう、あなたのために。自分の気持ちだけであなたを傷つけない

いように

じゃあ私はどうしてあげたらいいのかな…

そんなの簡単だよ

私は彼女…もう一人の私の言葉を聞いて思わず微笑んだ。…なんだ、簡単じゃないか…

頑張つてね、エルちゃん

うん、ありがとう。……エルダ。ちゃんと言うよ…今の自分の気持ちと、そして……彼女の名前を…

S i d e O u t

リリイ S i d e

私が台所から出て、テーブルに戻るとエルダが笑ってこっちを見ていた。

「どうしたの？エルちゃん、そんなにニヤニヤして」

「ふふ、何でもないよ…」

私が首を傾げているとエルダは私の手を握ってきた。私が少し驚いていると、エルダは顔を少し赤くして立ち上がる。そして私の手を引いてベットまで歩くとベットに座った。

「…エルちゃん、どうした……っ!」

私が言葉を言い終わるまえにエルダは私の唇を自分の唇で塞いだ。

「……ん……くちゅ……ふっ……」

「……くちゅ……んあ……ん……」

数十秒のゆっくりとしたキスをした後、唇を離す。透明な糸が二人の間にかかっていた。

「…エルちゃん?いきなりどうしたの?」

するとエルダ私に抱き着いてきた。顔は隠れて見えないがたぶん真っ赤になっているだろう。

「…昼間からずっと我慢してたんでしょ?」

「……え?」

私はエルダの言葉にドキッとした。

「ごめんね、心配かけちゃって。私は……リリイのことが好きだよ」

「……!」

エルダが私の名前を言った瞬間、私は視界が滲むのがわかった。さっきまで“さん”をつけて呼ばれていたから…なんだかエルダが遠くに行ってしまったみたいで怖かった。

「…リリイ？」

エルダは私が泣いているのに気がついて不安そうな顔をしていた。だから私は思いっきりエルダを抱きしめた。

「私も…エルダが大好きだよ」

私達はそのままもう一度唇を重ねた。

S i d e O u t

二人は抱き合いながらお互いの顔を見つめていた。

「……ねえ、エルダ」

「…何？リリイ」

リリイは赤くなった顔でエルダを見ていた。

「私…我慢しなくてもいいのかな…」

エルダは顔を赤くしながら静かに頷いた。

リリイの手がゆっくりとエルダの胸の二つの膨らみに触れる。エルダはビクツと体を震わせたが、すぐに力を抜いてリリイに体を預けた。

「エルダ…可愛いよ…」

リリイの手が服の中に入りこみ、ゆっくりと二つの膨らみに指を埋める。

「…あ…ん…リリイ…ああ！」

エルダは喘ぎ声をあげながらリリイの名前を呼ぶ。それだけでリリイの理性はあっさりと崩れた。

片方の手がゆっくりと下へと移動する。そしてそのまま……

く自主規制ですく

リリイSide

あれからエルダは何度か絶頂を迎えた後そのまま眠ってしまった。
私はエルダの寝顔を見ながらしばらくそのまま動かなかった。

エルダは私との記憶が無くても私を好きだと言ってくれた。それ
だけで私は一気に心のもやが晴れた気分になった。

「私はいつまでもエルダの側にいるよ……ずっと、一緒だからね」

そう呟いて私は“明日もエルダと笑い合えますように”と願ながら深い眠りに落ちていった。

2・5 忍び寄る魔の手？（後書き）

次回ははっちゃけます。自重なんてしませんよ？ふふふ

2 - 6 自重？何それ？美味しいの？（前書き）

白「これが自重することを放棄した俺達の…全力全開！！」

フィアナ「さあ！始めるぞます！」

エルダ「いくでがんす」

リリイ「ふんが〜！」

夜「まともに始めなさいよ！！」

天「いいじゃないか！ただだし！」

白「うお！いつの間に！？」

2 - 6 自重？何それ？美味しいの？

教室のとある机の周りにいつものメンバーが集まっていた。そのメンバーに囲まれた少女…フィアナは視線を明後日の方向に向けながら冷や汗をかいていた。

よりにもよって自分の作り出した物体で事件が起こったのだから…しかも被害者はあのエルダである。彼女なら笑って許してくれそうなのだが、現在そのエルダは記憶障害により一時的な記憶喪失でありエルダからのフォローは期待できない。

さらに厄介なのはエルダのパートナーであり恋人のリリイである。エルダに何かあれば真っ先に駆け付ける程にエルダ一筋な彼女は現在かなりご立腹である。

「……………」

先程からフィアナを睨んだままの彼女から必死に目を逸らすフィアナにいつもの強気な印象は感じられない。

「ねえ、フィアナ…あなた自分の料理がどれだけ危険かわかってたんでしょう？何でエルダに食べさせたの？おかげで私達だいぶ大変な目にあっただけだよ」

リリイの言葉にエルダは昨日の事を思い出して苦笑いを浮かべている。ついでに少し顔も赤い。

「え、えつと…私はただ誰かに食べて欲しかっただけですわ」

フィアナの意見がわからないわけではない。自分を認めてほしいと思うことは悪い事ではないが…今回は相手が悪かっただけである。

「さあ…つてと　フィアナ…ちょっと顔かしなさい」

リリイはどうしてもフィアナにお仕置きをしたいらしい。リリイはたまにSなのかMなのかよくわからない

「（…今のリリイは何をするかわかりませんわ）」

フィアナはリリイをじっと見つめて様子を見る。

「…クスッ」

「……っ!？」

次の瞬間フィアナは走り出していた。それはもうオリンピックに出たら金メダルもののスピードだった。

「クスクス…逃がさないわよ?」

そう言つとリリイは黒い笑顔のままゆっくりと教室から出ていった。

「…あのままじゃフィアナが何されるかわからないわね…」

仕方ないので他のメンバーもフィアナを守るために動き出した。

エルダSide

「あらら…フィアナさん本気で逃げてるみたいだね」

私の目の前には大きなシャッターが降りていて廊下を塞いでいた。

『おそらくフィアナが時間稼ぎに警報装置を起動させたのでしょう』

シャルの言葉に苦笑いしつつ私はシャッターに触れる。…なかなか頑丈そうね……

『マスター、ここは一つ~~~~~なんてどうです?』

「うん、やってみる!」

シャルからの提案を聞いて私は右手の拳を握りしめる。…いくわよ!

「二〇の極み アアアアアア!」

ズガアアアアアン!!

「わお！凄い！本当にできた〜！」

『……まさか本当に成功するなんて』

私達は壊したシャッターを通り抜けてフィアナさんを探すのを再開しようとしたけど…

「またシャッター！？一体いくつあるのよ！！！」

これじゃフィアナさんを助ける前に私達が力尽きそうね…

『マスター、しょうがないですよ彼女も必死なんです』

うん、わかってるよ…仕方ない、ここは一気にいきますか！

「シャル！いくよ！全力全開！」

「『スターラ○トブレイカー！！』」

ドオオオオオン！！

『マスター！シャッターあと二つです！』

「必中必殺！クリティカルブレード！」

ドガアアアアン！！

『最後です！！』

「微塵に碎ける！ジェノサ○ドブレイバー！！！」

ドッカアアアン！！

今の私なら何でも出来そうな気がするわ……

『マスター…本当に記憶ないんですか？もう戻ってるんじゃない？』

「いや…まだみたいけど」

私はやり過ぎたなと思いながらもフィアナを探すのを再開した。

フィアナSide

私は今学校の裏側にある倉庫にもたれかかりながら息を整えていた。

「はあ…はあ…とりあえず…大丈夫かしら？」

私は額の汗を拭って辺りを見回す。今下手に動くのは危険だ。あのリリイに捕まったら大変なことになる。…しかし私は油断していた。リリイも天使の眷属になっていることに。

「…ふふ、やあっとみ・つ・け・たあ」

「!!!!」

突然声が聞こえたので私は辺りを見渡すが誰もいない。

「こっちだよ」

私はゆっくりと顔を上げた。そう、声は空から聞こえたのだ。

「…うふふふ」

そこには翼を広げて浮かぶ天使と言う名の悪魔がいた。

「リ、リリィ…その、謝るから許してくださいませんか？」

「うん、それ無理」

フィアナは懷からナイフを取り出した。

「だって、私は本当にあなたに死んでほしいんだもの」

「い、意味がわからないですし、笑えないですわ!」

「…クスクス　じゃ、死になさい」

私は咄嗟に近くの開いている窓から校舎の中に飛び込んだ。そのまま廊下を全力で走る。

「（走れ！走るのよ私！心臓が破れるくらいまで!）」

私は最早リリイから逃げることを考えていた。

エルダSide

「裂衝蒼○塵！！」

ズバアア！！

私は再びシャッターに道を塞がれそれを破壊していた。

「…もう、いや」

何で私がこんなことをしなければならないのだろうか。私は若干涙目になりながら廊下を進んでいた。

『マスター、あれでここは最後です』

私は今までの不満を爆発させる勢いでシャッターに向かって走った。

「秘奥義・重○甲破り！」

ドオオオオオン！！

私は何をしてるんだろう……。そう思いながら廊下の角を曲がろうとした瞬間私は目の前にフィアナが走りこんできた。

「……あ」

ゴンッ！！

私とフィアナは盛大に額をぶつけてしまった。そして私は頭の中で何かがはまる音がした気がした。

「……！！」

「だ、大丈夫！？フィアナ！？」

私は倒れているフィアナに駆け寄ると回復魔術を使った。

「あ、ありがとうエルダ……」

「一体どう……した……の……」

私はフィアナが走ってきた方の廊下を見て言葉を無くした。はつきり言う目茶苦茶だった。壁は剥がれ、窓は粉々、天井には穴が開いている。

「フィアナ、これは誰がやったの？」

「あ、リリィですわ」

あの子っいたらまた暴走したのね。私のためにだから嬉しいけど…これはやり過ぎだわ。

「あゝ！エルちゃんだゝ！」

噂をすればなんとやら…リリイが近づいてくるのがわかる。フィアナがガクガクと震えだした。

そしてフィアナが私の肩に手を置いた。

「待っててね！今すぐフィアナにお仕置きしてまた甘い二人だけの時間を…」

ガシッ！

「…エルちゃん？」

「ねえ、リリイ…ここまでやらなきゃいけないことなの？」

私はリリイの手を掴んでゆっくりと振り返った。

「…あれ？エルちゃん？瞳の色が…」

「…ただいま、リリイ」

ええ、完璧に戻りましたよ。たぶん瞳の色も元に戻っているだけう。

「それじゃ…リリイ、学校を壊したから『おはなし』しまし
ようね」

一瞬顔をで真っ青にしたリリィに私はゆっくり右手をむける。

「…クロ○ファイアー……シュート!」

ドガアアアアン!!

それから校舎の修繕のために学校はしばらく休校となったが、騒ぎの原因である私とリリィとフィアナは毎日手伝わされたのは言うまでもない。

2 - 6 自重？何それ？美味しいの？（後書き）

白「あははは、やっちゃったぜ」

夜「やり過ぎたかしら？」

白「俺は最早止まらんぜ！！」

夜「止まりなさい！！バニッシュ、デス！！」（一撃必殺）

白「ぎゃあああ！！」

2 - 7 迫る影（前書き）

天がないので番外編はもうちょっとお待ちください。

かわりに本編を少し進めます。

2・7 迫る影

エルダは真っ白な空間に浮かんでいた。どちらが上でどちらが下かもわからない、ただ浮かんでいるだけ。

「（そうか…これは夢ね…）」

エルダはゆっくりと周りを見渡す。夢だと気がついても特に何も思わない。

すると周りの景色が突然変わり始めた。真っ白な空間に突然壁や床、天井が現れ始める。

「（……私は知ってる）」

更に窓が現れて外からは夕日が部屋の中を照らす。

「（…ここは、私がいた孤児院）」

完成した部屋は前世で暮らしていた孤児院の一室だった。

ドクン

エルダの鼓動が大きくなる。

「（ダメだ、この先に進んだら…）」

ドクン

しかし、エルダの思いとは反対に体が勝手に部屋の奥へと進んで行く。

ドクン

「（ダメ…この先に行かないで！）」

エルダの体はある扉の前で止まった。この先にある光景をエルダは知ってる。だからこそ開いてはいけないことを知っていた。

「（…嫌！やめて！）」

ガチャッ

ゆっくりと扉が開くそして…

ドクン

部屋の中には二人の少女がいた。ただ、一人は床に倒れている。床に倒れている少女は黒髪のショートヘアで、うつすらと目を開けてエルダを見ていた。

「…蒼真…ご…めん…ね…や…く…そく…守れ……ない…」

その言葉を最後に彼女は瞼を閉じて動かなくなった。気づけば床は彼女の血で真っ赤になっていた。

ドクン

「…ねえ、蒼真」

突然もう一人の少女が口を開いた。少女の黒髪は床につくほど長く、左目は冷たい雰囲気を表すような漆黒。右目は怒りを表すように真っ赤だった。全身に返り血をあびて立つ姿ははつきり言って異常だった。

ドクン

彼女は床に倒れている少女を見下ろす。

「…あんまりにもこの子が蒼真から離れないから……殺しちゃった」
ドクン

彼女はこちらに向き直ると笑顔を浮かべた。

「これで…私達を邪魔する人はいないね！」

ドクン

まるで無邪気な子供のような笑顔。しかし、彼女の周りにある光景がそれは異常であることを伝えている。

「私はあなたを愛してる…誰にも邪魔はさせない」

彼女はそう言うと言で真っ赤になった手をエルダに向ける。

「さあ…私を愛して」

彼女の手が触れる瞬間。

「イヤアアアアアアアア！！」

視界が白に塗り潰された。

「イヤアアアアアアアア！！」

突然の叫び声でリリイはベットから飛び起きた。

「エルダ！？」

隣のベットでは上半身を起こした状態で頭を抱えて震えるエルダの姿があった。

「エルダ！？どうしたの！？大丈夫！？」

慌ててリリイがエルダに近づく。

「……やめて……違うの……私は」

エルダは涙を流しながら何かを呟いていた。

「エルダー!!」

リリイがエルダの顔を自分に向かせる。エルダの目は焦点が合っていない、虚ろなまま涙を流し続けていた。

「エルダ！しっかりして！私ができる!？」

リリイの言葉に少しずつエルダの瞳に光が戻りはじめた。

「あ……リリイ?」

エルダはリリイの名前を呼ぶとそのままリリイに抱き着いた。

「…エルダ」

「ごめん…少し…このままにさせて…」

「…うん」

それからしばらく二人はそのまま抱き合っていた。

エルダSide

本当にまいった。まさかあの時の夢を見るなんて…

夢の中の光景が再び浮かんできそうなので私はそのことを考えないようにした。

「……朔夜^{さくや}」

私はぽつりと一人の名前を呟いた。あの歪んでしまった少女の名前を…

「…エルダ？」

私を抱きしめていたリリイが心配そうに声をかけてきた。

「…なんでもないよ、ごめんね…リリイ」

私はもう忘れようと夢の光景を記憶の隅に押し込んだ。

「（あれはもう終わったことよ…）」

私はそう思った。辛い過去のことよりも今はリリイの温もりを感じたかった。

リリイ Side

あれからしばらくしてエルダはいつもの調子に戻っていた。

「ごめんね…リリイ、心配かけたね」

「うん、気にしないで…」

エルダはありがとうと言うとキッチンの方にあるいて行った。

私はエルダの後ろ姿を見ながらさっきのエルダが呟いた名前のことを考えていた。

「…サクヤって…誰だろ」

私はエルダの過去について知らない…

「（いつか…話してくれるかな）」

そう思いながら私はしばらく物思いにふけっていた。

Side Out

しばらくして二人は学校へと出かけた。先日壊された校舎も綺麗

に修繕されている。

「ふあゝ……おはよう、エルダ、リリィ」

学園の入口でシャーリーが待っていた。まだ眠いのか目を擦り、さらには少しフラフラしている。

「おはようシャーリー、眠そうだね」

エルダがそう言うとシャーリーは苦笑いを浮かべる。

「アハハ…実は昨日の夜に隣の街に軍隊がきてるって聞いてね、気になって眠れなかったわよ」

「…軍隊？」

エルダは首を傾げてシャーリーを見る。

「うん、私のお父さん軍人だからそういう情報はよく伝わってくるんだよ」

「珍しいわね、何しに来たのかしら…」

「さあ？なんでも人を探してるらしいわよ？人数は二人だって…」

エルダはリリィとお互いの顔を見合わせて同時に呟いた。

「…まさかね」

??? Side

つまらない

私は窓から外を眺めながらいつもと同じように紅茶をのんでいた。

私は普段、金さえもらえたら何でもやる。殺し、傭兵、配達、窃盗…様々なことをして生きてきた。

といっても私はそんな毎日に飽き飽きしていた。私には膨大な魔力があり幼い頃から魔術の才能があったらしく、すぐに魔術を使いこなした。

そのため私と対等に戦える者などいなくなった。だから退屈なのだ…毎日がつまらない、だから今回の仕事もさっさと終わらせて帰って眠りたい。

私の夢には必ずある人物が出てくる。私には前世の記憶があり、その記憶の中には私が唯一対等であると認めたある少年がいた…彼は戦う力はなかったが近くにいただけで心が満たされた。だからこそ私と一緒にいてほしかった。

しかし、彼は私を拒絶した。彼と一緒にいられないとわかった私は自ら命を絶った…しかし、気がついたらこちらの世界にいた。彼

がない世界に興味はなかったが何故か再び自殺する気にはならなかった。

私は現在とある依頼で二人の人物を探している。私は夢の中で彼に会うために早く仕事を終わらせたい。だから私は一人で先に行くことにした。

「おい、何処へいくんだ！」

宿を出ると私と一緒に来た軍隊の男が声をかけてきた。

「…少し下見をするだけよ」

私はそれだけ伝えると風になびく黒髪を右手で抑える。そしてずっと右目に指を動かす。右目には眼帯がしてある。別に見えないわけではない。ただ他人には見せられないだけだ。私が眼帯に触れた瞬間…

彼がいる……

ドクン

私の中で誰かが囁く、心臓の鼓動が高鳴り右目から強い力を感じた。私はその瞬間無意識に走り出していた。

彼がこちらの世界にいる！

何故かわからないが感じた。彼の気配を…ここから割と近い街から。

私は心の底から溢れる衝動に歓喜してひたすら愛しい彼がいる方向に向かって走った。今度こそ離さない！

そして、私は口にする…愛しい少年の名前を。

「今から会いに行くよ、待ってて…蒼真！」

2 - 8 “朔夜”（前書き）

あれ？どうしてこうなった？何だか無理な展開に…（汗）

2 - 8 “朔夜”

放課後、エルダ達は教室でいつものようにおしゃべりの時間を堪能していた。

「それにしても軍隊かあ… たった二人を見つげるために軍隊送るなんて何考えてるのかしら…」

シャーリーの言葉を聞いてエルダは苦笑いをした。

「たぶんその二人が凄く強いんじゃないの？」

リリイがエルダと同じように苦笑いをしながら言っ。

それからしばらくして皆が帰り支度を始めた時だった。

「……っ！」

突然エルダは胸の奥をえぐられるような痛みが襲った。

「エルダ？」

「エルダ、どうかしたのか？」

エルダは気がついた。とても大きな力が近づいてくる。そして、あるはずがない気配も。

「……来る…彼女が……朔夜が…来る！」

「…サクヤ？」

エルダの呟いた名前にリリイが微かに顔をしかめる。

「ねえ…エルダ、サクヤって……」

リリイがエルダに尋ねようとした瞬間。

「……！！皆ふせて！！」

エルダの叫び声が響き、そして、窓側の壁全てが吹き飛んだ。

朔夜Side

私はひたすら街道を走っていた。人にぶつかろうが関係ない。私は彼に会いたい。

街の中央広場にたどり着き、そこから見える大きな建物を見る。おそらく学校だろう。その学校らしき建物の二階のある部屋から彼の気配を感じた。

「みつけた」

私は魔法で空中に飛び上がり彼の気配のする部屋に向かって飛び込んだ。魔法の力を使ったから一緒に壁が全て吹き飛んだけどどうでもいい。

「久しぶりだね……蒼真」

私は彼の名前を呼んだ。

エルダSide

私は咄嗟に皆の前に障壁を展開して吹き飛んできた壁の残骸を防いだ。

「久しぶりだね……蒼真」

私は真っ直ぐ外から入ってきた人物を見る。足元まである漆黒の黒髪をなびかせて立つ少女がいた。右目には眼帯をしており左目は髪と同じ漆黒だった。

「……朔夜」

「……あら？あなたは誰かしら？私は蒼真っていう男の子を探して

るんだけど」

朔夜は教室の中をキョロキョロと見渡す。

「…なんであなたがここにいるの？」

私はそんな彼女のことは気にせずに質問する。

「私の愛しい人の気配を感じてね」

「……そうじゃないわ。あなた…死んだはずでしょ？」

朔夜は少し驚いた顔をした。

「…私を知ってるの？」

私は朔夜を見つめたまま頷く。

「よく知ってる…いや、覚えてる。だってあなたは…私の目の前で自ら命を絶ったんだから」

朔夜が今度は本気で驚いていた。朔夜はこんなにも感情が豊かだったのだろうか……

「あ、あなた……まさか…蒼真なの？」

私は少し目を細めながら朔夜を見た。

「ええ…今はエルダって名前だけど」

朔夜はしばらく呆然としていた。私を異常なまでに愛していた少女。その愛しい少年が少女になっていたのだから無理もない。いつそのまま二度と会わなければとも思う。でないと昔を思い出す。

「……朔夜」

すると、突然朔夜が口を開いた。

「……か」

「……か？」

「可愛い……!!」

「……なっ!？」

朔夜は私に抱き着いて頼ずりをはじめた。朔夜ってこんな性格だったのだろうか。

「蒼真」。あ、今はエルダか。エルダってすごく可愛くなったね」

朔夜の表情から以前のような恐怖は感じない。

「え、えっと……朔夜？何だか性格変わってない？」

「そんなことないわよ？私はこれが普通だし……」

すると今までの展開についてこれなくて呆然としていたリリィ達がようやく復活した。

「わ、私のエルダに何するのよ！離れなさい！」

リリイの言葉に朔夜は首を傾げる。少し可愛らしいと思ってしまったのは黙っておこう。さっきまでの緊張感は綺麗になくなった。

「私は朔夜、この子と前世で結ばれていた恋人よ。あなたは？」

ちよつと待った。私は恋人になったおぼえはないわよ？

「私はリリイ、エルダの恋人よ！早くエルダを離しなさい！」

朔夜は私とリリイを交互に見た後、瞳を輝かせた。

「なんだ！そうだったの！じゃあ私もエルダの新しい恋人になる！」

「はあ！？」

私は思わず間抜けな声を出してしまった。リリイは絶句している。

「…でも、朔夜…あなたまた誰かを傷つけるんじゃない？」

朔夜は、はい？と首を傾げた。

「なんのこと？」

「忘れたの！？あなた、私と仲が良かった奈美^{なみ}を殺したじゃないの！」

私が涙を流しながら言うと、朔夜は思い出したように手を叩いた。

「ああ、あの事が」

私は段々と怒りが湧いてくるのを感じていた。そんな一言で済ませるほど簡単な事ではないはずだ。

「彼女、死んでないわよ？」

「……………え？」

私は言葉の意味を理解できずに混乱した。本当はしんでない？ならあの光景は？あの大量の血は？一体なんだったのだろう。

「あの日はあなたを驚かせようと二人でドッキリを仕掛けたのよ」

「…なっ！ドッキリ!？」

「あの日、何月何日か覚えてる？」

忘れもしないあの日は四月一日で……………まさか。

「…………エイプリルフル？」

「そう、だから二人であんなお芝居をしたのだけれど…予想以上にショックだったみたいね」

そうだ、あれから私は朔夜から全力で逃げ出した。

「あれはドッキリなんてレベルじゃないわよ！あれから夢に出てく

るのよ！？私がどれだけ怖かったかわかる！？」

私は友達が生きていた嬉しさと朔夜への怒りから涙目になっていた。

「でもあなたの目の前で死んだのは本当よ？」

その後、私を追い掛けてきた朔夜は

『あなたが愛してくれないなら…』

と言ってナイフを自分の胸に突き刺したのだ。

「実はナイフは偽物だったんだけど…心臓麻痺が同じ時に起きてね

…」

「じゃあ…自殺ではなかったの？」

「…ええ」

私は全身から力が抜けてその場に座りこんだ。

「エルダ、大丈夫？」

リリイが慌てて体を支えてくれた。

「私は死んじやったから知らないけど…あれから奈美には会わなかったの？」

「…うん、あれからしばらく知り合いの家で引きこもって…たまた

ま外に出た時に事故に遭って死んだから…」

「あらら、そうだったんだ…奈美は大丈夫かなあ」

朔夜の心配そうな顔を見て私は重い呪縛から解放された気分になっていた。朔夜は何もしていなかったのだと知ったためか逆に安心していた。実際の真実はなんとも言えないような内容だが…

「さて、私はそろそろ帰ろうかな。仕事もあるし」

「朔夜ってどんな仕事してるの？」

私の問い掛けに朔夜は苦笑いをしながら答えた。

「何でも屋…かな。ちなみに今は依頼の途中」

「どんな依頼？」

朔夜はニヤリとわらって私とリリィを指差した。

「あなた達を捕まえること」

「…マジで？」

「うん、マジで」

私は朝シャリーから聞いた情報から朔夜が軍隊に雇われたのだということが想像できたので、なんという運命なのだ…と溜息をついた。

「そうだ、明日私と勝負しようよ！私が勝ったら私もエルダの恋人として認めてくれる？」

「なんですって！？」

朔夜の言葉にリリイが真っ先に反応した。

「そんなこと私が認めないわよ！朔夜！私と勝負しなさい！私に勝たない限りエルダには指一本触れさせないわ！」

「あら、面白いじゃないの…後悔してもしらないわよ？」

「あなたこそ、あっさり負けないように精々気をつけることね！」

「ウフフフフ…」

私は睨み合いながら黒い笑顔をつくる二人を見ながら溜息をつくしかなかった。

2 - 8 “ 朔夜 ” （後書き）

ヤンデレが怖くなったので無理矢理起動修正しました。

おかげでちょっと設定がおかしいですが気にしないでください。
朔夜はいい子です。ヤンデレではありません！

2 - 9 対決前夜（前書き）

今回は短いです。

2 - 9 対決前夜

朔夜が帰った後、エルダ達はエルダの家に集まり会議を開いていた。

「それで？エルダは朔夜とどんな関係なの？」

一番最初に口を開いたのはシャーリーだった。

「彼女は…前世の私の幼なじみよ」

「…前世だと？」

前世という単語にルイスが反応した。

「ええ…私は一度死んで、前世の記憶を持ったままこの世界に来たの」

「それでは、あの方が言っていた“蒼真”とは…」

「ええ、フィアナの考えてる通り。私の前世の名前よ」

エルダの言葉に一人を除いて全員が納得したような顔をする。

「…リリイ？」

納得していない一人…リリイは拗ねたような顔をしながら机に突

っ伏していた。

「…朔夜が私の恋人だったのが嫌だった？」

リリイの肩がピクリと反応する。

「ねえ、リリイ…朔夜が恋人だったのは前世の話よ。今は関係ないわ」

リリイは少し顔を上げて上目遣いでエルダを見る。エルダはリリイの頭を撫でながら微笑む。

「今はリリイが私の恋人だから…取られないように頑張ってね」

リリイは暫く目を閉じると深呼吸して再び目を開く。そこには強い決意のあるのがわかる。

「うん…頑張るよ」

リリイの言葉にエルダは笑顔を返す。

「…だから」

「…？」

「エルダ、キスして」

リリイの言葉に一瞬ポカンとしたエルダだったがすぐに顔を真っ赤にした。

「な、ななな何で!？」

「私が頑張るために!エルダがキスしてくれたら私頑張る!」

エルダは他の皆を見てさらに顔を真っ赤にしたがリリイの眼差しから逃げられないことを悟り仕方なく諦めることにした。

「ち、ちよつとだけよ?」

「うん!」

エルダはリリイに唇を重ねる。そして離そうとした瞬間、リリイがエルダの後頭部を掴んだ。

「!?!?」

リリイはエルダを離さないようにしっかりと抱き着きそのまま舌を入れてきた。

「…ん…くちゅ…あ…ぴちゃ…」

しばらくそのままキスをし続けてやっと解放されたエルダは足に力が入らずにその場にへなへたと座りこんだ。

「はぁ…はぁ…リリイ、いきなり何を…」

「ふふ…ごちそうさま」

エルダは顔を真っ赤にしながら顔を背けた。

「…あ、あの」

エルダが声の方へ顔を向けると他の四人が顔を赤くしながら、しかし目を逸らさずにエルダとリリイを見ていた。

「……はう／＼／／」

皆に見られていたことがわかり、エルダは恥ずかしさのあまりそのまま意識を手放した。

真つ暗な空間で黒髪の女性は水晶を眺めていた。

「やはり私が直接出向かなければ始まりませんか…」

そう言つと彼女は立ち上がり何も無い空間に手をかざす。すると魔法陣が二つ現れるてそれぞれの中から一人ずつ人影が現れた。

「久しいな、主よ」

片方の影が彼女に話しかける。

「ええ、そうね。久しぶり、オーズ」

オーズと呼ばれた男は青いショートヘアーで同じく青い瞳をしていた。

「それで？何故我々を呼んだのだ？」

オーズの隣にいた緑の髪と瞳をした女性が不機嫌そうに話す。

「おい、フィーレ！主になんてことを言うのだ！」

オーズの言葉を黒髪の女性は手で制した。

「私はもうあなた達の主ではないわ。今日は一人の人間として頼みがあるの」

その言葉にオーズとフィーレは微かに眉をしかめる。

「主、まさか…」

オーズの言葉に彼女は頷く。

「ええ、あの子を…生き返らせる方法がわかったの」

そう言う彼女奥の部屋を見つめる。

「私は例の魔法のせいでここから直接は出られない。だから私のかわりにある人物を連れて来てほしいのよ」

彼女は水晶にその人物を映し出した。銀髪でスカイブルーの瞳の少女。

「名前はエルダ。現在の管理者よ」

「…あの子に似てますね」

オーズがぼつりと呟くとフィーレが俯く。拳を握りしめて何かに堪えるように震えていた。

「この子を使えばあの子は…シオリは蘇るかもしれない。だから…連れてきて。どんな手段を使ってもいいわ」

「了解」

「……」

そう言って二人は姿を消した。

その後、彼女は奥の部屋に入り部屋の中央を目を向ける。

そこには巨大な水晶の塊があった。鎖で何十にも縛られており、まるで誰も触らせないとでもいうように。

「シオリ…」

彼女は水晶に触れる。水晶の中には少女が横になっていた。目を閉じてまるで普通に眠っているかのように。14歳くらいで長い黒髪、黒いワンピース姿だった。

「あなたがいれば私は…」

目を細めながら彼女はしばらく水晶の中の少女を見つめていた。

2 - 9 対決前夜（後書き）

次回、ついに朔夜とリリィが激突します。そして…

番外編 少女のような少年（前書き）

夜「さあ、始めるわよ！」

白「ふっ…興味ないね」

天「絶望を…贈ろう」

夜「何してんのよ、あんた達（汗）」

七つ夜&a m p・夜つ七先輩、k e i先輩、この度はありがとうございます！

番外編 少女のような少年

「お兄ちゃん…ここ何処？」

不意に言葉をかけられたサイは振り返る。そこには黒髪をなびかせたとても可愛らしい少女がたっていた。一本だけはねるようなアホ毛がまた可愛い。

「ん？なんでここに小さい子が？……あれ？お前せつなじゃないか！」

そう、そこにいたのは少女のような少年、如月せつな君である。現在は水をかぶって5歳の姿をしている。

「ん？せつな、泣いてたのか？」

せつなの目は泣いていたのか少し赤かった。

「うう…いつの間にか…ぐすつ…ここにいて…」

サイは少し考えてから何かを思いついたような顔をした。

「エルダに聞いてみた方がはやいな」

サイはせつなの手を引いてエルダを探しに歩き出した。

その様子を校舎の屋上から眺める二つの人影があった。

「リリィ…さあ、これを使いなさい」

リリィは袋をもらって中身を確認するとニヤリと口元を歪める。

「ありがとうございます…ラストお姉様」

リリィはラストに感謝の言葉を告げると同時に走り出した。

「ふふふ」

ラストは楽しそうに笑うとその場から姿を消した。

エルダSide

私は現在フィアナと一緒にこの世界に迷いこんだせつなを探している。

「あの子っいたらいきなり走り出すんだから…」

（詳しくは感想を読んでみてください）

「とにかく…二手に別れましょう」

「了解ですわ！」

私とフィアナは学校の正面玄関で二手に別れて搜索することにした。

「せつなは可愛いから誘拐されないか心配だわ……………ん？」

私は妙な気配を感じて走るのを止めた。

「これは…空間が歪んでる？」

私は急いでその現場に走り出した。もしかしたら未知の魔物でも現れているかもしれない。

「こんな時に厄介な……………あれ？」

現場に到着するとそこには二人の人物がいた。

「…ん？何処だ？ここは？」

「あれ？私達買物してたはずなのに」

一人は銀髪に見える金髪。青目で綺麗な顔立ちをしていてもう一人は銀髪に茶色の瞳をしていた。

「…遙！？…それに、ミヤ！？」

そこにいたのはk e i - - k u m a . Tさんの書かれている『魔法少女リリカルなのは』純白の翼の軌跡』の主人公とその妹（

血は繋がってないけど」だった。

「久しぶりね〜二人とも！」

「おう、そうだな…っていうかなんで俺達はここにいるんだ？」

遙が首を傾げた時いきなり空から声が聞こえてきた。

「それは私達が説明しましょう！」

私達が空を見上げると、そこにいたのは真っ白な服、真っ白な髪の少年と真っ黒な服、真っ黒な髪の少女だった。

「白！それに夜！」

この二人は作者でありながら話の中に入ってくる変わり者である。

「…エルダ、今失礼なこと考えただろ」

「え？…そ、そんなことないわよ」

「まあいいか…まあ、早い話が今回は番外編だから仲のいい皆とワイワイしよう…という企画よ」

夜ちゃん…もうちょっと隠そうよ。何でもかんでも話しすぎじゃ…

「大丈夫よ、番外編だから何でもありよ！」

「そんなんでもいいんだ…（汗）」

その後、私は皆に事情を説明して一緒にせつな君を探してもらうことにした。

「友達の頼みなら断れないな」

「うん！早く探しましょ！」

遥とミヤも進んで参加してくれたので嬉しかった。持つべきものは友だね！

S i d e O u t

その頃、体育館ではせつなと手を繋いだサイがエルダを探している最中だった。

「むう…ここにもいないな」

「いないねえ」

二人は近くの椅子に座り休憩することにした。

「誰か手伝ってくれたら楽なんだが…」

そうサイが呟いた瞬間

「お困りのようですね…」

体育館に若い男の声が響いた。サイが慌てて見渡すが誰もいない。

「だ、誰だ！」

サイがそう叫ぶと突然目の前に緑色の土管が現れ、中から某配管工兄弟の弟…もとい『永遠の二番手』の格好をした少年が現れた。せつながビクツとしてサイの後に隠れる。

「お困りのようでしたら…この全知全能たるルイージに任せていた
だこう！」

…と何やら某無双シリーズの仙人のような台詞で少年は帽子を掴みニヤリと笑った。

「お、お前は…」

サイが少年に話しかけようとした瞬間…

「……って、何ですかこの格好は！！」

そう言っつて帽子を思いつ切り床に叩きつけた。咄嗟の出来事にサイは思わず呆然となる。

「はあ…まったく、白と夜も人をからかいすぎです…」

サイは少年が呟いた名前に反応すると少年に声をかけた。

「お前、あの二人（作者）をしってるのか？」

「……ええ、何せ彼等は私の友人ですから」

そう言つと少年は執事服に着替え始める。

「（何で執事服……）」

等とサイが思っている間にも少年は着替えを終えた。

「まずは自己紹介ですね。私は天^{そら}、最も命の……コホン、さつきも言いました。白と夜の友達です」

またもや危ない発言をしそうになった少年……天にサイは若干引き攣った笑顔を向ける。

「そ、そうか……俺はサイマス、サイと読んでくれ。それで、こっちがせつな……あれ？」

サイが振り替えるとさつきまでそこにいたせつながいなくなっていた。

「ま、まずいな……」

サイは真っ青になりながら呟いた。

校舎の裏をせつなは歩いていた。

「…ぐすつ…ふえええ…ここ…何処？」

なんと、せつなはまた一人で迷子になっていたのだった。すると、せつなの背後に人影が現れる。

「…ふえええん……………」

せつなが気配を感じて振り替えり、そしてその顔が笑顔になった。

「リイ姉え！」

そこにいたのはせつなに笑いかけるリリイ（黒）であった。

出会いは運命

しかし、その出会いが正しいとは限らない

今、混沌^{カオス}の扉が開かれる

）
続
く
）

番外編 少女のような少年（後書き）

白「次回予告！」

サイ「…リリイ、せつなに…あいつにいったい何をした！」

リリイ「ふふふ…言葉通りの意味よ…」

エルダ「リリイ…覚悟しなさい！」

天「我が呼び声にこたえ、此処にいでよ！美しき白き猫と黒き猫！」

白「天！何でこの二匹（？）がここにいるんだ！」

混沌^{カオス}はまだ始まったばかり…

番外編 ネコとリリイとせつなと…（前書き）

白「はい、内容グダグダです。すいません（汗）」

夜「実は次から始まる話がメインだったりするのよね…ごめんなさいね」

白「まあ…番外編はまだまだ続きますので最後まで見ていただけたら嬉しいです」

番外編 ネコとリリイとせつなと…

学園の体育館でサイと天が向かい合っていた。サイは落ち着かない様子で足踏みをしている。

「まずいぞ…もしもリリイなんかに見つかったら…せつなに何をするか…」

サイがぶつぶつと一人で呟くのを横目に天は床に魔法陣を書きはじめた。

「……ん？天、それはなんだ？」

そこでやっと気づいたサイが天に声をかけた。

「これは召喚魔法をするための魔法陣を書いているのですよ」

「召喚魔法だと？」

サイが疑問の声を口にする間に魔法陣を書き終えた天は目を閉じて集中する。

「味方は多い方がいいですからね…『我が呼び声にこたえ、此処にいでよ！美しき白き猫と黒き猫！』」

天の詠唱に反応するかのように魔法陣が光り出し、二つの影が光の中に現れる。

「よし、成功しました……た……ね？」

天が魔法陣の中心にいる二匹の猫（？）を見て首を傾げる。

「呼ばれて飛び出てにやにやにやにやにやん」

「呼ばれてないのににやにやにやにやにやん」

突然二匹の猫が喋りだした。いや、実際この二匹は猫と言っていないのかわからない。

天の膝よりも少し高いくらいの身長で、金髪で白い服に少し暗い赤のスカートをはいて猫耳と尻尾。

もう一匹は真っ白な肌で顔には小さなひび割れがある灰色の髪に黒服で猫耳と尻尾、くわえ煙草でどこか脱力を感じさせる雰囲気。

ネコアルクとネコアルクカオスがそこに立っていた。

「……」

沈黙するサイ。天は額に手を当ててやれやれといったかんじで溜息をはいた。

「……おかしいですね……確かレンと白レンを呼んだはずなのですが……」

目の前にいるのは間違いなくネコアルクとネコアルクカオスである。

「そ・れ・でえ〜？なあ〜んであたい達を呼んだの〜？」

ネコアルクがパツチリとした猫目で天を見る。何故か口元をニヤリとさせながら。

「まあ…呼び出してしまった以上、働いてもらいましょうか……報酬はキャットフードがいいですか？それとも賞味期限をぶつちした最高級ネコ缶がいいですか？」

「キャットフード！しかもウエルダンでお願いします！」

そんなわけでイレギュラーがまた増えたのだった。

エルダSide

「……ん？」

「……っ！」

突然白と夜が足を止めたので私は首を傾げる。白と夜はじっと目を閉じて集中しているようだ。

「…今、誰かが召喚魔法を使った」

私はそれを聞いて驚いた。学園内で召喚魔法を使える人などいな

いからだ。

「まさか、せつな君？」

私の言葉に白は首を横に振った。

「いや、おそらく天だな……」

天：白と夜の友達にして副作者、とても言っべき人物。

「……何を呼び出したのかしらね」

「……さあな」

その後、校舎の中を探していたフィアナと合流して私達は校舎裏へと足を運んだ。

S i d e O u t

エルダ達が校舎裏に着くと、リリィとせつなが立っていた。

「あ……リリィ！」

リリィがこちらに振り向くと、せつなが一目散にエルダに走ってきた。

「エル姉えゝ！」

「あ…せつな君…って、待った！せつな君ストップ！」

エルダが止めるが間に合わず、せつなはエルダに飛び掛かり、いきなりだったエルダはそのまま後に倒れ込む。

「あう…痛い」

「えへへゝ エル姉え」

リリイが倒れているせつなを抱き抱えると歩いて距離をとる。

「リリイ？どうしたの？」

エルダの言葉にリリイがゆっくり振り返る。その顔はとてものこやかだった。

「（これは何かあるわね…）」

すると今まで黙っていたミヤが前に出てきた。

「…なんだかせつなの気配がおかしいよ？何というか…女の子みた
い」

「…いや、せつなは元から女みたいだっただろ？……ん？まさか…」

遙の言葉にミヤは頷く。それを見て遙は額に青筋を浮かべている。

「マジかよ…」

「…遙？どういこと？」

「たぶん、せつなは性転換の薬を飲まされたみたいだな」

「なっ！？…リリイ、まさかあなた…」

エルダの質問に答えるようにリリイはニヤリと笑った。

「ふふふ こんな可愛い子、私がほっとくわけじゃないの」

「…他人まで巻き込んで…リリイ、覚悟しなさい！」

しかし、いつもはエルダが怒ると怖がるリリイが今回は今だに笑顔である。

「ふふふ…エルダ、このままだとせつなを巻き込むよ？」

「（今回はもはやリリイがもろ悪役じゃないの…）」

「どうする？せつながいるんじゃ手が出せないぞ？」

「ふふふ…お困りのようですね！」

「「「！！？」」「」」

突然聞こえた声に皆が一斉に振り返る。そこには執事服をきた天とサイがいた。

「天！それにサイも」

「私が何とかしてあげましょうか？」

その自信に満ちた発言にリリイが眉をひそめる。その時

「戦術神風！」

突然リリイの目の前にネコアルクカオスが現れた。

「…なっ!？」

突然の襲撃にリリイが隙を見せた瞬間。

「むむむ？このお嬢さんから金の匂いがする！」

せつなをリリイの腕から引きはがす。

「あ！しまった！」

「戦略的撤退！」

そして瞬時にエルダの所に戻った。リリイは頬を膨らませてむうと唸った。

「もう…せっかくせつなを女の子にしていちゃいちゃしたかったのに…」

リリイは溜息をはいて両手を上げた。

「まったく…あなたは万年欲求不満なのね…」

「あはは…しょうがないじゃん。それが私なんだから」

リリイがエルダに笑いかけるとエルダもやれやれといった表情をする。…しかし

「さて、リリイ？一息ついたし…O H A N A S H I、しまし
ようか？」

「…あ、あれ？この流れでそうくるの！？い、いやあああああ！
！」

「まったく…二人は相変わらず仲がいいな」

「そうですね」

離れた場所でエルダとリリイを見ている白と天はそう呟いた。

「うわぁ 可愛い〜！」

「にゃあ！？は、はなすにゃ〜！」

「ク〜」

せつなは現在ネコアルクとミヤと遊んでいる。ネコアルクカオスはヤニ臭いと言われたので遊びには参加していない。それを言われた瞬間、ぴしりと顔のひびが増えたが…

何はともあれ、一応事件は解決したが本当の戦いはこれからであった。

番外編 ネコとリリイとせつなと…（後書き）

白「次回予告！」

N「全力全開！！」 ！？

天「メゝニゝアゝルゝボンバー！！」

白「おいおいマジかよ！！」

リリイ「受けてみなさい！はああああああ！！」

遙「ま、待て！ぎゃああああああ！！」

カオス「いでよ！我が眷属！」

夜「いくわよ…闇魔刀」

エルダ「なゝゝにこれ（汗）」

番外編 大乱闘（前書き）

白「…む！？この気配は！…穏やかなる俺の日常はある少年と二匹のネコによつて一変した！」

夜「何やってるのよ…」

天「悪い事にはならな〜いでしょう〜」

番外編 大乱闘

白「えゝ、それでは一段落ついたところでそろそろ始めるか」

エルダ「始めるって何を？」

エルダの言葉に白はニヤリと笑ってみせた。

白「まあ、せつかくいろんな奴らがいるんだし…戦ってみようぜ！」

遥「それはそれで楽しそうだけどな…それで？誰と誰が最初だ？」

夜「今回はチートな力を持った人がおおいから2チームにわけろわ」

くじ引きの結果

Aチーム

白

天

ミヤ

エルダ

Bチーム

遥

リリィ

ネコアルク

ネコアルクカオス

となった。

白「まずはAチームで戦い残った二人とBチームで戦って残った二人で決勝戦だな。自分以外は敵、手を組んでもよし、戦法も自由だ」

夜「ただし、リングアウトは即失格だからね。戦闘に参加しない人は応援してもいいし外から邪魔してもいいわよ」

ファイアナ「私達は戦えませんか外から色々邪魔させていただきますわ！」

白「ちなみにアイテムもあるが…中身は見てのお楽しみだな」

白が指を鳴らすと空中にステージが現れた。見た目はまんまスマブラの『終点』BGMも『終点』である。

エルダSide

白「では一回戦開始だな」

白の合図で私はステージに登る。

夜「カウントするわよ」

5…

エルダ「悪いけど…勝たせてもらっわ」

私はシャルを構える。

4
…

白「全てを無へ…」

白は両手にダガーを持ち、逆手にして構える。

3
…

天「クスッ…楽しみですね」

天は鉄扇を広げる。珍しい武器ね…

2
…

ミヤ「遙く、私頑張るね」

1
…

GO!

合図と同時に私は天に向かって走った。

天「ふっ…」

天は天扇を広げると鎌鼬を私に放った。

エルダ「甘い！《エアブレイド》」

私は風の魔術エアブレイドを発動させて鎌鼬と相殺させた。

白「俺を忘れてないか！？」

エルダ「…っ！」

白「シフトブレイク！！」

白がダガーを構えると私の周りに落雷が落ち始める。

エルダ「落雷は囧…本命は……下！」

私が素早くその場から横に回避すると地面からいきよいく水の柱が噴き出した。

エルダ「幻影剣・朧月」

50本のシャルの分身を作ると白と天に向かって飛ばす。

白「甘い！」

天「はあっ！」

あっさりと弾かれた…でも！

エルダ「幻影剣・飛龍！」

弾かれた分身で二人を囲んだ。

白「…おいおいマジかよ!!」

天「…これは!」

エルダ「貫け!《プリズムバレット!》」

シャルの分身から光のレーザーを一齐に発射する。

白「ストラサークル5!」

天「セウシル!」

二人とも無傷……手強い。

フィアナ「エルダ! アイテムですわ!」

ステージの外からフィアナがアイテムを投げ入れてくれた。急いで受け取ると何かのカプセルだった。

エルダ「使ってみないとわからないわね」

白「次はこちらからいくぞ!」

エルダ「!!」

白「塵も残さん!」

両手のダガーに闇の炎が灯る。マズイ…!

白「浄破滅焼炎!!」

エルダ「きゃあ!」

何とかギリギリで回避したけど少しかすった…危ない。

天「二人とも…よそ見は危ないですよ?」

白「…む!?」

エルダ「…!!」

天の両手に魔力が集まる。

天「スヴィア・ブレイク!!」

ズガガガガガガ!!

エルダ「…くっ!」

白「熾天覆う七つの円環!」
ロー・アイアス

私は咄嗟に白の後に隠れて攻撃をやり過ごした。

白「あつ!エルダ!人を盾に使うな!」

エルダ「あら、ごめんなさいね」

私はそのまま白を蹴り飛ばした。

白「うわああああああ!!」

残念ながら場外にはなかったわね…まあいいわ。

天「天光満つる所に我は有り、黄泉の門開く所に汝あり、いでよ！
神の雷！」

エルダ「あの詠唱…まさか！」

天「これで終わりです！《インディグネイション!!》」

エルダ「シャル！形態変化！モデル『シールド！』雷耐性追加！」

シャル『了解！』

ズドオオオオオオン！

エルダ「はあ…何とか防いだわね」

天「また油断しましたね？」

エルダ「…っ!!」

突然目の前の空間が裂けて中から天が出てきた。

エルダ「…くっ！」

そのまま鉄扇を振り上げてきたのでシャルで受け止める。

白「目覚めぬ夢を…夢氷月天！」

白の攻撃で足元が凍りつく。そして私の足は氷で覆われた。

エルダ「あ、足が…！」

天「まずは厄介なエルダから片付けます…白もいいですね？」

白「仕方ないな…」

そして二人は私を挟むように立つ。

天「いきますよ！メーニールボンバー！！」

掛け声と同時に二人が同時に私に向かってくる。

エルダ「（…くっ、どうすれば…ん？）」

私はさっきフィアナからもらったカプセルのことを思い出した。

エルダ「一か八か…」

私はカプセルを地面に投げる。するともくもくと白い煙が視界を遮った。どうやら煙幕だったようだ。私は咄嗟にその場にふせた。そして次の瞬間。

ゴンッ！！

エルダ「……あ」

白と天の攻撃は私がふせたために空をきり、お互いの顔面を直撃した。そしてそのままの勢いで足が先に行こうとしていたので体が回転、後頭部を地面で強打した。

白「がふっ！？」

天「ぐぁ！？」

しかも地面が凍っていたこともあり二人の勢いは止まらず痛みにも悶えながら場外へと滑っていった。

エルダ「……………」

夜「えっと…………この勝負、エルダとミヤの勝ち…でいいのよね？」

遙「ミヤは何もしてないけどな…っていうか何でミヤがメンバーに入ってるんだ！？怪我したらどうすんだ！！」

リリイ「…今頃気づいたの？」

夜「でも無傷は凄いわね。かなり派手にやらかしたのに…どうやって避けたの？ミヤ？」

ミヤ「えっと…攻撃がくる場所を予知して離れてただけだよ？」

エルダ「そういえばミヤには予知能力があつたわね…」

S i d e O u t

夜 S i d e

夜「じゃあ次の試合を始めるわよ」

そう言っ て私はカウントの準備を始める。

5
…

遙「シャイニング、セットアップ」
『了解！スタンバイレディ！』

4
…

ネコ「ふふふ…ネコの血が騒ぐ」

3
…

カオス「ふん…我輩に勝てるとでも？」

2
…

リリイ「まとめてぶつとばすわよ」

1
…

GO！

リリイ「さて…いくわよー！！」

開始直後からリリイは空中に飛んだ。

リリイ「《フレイムランス》」

両手に炎の槍いくつも作ると一斉に発射する。

リリイ「受けてみなさい！はあああああー！！」

ズドドドドドー！！

カオス「おやおや、熱烈な歓迎だ」

遙「無駄に範囲が広いし…面倒だ」

リリイ「ほらほら！まだたくさんある……ん？」

ネコ「ドリドリドリ」

リリイ「きゃあ！？」

空中で再びフレイムランスを撃つ態勢だったリリイにネコアルクが突撃した。

遙「お！チャ～ンス。シャイニング、ダークネスバスターだー！！」
『了解です！ダークネスバスター！』

遙が空中の二人に黒い極太レーザーを発射した。

ネコ「にやにや!？」

リリイ「うわっ!！」

二人はギリギリで回避した。あと少し反応が遅れていたら危なかったわね…

S i d e O u t

白「なあ…天、暇だよな」

天「そうですね…」

二人はニヤリと顔を歪める。

白「邪魔するか!」

天「了解です…」

白「いくぞ、邪魔といえば…これだ。無数のぷよ達よかの地よりきたれ!」

夜「いやいや!それ違う詠唱じゃないの!」

天「では…宙に放浪せし無数のぷよ、驟雨となり大地を礼賛す！」

夜「結局一緒じゃないの！！」

白「レッツ！」

天「ぷよ勝負！」

二人の勝手な勝負が幕をあげた。

リリイ Side

私の相手はなかなか個性的な人達ばかりで中々苦戦するわね…

リリイ「《ファイアーボール》」

遥「効かねえな！」

私が撃ったファイアーボールは遥が鎌にしたシャイニングで全て打ち落とした。正直、彼には勝てる気がしない。

カオス「ふむ…こういう場面での一服もまたいいものだ」

遥「もらったぜ！」

あ…しゃがみ待機中のカオスに近づいたら…

ボツ！

遥「っ熱！？」

ああ、やっぱり。しゃがみ待機中のカオスのタバコって当たり判定があるんだよね…1ミリしかダメージ受けないけど…っていうか私は誰に喋ってるのかしら？

ネコ「ビーム！！」

リリイ「うわぁ！」

いきなりネコがビームを発射してきたので慌てて避けた後、ファイアーボールを発射した。

ネコ「にはははは！当たらないやい」

何だろ…段々腹が立ってきたわ。

遥「ん？あれ何だ？」

突然遥が指差した方を見ると、空中から何かが降ってきた。あれは…じゃまぶよ？

ひゅ…ドカアアアーン！！

一同「……」

遥「ば、爆発したぞ！？」

リリイ「ええ！？何で！？ぷよつて柔らかくて安全なんじゃないの
！？」

遥「…もしかしてあれが原因か？」

夜Side

これは一体何だろう…

白「えい！たあ！いくよー！ダイヤキュート！ダイヤキュート！ダイ
イヤキュート！…ヘヴンレイ！」

天「ほら、平気だよー怖くないよ！そばにおいで、メランジェ！
メランジェ！メランジェ！……ポレノワール！」

二人がハイレベルなぶよ勝負をやりだして、じゃまぶよがステ
ジに降っていつている。しかも爆発する。なんて迷惑な…（汗）

白「何かを感じる…きた…きたきたあ！きえー！インブレス！イン
ブレス！インブレス！……プリンシパルスター！！」

天「えーい、やあー、とー、いつくぞーアシッド！アシッド！アシ
ッド！……ハイドレンジアー！！」

白「やるな！天！」

天「白こそ、やりますね！」

夜「あんた達いい加減にしなさい！」

私はハリセンで二人を叩いた。

白「夜！何するんだ……あ！ミスった！……ばたんきゅ〜」

天「クスツ……運命ですから」

とにかくこれでぷよは止まるわね。

S i d e O u t

リリイ「あ……ぷよが止まった！」

遙「……まったく何やってるんだあの二人」

ネコ「にゃ！アイテムなのにな！」

リリイ「させるかあ！」

リリイはアイテムのカプセルを拾おうとしていたネコアルクを蹴り飛ばして急いで中身を確認すると…手の平大の黒くて丸い物体が入っていた。

リリイ「……………」

リリイはゆっくりそれを掲げる。

リリイ「約束の地へいこう…母さん」

遙「黒マテリアだと!?!」

リリイ「エルダ! 帰ったらリユニオン(×××)でしょ? / / / /」

エルダ「だが断る!?!」

リリイ「く、く、く、黒マテリア…」

エルダ「リリイ!?! 正気に戻って!?!」

遙「やらせるか!」

リリイ「嘆いても遅いわ…」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ

遙「…ちい!」

ネコ「によわ!?!」

カオス「にやあ!？」

ドガアアアアアアアン!!

遥「危ねえ!」

土煙の中からリリイ以外の三人が飛び出した。

リリイ「しぶといわね…」

遥「そう簡単にくたばるか!……ん?」

その時、遥の足元に一つのカプセルが転がっていた。

遥「アイテムか、何が入ってるんだ?…まあ、使って損はない!」

そして勢いよく地面に投げると、突然カプセルが光りだした。

遥「うお!?!なんだ!?!」

《Stand by Ready》

ふと、遥の耳に聞き覚えのある電子音が聞こえ、光が小さくなる。
目を開けるとそこには…

N「遥くん!助けにきたの!」

某管理局の白い悪魔がたっていた。

遥「な、なのは!?!何でここに!?!」

なのは「にゃあ！？遙君！せっかく名前を隠してたのにばらしたらダメなの！」

遙「…あ」

シャイニング『…もう手遅れですね』

なのは「それじゃあ、早速いくよ！」

なのはを中心に周りの魔力が収束する。

なのは「全力全開！！スターライト…」

遙「ダークネス…」

なのは「ブレイカー…！！！！」

遙「バスター…！！」

ドドドドドドドドドド！！

リリイ「うそ！？何よこれ！！」

ネコ「にゃにゃ！？」

カオス「にゃんだとう！？」

三人はそのまま桃色と黒の魔砲に飲み込まれた。

リリイ「きゃあああああああ！！！！」

カオス「ネコに…本気…出されても…にゃあ…」

ネコ「…甦りキャットリターン！！危なかったにゃ…」

リリイ、ネコアルクカオス…脱落。

なのは「にゃははは 遥君かったよ」

遥「お、おう…なんつうか…凄かった」

そして舞台は決勝戦へ…
クライマックス

番外編 大乱闘（後書き）

白「次回予告！」

????「余興だ……狩りをしてやるっ」

夜「退散！」

天「危険です！」

遥「参りましたあ！」

白「ぎゃああああああああああ！」

一つの混沌^{カオス}の終わりが今ここに…

番外編 決着とその後（前書き）

白「この番外編は、ご覧の作家さん達の協力により、お送りしました」

白夜（自分）

k e i - - - k u m a ・ T さん

七つ夜 & a m p ・ 夜つ七さん

夜「どこの番組よ……」

番外編 決着とその後

夜「それじゃあ決勝戦を始めるわよ」

一同「「「おーーー!!」「」」」

決勝戦メンバー

エルダ

ネコアルク

遙

ミヤ

夜「では、カウントいくわよ」

5…

エルダ「負けないからね!」

4…

ネコ「にやにやにゃん」

3…

遙「セットアップ!」

『セッティング!』

2
...

ミヤ「...ドキドキ」

1
...

せつな「みんな頑張れ」

四人「...うん!」「...」

GO!

ネコ「ゴッド・キャット!」

エルダ「いきなり!？」

ドドドドドド!...

遥「悪いが決めさせてもらっぜ!...変身!」

『KAMEN RIDE DECADE』

エルダ「あっ!しまった!」

遥「もらっただぜ!」

『ATTACK RIDE BLAST』

ドガアアア!

エルダ「威力高くない！？粉々にする気なの！？」

遥「これぐらいしないと倒せないだろ？」

エルダ「女の子には優しくしなさいよ！」

ミヤ「そうだよ」

遥「ぐっ！ミヤまで…（泣）」

エルダ「うりゃ！幻影剣・流星！」

エルダの作り出した50本のシャルの分身が雨のように降りそそぐ。

遥「当たるか！！」

『K A M E N R I D E K A B U T O ・ A T T A C K R I D E
C L O C K U P 』

エルダ「むっ…厄介ね」

遥「そろそろ終わりにしようか？」

エルダ「やってみなさいよ！」

ネコ「いくのにゃ！」

フィアナ「アイテムですわ！」

エルダ「ナイスタイミング！」

エルダがカプセルを投げると…

ボンッ

夜「私の出番ね？」

遥「何で夜が出てくるんだ！？」

夜「いくわよ…闇魔刀」

夜は闇魔刀を構える

夜「絶空！！」

夜が一瞬で闇魔刀を抜刀、空間が歪み、そして切り刻まれる。

遥「…ちっ！！」

ネコ「によわ！！」

エルダ「いくわよ！閃光一閃！光龍槍！！」

遥「くそっ！！」

『CLOCK UP』

ネコ「によわああ！！」

ドカアアアアアン！！

遙「危なかったな……」

ネコ「にゃ！アイテム発見！」

ネコアルクがカプセルを投げると虹色の玉が現れる。

白「あれは！」

ネコアルクがそれを叩き割る。

ネコ「最後の切り札発動！」

エルダ「させないわ！」

ネコ「オプバ！」

エルダ「……くっ！」

ネコアルクの目からレーザーが発射され、エルダは仕方なく下がった。

ネコ「発動！」

そして、ネコアルクの姿が消えた。

エルダ「消えた？………っ！！」

遙「何だ！？このプレッシャーは！？」

すると、空から金髪でドレスを纏った女性がゆっくり降りてきた。
その姿は正に『姫』。

白「姫アルク…だと！」

夜「やばっ！退散！」

天「危険です！」

姫「余興だ…狩りをしてやろう」

ゆっくりと右手をエルダに向ける。そして…

パンツ！

エルダ「……きゃっ!!」

エルダは場外の更に数百メートル吹き飛ばされた。

エルダ脱落

すると姫アルクは光に包まれネコアルクに戻った。

白「……一撃か」

夜「こ、怖かった」

ネコ「にやにやにや やったにや」

しかし笑うネコアルクの両手両足が突然光の輪で固定される。

ネコ「にゃあ!？」

白「バインド!？」

遥「ダークネスバスター!!」

ネコ「にゃあ!？油断したにゃ〜!！」

ドドドドドドドドドド!

ネコ「ネコでは…ダメだと…いうのかあ〜」

ネコアルク脱落

遥「さて、残るのは」

ミヤ「私だね」

遥「参りましたあ!」

ミヤ「ええ!？」

白「…さすがシスコン」

夜「シスコンね…」

天「シスコンですね…」

遥「そこ！うるさい！」

遥降参

白「えっと…優勝はミヤだな」

ミヤ「やった〜！」

夜「じゃあ負けた人達のなかから代表二人は罰ゲームね」

遥「はあ！？聞いてないぞ！」

夜「だって聞かれなかったもん」

遥「…ぐっ」

夜「はいはい、じゃあくじ引いてね」

白「お、俺かよ…」

遥「何でだ…」

代表

白と遥

せつな「わあゝ ミヤちゃんふわふわ」

ミヤ「クーン」

白「う、羨ましい」

遥「……………（泣）」

夜「じゃあ遥からね…はい、これ」

遥「…青汁？」

夜「うん、これ飲むだけ、簡単でしょ？」

遥「まあ、これくらいなら…」

ゴクツ「…ボンッ

はるか「…え？」

夜「わあゝ 本当に変わった！可愛い〜！」

はるか「いやだあああああああああ！〜！」

夜「次は白ね…はいこれ」

白は一枚の紙を受け取る。

夜「そこに書いてあることをしてね」

白「どれどれ？」

『ド○ルド・マクドナルドに「貴様にハンバーガーを語る資格はない！」と言っ』

白「……………できるかあああああ！！お前知らないのか！？ド○ルドは一部の人達からは教祖様と呼ばれていてかなり強いんだぞ！？Youtube見てないのか！？」

夜「罰ゲームだから…ね？」

白「…ぐすん」

夜「はい、電話」

『ぷるるる…ガチャ！…もしもし、ド○ルドです』

白「貴様にハンバーガーを語る資格はないっ！！」

ガチャ

白「……………」

夜「……………」

ぷるるる、ぷるるる

夜「かけ直してきた!？」

ガチャ

白「は、はい？」

『……………どうやら死にたいらしい』

ガチャ!

白「……………っ! (泣きそうな目)」

夜「ま、まあ…大丈夫じゃない？」

すると白の足元の空間が裂けて白が中に落ちた。

白「ぎゃあああああああああ!..」

一同「……………」

天「クスッ…」

夜「天、どこに送ったの？」

天「教祖様の所です」

はるか「鬼だな…」

ラスト「お楽しみのところすいません。…そろそろ時間ですので主を迎えにきました」

夜「あら、もうそんな時間なのね…じゃあ今回はこれで解散ね！楽しかったわ」

ラスト「では、私達はこれで失礼しますね。…さあ、行きましょう」

せつな「うん バイバイみんな」

せつなとラストは空間の裂け目に消えて行った……ネコアルクを連れて。

せつな「可愛い」

ネコ「にゃあ！？何でにゃ～！？あ～れ～……」

夜「あはは…」

カオス「ふむ、我輩は…」

「???」「ピピピ…ターゲット、補足。ドクターノ実験サンプルシテ、捕獲シマス」

ガシッ

カオス「によわあ！？だ、誰か助けて～！～！」

チュトゥトゥトゥ…

夜「今、メカメイドがいたわよね…（汗）」

天「そうですね…」

はるか「なあ、そろそろ元に戻してくれよ…」

ミヤ「はるか、可愛いよ？」

はるか「…うつ」

天「じゃあ、またお会いしましょう」

はるか「あっ！待て！元に戻して…」

夜「転送！」

はるか「oooooooooooooooooooo！！」

夜「はい、完了！」

天「じゃあ私達も帰りましょう」

リリィ「またね」

エルダ「はあ…疲れたわ…」

カオス
混沌はいつかまたやってくる

幻想が終わるまでそれは終わらない

またいつかきつと…

番外編 決着とその後（後書き）

白「一騒動終れば一万件処理斑　責任者俺なのか」

夜「ふう…終わったわね」

白「k e i先輩、夜つ七先輩ありがとうございました！」

夜「これからも『天使として…』をよろしくね」

次回も見てくださいね　ジャンケンポン！（チヨキ）…うふふふふ
）

2 - 1 0 戦いとその後…（前書き）

大学の夏休みも今日で最後、明日から講義が始まりますが頑張ります！

2 - 10 戦いとその後…

朔夜との対決の日になりエルダとリリイは町外れにある草原にいた。以前エルダが反政府軍と戦った場所である。

「もう、何も残ってないね…」

リリイの言葉にエルダは静かに頷いた。あの時、エルダはここでたくさんの命を奪っている。大切な人を守るためだと思っていても罪悪感は拭えない。

「エルダ、完璧な人なんていないよ…」

エルダはリリイへと顔を向ける。リリイは前を見たまま続ける。

「あの時、エルダが頑張ったから…私はこうして此処にいるし、エルダと一緒にいられるんだとおもふの…だから」

リリイはエルダに向き直るとクスリと笑った。

「今度は私がエルダの力になる。そう決めたんだよ」

リリイの言葉にエルダは笑うと

「ありがとう」

と言った。それと同時に前方に百人くらいの兵士が現れた。その中には朔夜もいる。

「二人とも…覚悟はいいわね？」

「勿論、どこからでもかかってきなさい！」

するとエルダが一步前に歩み出る。

「リリイは朔夜と戦いなさい。私は他の奴らを片付けるから…」

「エルダ…」

エルダはリリイへと向き直るとウインクしながら微笑んだ。

「負けたら許さないんだから」

「勿論勝つよ！エルダのためだもん！」

リリイはそう言つてエルダの隣に並ぶ。朔夜はそんな二人を微笑みながら見ていた。

「私達はパートナーなんだから！いつも一緒だよ、エルダ！」

「ふふ、そうね。じゃあ始めましょうか」

エルダの声を合図にするかのようにリリイと朔夜は空中に飛び上がり、エルダはシャルを片手に兵士達へと向かっていった。

エルダSide

私の目の前には百人の兵士たちがいる。以前草原でこの数の何十倍という数と戦った私としては何の問題もない。

「さて、きなさい…あなた達の目の前にいるのは世界そのものですよ！」

私の言葉と同時に十人ほどが突撃してくる。私は目の前の一人の攻撃を避けると剣を持っている右手を掴み投げ飛ばした。

さらに後ろから切り掛かる兵士に回し蹴りを叩き込むとシャルで地面に叩きつける。勿論峰打ちである。

「…次、きなさい！」

今度は二人が同時に飛び掛かってきた。シャルで相手の剣をいなす二人の背後からもう一人が飛び出してきた。

「…囧か」

私はその場に伏せると左手を軸にして一回転し、目の前の二人の足を払う。そしてバランスを崩した二人を回転する勢いのまま同時に蹴り飛ばした。そして飛び掛かってきていた兵士の振り下ろす剣を体を捻って避けるとその腕を蹴り上げる。

「…せい！」

そして無防備な兵士の腹に拳を叩きこむ。私にとって鎧は紙と同じだ。兵士は衝撃で吹き飛んだ。

「風よ、薙ぎ払え！《エアブレイド》」

さらに振り向きながら風の魔術を唱え、固まっている兵士達を吹き飛ばす。

「うーん、リリイ大丈夫かなあ」

そう言って私は少し離れた場所で戦うリリイの方に目を向けた。ちょうど50メートル離れた辺りで赤と紫がぶつかり合っていた。

リリイ Side

私は20個程のファイアーボールを朔夜に発射する。

「…甘いよ」

朔夜は手に持っているナイフでファイアーボールを次々と切り裂いていく。

「そのナイフ…ただのナイフじゃないわね」

私の全身があれば危ないと警報を鳴らしている。

「ええ、ただのナイフじゃないわ。これはちょっと特殊でね…どんなものでも切ることができるの。例えば…」

朔夜がナイフを振り上げる。私が咄嗟に横に飛びのくと今まで私がいた場所の“空間”が切れた。

「こうやって空間を切ることもできる。…まあ直接切った方が切りやすいんだけどね」

朔夜は腰を低くして構える。そして朔夜の周りに紫電が発生する。

「紫電・嵐雪」
しんぞう・らんせつ

朔夜が地面を蹴った瞬間姿が消えた。しかし私はものすごい殺気を感じて咄嗟に右に回避する。その瞬間、私がいた場所に朔夜が現れた。…何もしていない？違う。早過ぎて攻撃が見えていなかっただけだ。

「よく避けたわね。あのまま回避しなければあなた今頃穴だらけだったわよ？」

朔夜がそう言った瞬間空間に無数の穴があいた。おそらくあの瞬間にナイフで何度も突きを繰り返していたのだ。

「ちよつと今のままじゃ厳しいかな…」

私は立ち上がりながら朔夜の顔を真っ直ぐに見つめると静かに息を吐き出す。そして…

「封印一段階解除」

抑えていた力の一部を解放した。

朔夜Side

「封印一段階解除」

リリイがそう言った瞬間、今までとは比べものにならないほどの魔力を感じた。

「…なるほど、今までは全然本気じゃなかったんだね」

私はまたさつきと同じように姿勢を低くすると紫電を纏う。

「次は当てるわ…紫電・嵐雪！」

私は地面を蹴ってリリイへと突撃すると一瞬でいくつもの突きを繰り出す。今度はリリイは回避しようとしなかった。

「…無駄よ」

リリイが静かに呟いた瞬間。

彼女はナイフを右手の指で挟んで受け止めた

「……なっ!？」

私が驚いて一瞬止まった瞬間、リリイが空いている左手を上げる。
そして私を指差した瞬間…

「《…エクスプロージョン》」

次の瞬間、私は巨大な爆発によって吹き飛ばされた。

エルダSide

「あらら…派手にやってるわね」

私が最後の一人を倒すのと同時に巨大な爆発音が聞こえた。

朔夜が煙の中から飛び出す。その体は紫電に包まれていた。彼女の纏う紫電は身体能力強化と魔法防御をかねているらしい。

「いたた…今のは効いたわ」

朔夜が顔をしかめながら呟く。

「……………」

その後をリリイが追うように現れる。その目は真っ直ぐに朔夜を睨み、普段の彼女と同じとは思えないほど鋭かった。

「…《フレイムランス・バースト》」

リリイが手をかざし炎の槍を作る。そしてそれを躊躇なく朔夜に投げる。

朔夜はそれを体を捻って回避し、炎の槍はそのまま地面に刺さる。

「…弾ける」

そしてリリイが指をパチンと鳴らした瞬間、炎の槍が爆発した。

「…ちっ！」

朔夜は大きくジャンプして爆発から逃れる。しかしそれを狙っていたとばかりにリリイがファイアーボールを連発する。

「それは効かないわ！」

朔夜がナイフでファイアーボールを掻き消す。しかし、次の瞬間朔夜と私は驚愕する。リリイがファイアーボールの弾幕に隠れるようにして朔夜に接近していたのだ。

「くらいなさい！」

遠距離型のリリイがまさかの接近戦を挑んだことに驚く朔夜だが

さすがと言つべきかりリイの蹴りを素早く受け流す。

「はっ！」

朔夜がナイフを素早く振り、リリイはそれを避ける。しかし、リリイは避けることはしても距離をとろうとはしなかった。

「…もらった！」

足払いを受けて怯んだリリイを見て朔夜は腰を深く落とす。

「紫電・舞姫^{まいひめ}」

朔夜の目が鋭くなり流れるようにリリイとすれ違う。そして次の瞬間、リリイの全身から血が吹き出した。

「……っ！」

リリイがその場に倒れる。傷の回復はするが痛みは感じるのだ。リリイは歯を食いしばってヨロヨロと立ち上がる。

「やめておきなさい。センスはあるけどまだ戦いに慣れていないわ。よくやった方よ」

朔夜がリリイにナイフを向ける。しかし、リリイの目はまだ諦めていない。

「エルダ、この勝負私の勝ちでいいかしら？」

そう言う朔夜に私は首を横に振った。

「まだ終わらせるには早いわよ、朔夜」

私の言葉に朔夜は顔をしかめるとリリイを見る。リリイはゆっくりと口を開く。

「術式…発動」

「……！？」

朔夜の周りに赤い魔法陣がいくつも現れる。

「隔離！」

リリイの言葉と同時に朔夜は赤い結晶に閉じ込められる。

「これは…」

リリイが接近戦をしかけた理由、それはこの術式を組むため。リリイは朔夜が攻撃をしかける中反撃をせず、回避だけをしていた。その間ずっと魔法陣をしかけ続けていたのだ。

「燃やせ！《プリズンフレイム》」

朔夜の足元から突然炎が立ち上る。朔夜は火傷をしないように紫電を纏う。しかし、密閉された空間の中であるため酸素の低下と熱は防げない。

「……ぐっ！」

朔夜は額から汗を流しながら耐え続けた。すると炎の勢いが無くなってきた。おそらく酸素がなくなってきたのだ。

「惜しかったわね。耐えきったわよ…このナイフは…どんなものでも…切れる」

苦しそうにしながらも朔夜はニヤリと笑った。しかし、彼女は重大なミスをおかしていることに気がついていない。

「…はっ！」

朔夜はナイフを使い結晶の一部を切り裂き穴をあけた。そして…

「《フレイムリバーズ》」

リリイの言葉が響き、朔夜の入った結晶が大爆発した。

朔夜のミス…それは結晶に閉じ込められた時点でナイフを使い脱出しなかったこと、つまり防御にまわったことだ。この大爆発は酸素の低下で消えかかった火種に突然酸素を供給することによって一気に燃え上がる“バックドラフト”と呼ばれる現象を魔術で強化したものだ。

「……うつ」

炎が消えると紫電を纏いながらもふらふらと足元がおぼつかない朔夜が立っていた。紫電による防御でダメージは抑えているがそれでも相当な衝撃だったはずだ。

「はあ…はあ…もう、だめ」

朔夜は仰向けに倒れた。それを見てリリイもその場に座り込む。

「…引き分けだね」

私がそう言うと二人はお互いを見て苦笑いした。

「リリイって強いよね…あなたを倒すならこの眼帯をとらなきゃいけないわ」

朔夜はそう言って右目の眼帯に触れた。

「これ取ったらもうちょっと強くなれるのよ。ただししばらく動けなくなるけどね」

リリイはその言葉に苦笑いする。

「私だって封印を全部解いたらしばらく動けなくなると思うよ？…
…やったことないけどね」

私は二人のやり取りを見て思わず笑ってしまった。

「あ！ちよつと酷いよエルダ！人のこと笑って！」

「ごめんなさい…つい…ふふふ」

リリイは私から視線を外すと立ち上がり、朔夜に近づく。

「朔夜はこれからどうするの？」

朔夜は少し考えるように首を傾げると溜息をはいた。

「そうね…依頼は失敗しちゃったし、どうしようかしら」

「なら、私達と一緒に暮らさない？」

突然のリリイの言葉に朔夜は目を見開く。

「…な、何で？」

リリイは笑いながら手を差し出す。

「行く所がないんでしょう？それに…エルダを好きな者同士、仲良くしたいし」

リリイの言葉に唖然としていた朔夜は一度目を閉じると再び開く。
そしてリリイの手をしっかりと握り返した。

「じゃあ…これからよろしくね」

「うん！」

その様子を見ていた私も思わず笑顔になっていた。

なんとか立てるようになった朔夜にリリイが肩をかす形で私達は家へと帰る道を歩いていた。

「それにしても…二人とも凄い格好ね」

リリイの服は所々裂けて血がついているし、朔夜の服も破れたり焦げている部分がある。

「仕方ないじゃない…」

「そうよ…あれだけやればこれくらいなるわよ」

二人の言葉に私はやれやれといった表情を作った。

「まったく…あなた達は」

その時、突然巨大な魔力を背後から感じて咄嗟に振り返る。リリイも気配を感じてその場から回避する。しかし次の瞬間、リリイと反対側に避けようとした朔夜の足に木の枝が絡まり、そして

ドスッ

朔夜の胸を背後から一本の剣が貫いていた。

2 - 1 1 朔夜の正体（前書き）

講義が始まり、部活も始まり…疲れがたまります。

2 - 11 朔夜の正体

朔夜を貫く剣を見た瞬間、

「朔夜！！」

エルダは咄嗟にシャルを取り出して朔夜の背後の人影に切りかかった。リリイはまだ何が起きたのかわからないらしくて、呆然としている。

「……………」

朔夜を刺した青い髪の方は剣を引き抜くとすぐにバックステップで距離をとる。

「あなたは誰！？何で朔夜を！？」

青髪の男は目を細めてエルダを見ている。そしておもむろに口をひらいた。

「…我が名はオーズ。主の命によりお前を探していた」

エルダはさらにオーズを睨む。

「なら…なら何で朔夜を刺した！狙いは私なんですよ！？」

オーズは無表情のままエルダを見る。

「いくら俺でもお前相手ではやはり不利なのでな。人質をとろうとしたのだがその女からとてつもない気配がした。だから先に始末したのだ」

エルダはシャルを握る手に力を込める。

「やれやれ、お前とは戦わないと言っているだろう」

オーズはそう言うとしりりの方へと移動する。

「…しまった!!」

リリイはオーズを挟んで道の反対側にいる。しかも状況をのみこめずに呆然としているため構えてもいない。人質にされてしまえば間違いなく手が出せなくなる。

「（だめ！間に合わない!!）」

エルダがそう思った時にはすでにオーズの腕がリリイに向かって伸びていた。

しかし…

「《アイシクル》」

突然巨大な氷塊が飛んできてオーズを直撃した。

「…ぐあ!!」

そのままオーズは吹き飛ばされて地面で三回ほどバウンドした後

ようやく止まった。

「…まったく、帰りが遅いから様子を見に来たのですが…これは一体何事ですか？」

エルダが声がした方へ振り向くと、そこには

「…フィアナ？」

薄い水色の服に学園のローブを纏ったフィアナが立っていた。

「フィアナ！？あなたどうして…」

エルダの言葉にフィアナは小さく溜息をつく。エルダを指差し息を吸い込みそれを吐き出すかのように喋りだした。

「あなたが心配だからに決まっているでしょう！？私やシャーリ―がどれだけ心配したかわかりますか！？しかもなかなか帰ってこないから段々落ち着かなくなっ。てわざわざ様子を見に来たら…このような事になっていた、というわけですね」

エルダが呆気にとられている間にフィアナは荒くなった息を整えてオースの方へ視線を向ける。

「あの方が誰かは存じ上げませんが…敵であると判断してよろしかったですね？」

フィアナの言葉に我に返ったエルダは頷く。

「ふむ、なかなか効いたぞ」

そう言いながらオーズはゆっくりと立ち上がった。エルダとフィアナが構えるとオーズは目を閉じて溜息をはいた。

「…今回はこちらが不利のようだ。また会おう」

そう言ってオーズは林の中へと消えていった。

「…退いたようですわ」

エルダとフィアナは構えを解くと朔夜に駆け寄る。朔夜の周りには血の海が広がっていた。

「…心臓をやられてるわ」

エルダの呟きを聞いたフィアナは祈るように手を胸の前で組む。するとリリイが背後に立つ気配かしたので振り返ると、リリイは涙を流していた。

「また…新しい家族が増えると…思ったのに…」

俯くリリイをエルダは優しく抱きしめ、フィアナがそんな二人を静かに見守っていると

「…あゝもう、酷い目にあったわ」

三人が驚いて振り返ると、そこには口元の血を拭い、胸の傷を抑えながら立ち上がる朔夜の姿があった。

「…え？」

「……………」

「……嘘」

三人が信じられないという顔で立っていると朔夜は服に着いた土をはらう。

「あの青髪…今度あったら許さないんだから。まさか殺されるとは思わなかったなあ」

朔夜は何事もなかったかのように平然としていた。服にはまだ血の跡があるが胸の傷はもうなかった。

「さ、朔夜…あなたまさか…」

朔夜は気まずそうに苦笑いをする

「あはは…そう、私吸血鬼なんだ」

エルダは溜息をはき、リリイは朔夜が生きていたことに安心し、フィアナは啞然としていた。

「まあ、なんにせよこれからよろしくね」

朔夜の笑顔にもはやどうでもいいか。と、考えることを放棄したエルダであった。

「…あ」

すると朔夜が胸を抑えてうずくまった。それを見たリリイが慌て

て駆け寄る。

「朔夜！どうしたの？まさか、まだ完全に治ってないの！？」

「……………」

朔夜が顔をあげると瞳がとろんとしている。リリイが首を傾げると朔夜が突然リリイに抱き着いた。

「え？朔夜？どうし……………」

「いただきます」

カプツ

「…あ」

朔夜はそのままリリイの首筋に噛み付き血を飲み始めた。

「あれ？…こんな展開前にもなかったっけ？」

この時、エルダが気まずそうに視線を反らしていたのは言うまでもない。

「…ごちそうさま。リリイの血は美味しいね」

前回と同じことを言われて赤面するリリイ、エルダは確かに、と呟きながら何度も頷く。

ちなみに家に帰った後、エルダも朔夜から味見という理由で血を

吸われたのだが、これはまた別の話である。

こうして、朔夜を新たな仲間として新しい日常が始まるのだった。

2 - 1 1 朔夜の正体（後書き）

朔夜のモデルはメルブラのアルクエイドと両儀式だったりします。

キャラ設定（確認）（前書き）

キャラ設定の確認です。

一部追加しました。

キャラ設定（確認）

キャラの設定を確認するついでに新しいキャラの紹介をしたいと思います。

エルダ・シャルリン（蒼真）

年齢 19 歳

性別・女（元男）

使用武器・神剣シャルリン

身長 150 cm

種族・天使

腰まで届く銀髪にスカイブルーの瞳をもつ少女。元々は蒼真という名前の少年だったが事故に遭い死亡。たくさん人助けをしていたためそれを見ていた神により世界の管理者である天使として転生する。

性格は頼りになるしっかり者。最近は少女らしい反応が多くなってきた。困っている人はほっとけない性格。頭の回転が速く、分割思考もおてのもの。授業を聞きながらも色々こなせる。

ステータス

魔術属性

火・風・土・水・雷・氷・光

基本戦法

シャルを使った剣技

魔術による攻撃

魔力ランク・EX

特殊能力

- ・物質創造
- ・世界の能力（ワールドスキル。世界中の全ての能力が使える）
マイブルファンタズム
- ・空想具現化

・NANOHA流肉体言語一級

リリイ・クレセイン

年齢17歳

性別・女

使用武器・なし

身長155cm

種族・人間 天使（眷属）

セミロングの黒髪に緑の瞳の少女。性格は明るく活発である。家族を無くしており現在はエルダと朔夜の三人暮らし。エルダに一目惚れして恋人となる。エルダと契約して天使の眷属となる。可愛い子供と女の子が大好物。

ステータス

魔術属性

火・風・土・水・雷・氷・光

魔力ランク・EX

基本戦法

主に火属性の魔法ベースにした遠距離攻撃。

特殊能力

・天使の眷属（エルダと同じようなことができる）

サイマス・ハルバルト

年齢17歳

性別・男

使用武器・剣

身長170cm

種族・人間

茶髪で茶色っぽい赤の瞳をしている。リリイとは幼なじみであり、エルダが転生してはじめて出会った人間の一人。性格はのんびりとしているが真剣な話の時は別人みたいにきびきびとしている。
最近は何々と弄られ役の役割になることが多い。

ステータス

魔術属性

風のみ

魔力ランク・B

基本戦法

風の魔術による牽制からの接近戦。

ファイアナ・ルツ・フレイラル

年齢17歳

性別・女

使用武器・レイピア

身長165cm

種族・人間

金髪に茶色の瞳をした少女。とある貴族のお嬢様。自分の成績がエルダよりも低いことからライバル視していたがエルダに助けてもらってからはエルダを気にかけている。

性格はいわゆるツンデレだが本人は認めていない。

ステータス

魔術属性

氷・水

魔力ランク・A

基本戦法

魔術による遠距離攻撃を主体にして接近戦はあまりしない

特殊能力

・デストロイヤー

〈解説〉

料理や調査において謎の戦略兵器を作り出す。主に毒殺を目的に使用されるが本人に自覚はなく、よく周りの人を巻き込む。巻き込まれ常習犯はサイマス。

朔夜^{さくちや}

年齢19歳

性別・女

使用武器

- ・ナイフ（神器〈タツリアート・ア・ペッツエッティ〉）
- ・吸血鬼としての身体能力

身長165cm

種族・吸血鬼（真祖）

黒髪黒目の少女。エルダが転生する前の世界での幼なじみ。右目に眼帯をしている。性格は明るく無邪気だが、真剣な場面では鋭い殺気を放つほど冷たくなる。

吸血鬼ではあるが真祖であるために日光や吸血衝動は基本的には

平気だが、力を使う場合は血が必要になる。

エルダにあうまではなんでも屋を営みのんびり過ごしていた。極度のエルダ依存症。

ステータス

魔術属性

雷・闇

魔力ランク・S

基本戦法

吸血鬼の身体能力にナイフを用いた接近戦。

特殊能力

- ・真祖の力（主に傷の再生に使われる）

- ・吸血（強い者の血を飲むほど強くなる）

- ・魔眼（朔夜の右目。能力はまだ不明）

- ・神器の力

（解説）

朔夜の持つナイフ《タツリアーノ・ア・ペッツェティ（イタリア語でこま切れにする、という意味）》の力。どんなものでも切断できる。しかしシャルのような神器は切れない。

シャーリー・センネル

年齢 17 歳

性別・女

使用武器・杖

身長 155 cm

種族・人間

双子のセンネル姉弟の姉。肩までのばした茶髪に薄い緑（黄緑っぽい）の瞳をしている。

性格は初対面の人にはおとなしく、友達には明るい。結構しっかり者。

ステータス

魔術属性

水のみ

魔力ランク・A

基本戦法

魔術による後方支援と回復魔術による治療。

特殊能力

・双子の絆（ルイスと同時に魔術を発動させると威力が増す）

ルイス・センネル

年齢 17 歳

性別・男

使用武器・剣とダガーによる二刀流

身長 155 cm

種族・人間

双子のセンネル姉弟の弟。茶髪のショートヘアーに薄い緑（黄緑っぽい）の瞳をした少年。

性格はツンデレ。常に大人らしく振る舞おうとしているが時折少年らしさがかいま見える。

身長が低いことを気にしており、昔シャーリーと同じくらい髪が長かったころはまるで見分けがつかなかったらしい。その時女と間違われたのがショックだったようでその話になると不機嫌になる。

ステータス

魔術属性

土・水・火

魔力ランク・B

基本戦法

魔術も剣も使いこなせるオールラウンダー。状況に応じて戦法を変える。

特殊能力

・双子の絆（シャーリーと同時に魔術を発動させると威力が増す）

くおまけく

白はく

年齢 19 歳

性別・男

使用武器・なんでも

身長 168 cm

種族・人間

作者である白夜の片割れ。真っ白な服を着て白髪白眼。

性格は楽天的だが常識は守る。番外編や感想などに登場する。

ステータス

魔術属性・？

魔力ランク・？

基本戦法

その場に応じてスタイルを変える。

特殊能力

・作者権限（なんでもできます！）

夜^{よる}

年齢19歳

性別・女

使用武器・日本刀

身長165cm

種族・人間

作者である白夜の片割れ。漆黒の服を着て黒髪のロングヘアに黒目。

性格はツンデレ。常識は守る。可愛いもの大好き。

ステータス

魔術属性・？

魔力ランク・？

基本戦法

日本刀による接近戦。居合を得意とする。

特殊能力

・作者権限（なんでもできます！）

びゃくや
白夜

年齢 19 歳

性別・男

身長 167 cm

種族・人間

職業・大学生

作者。感想や番外編に登場する。小説の中では白と夜に別れている。リアルでは熊本県のとある大学に通っている大学生。部活は剣道、段位は二段。

性格は友人によると真面目でおとなしいらしい（本当なのだろうか？）

趣味は読書、絵を描くこと、カラオケに行くこと。ゲームをすること。

ステータス

魔術属性・？

魔力ランク・？

基本戦法

基本戦わない

特殊能力

・作者権限（なんでもできます！）

天そら

年齢19歳

性別・男

身長173cmくらい

使用武器・なんでも

種族・人間

職業・大学生

白夜と同じ大学、部活に通う親友。シグナスの生みの親。白夜に様々なアドバイスをくれる。

性格は普段は敬語を使う大人しい人。しかし時折とても黒い一面を見せる。

ステータス

魔術属性・？

魔力ランク・？

基本戦法

なんでもできるオールラウンダー！。

特殊能力

・裏の作者権限（なんでもできます！）

・NANOHA流肉体言語免許皆伝

キャラ設定（確認）（後書き）

天の『裏の作者権限』は影でこっそり発動しています。

3 - 1 指定依頼（前書き）

最近投稿が遅くなりがちですが頑張ります！

3 - 1 指定依頼

朔夜とリリーの戦いが終わり謎の襲撃者が来た日から三日がたっていた。そしてエルダは朝日の眩しさに目を覚ました。

「…ん、朝かぁ」

上半身を起こそうとして両腕が動かないことに気がついたエルダが目を向けると右腕にリリーが、左腕に朔夜がしがみついていた。

「…はぁ」

エルダは溜息をはいてどうやってこの二人を引き離そうか考えていると朔夜が突然エルダを引っ張ったので再びベッドに仰向けで寝る態勢になる。

「うゝん…エルダ」

何やら幸せそうに寝言を言う朔夜が可愛いくて思わず笑みをこぼすエルダだったが次の瞬間にはその感情は一変した。

「うゝん…エルダ…本当に…いいの？…じゃあ…いただきます」
カプッ

「……え？」

朔夜がエルダの首筋に噛み付いたのだ。そのままエルダの血を吸

始める。

「…さ、朔夜？…あ…ま、待って…」

以前友達から神経が集まる部分は噛まれると気持ちがいいらしいと聞いたことがある…と頭の中で思い出したが正直ここまでとは思ってなかったらしい。

「あ…ふ…ふあ…」

なんとか朔夜をどかさうとするが両腕を抑えられているので抵抗できない。結局、しばらくの間そのまま吸血され続けたままでいると朔夜が目を覚ました。

「ん…あれ？おはようエルダ」

まだ眠いのか目を擦っている朔夜はなかなか可愛い。だがその口元から真つ赤な血が滴り落ちている。なんともシュールな光景である。

「はあ…はあ…やっと起きたのね」

エルダからしてみれば朝っぱらから疲れてしまったので何とも言えない気持ちになっていた。

「あれ？何だか甘い血の味がする…それに何だか体が軽いし…なんでだろ？」

「……………」

甘いという単語を聞いたエルダは若干顔を赤くしたがすぐに朝食の準備を始める。ちなみに朔夜の体が軽いのは天使であるエルダの血を吸ったからだ。

「あ、私も手伝うよ」

朔夜もエルダの隣に立って料理の手伝いをする。

数分後には朝食を作り上げてリリイを起こす。

「あれ？…私エルダと幸せな家庭を築いたはずなんだけど…」

寝ぼけているリリイにデコピンをするエルダ。これは以前からなのでエルダも特に注意はしない。もはや諦めているのだ。

「そつえば、今日から朔夜も学校に通うのよね？」

朝食を食べながらエルダが朔夜に顔を向ける。

「ん？ああ、そつよ。今日から私もエルダ達と同じ学園の生徒だね」

嬉しそつに話す朔夜を見てエルダも微笑む。

「エルダと私のクラスに入れたらいいね」

リリイがパンにかぶりつきながら笑う。

「こらリリイ、喋るか食べるかどちらかにしなさいよ…」

エルダの注意を聞いて恥ずかしそうに顔を赤らめるリリイを見て朔夜は思わず笑ってしまった。

それから食器を洗い洗濯物を干すと三人は空を飛びながら学園を目指す。朔夜も蝙蝠のような羽を出して飛んでいる。

「へえ、朔夜は『真祖』の吸血鬼なんだ」

「うん、だから日光も平気だし血を吸わなくてもいいの」

「でもあなた今朝寝ぼけて私の首筋に噛み付いて血を吸ってたわよ？」

「ああ、だから体が軽いんだね。なんでかなって思ってたのよ」

三人で談笑しながら飛んでいると学園の建物が見えてきた。

「よし、じゃあ降りましょう？」

三人は地上に降りると校門をくぐり生徒昇降口から中に入る。ちなみにこの時三人はほぼ全ての生徒の注目をあびていた。

「さてと…」

エルダとリリイは職員室に行く朔夜と別れて自分達の教室に入っ

ていた。

「……………」

エルダが机の中に手を入れると中からは大量の封筒が出てきた。溜息をつきながら封筒を確認していくエルダ。封筒はシンプルなものから綺麗なもののまで様々だった。ここまで言えばわかるだろうがラブレターである。しかもエルダは男女両方から人気がある。

「あ、この人昨日も入れてたなあ。この人は初めてか…」

エルダはもらったラブレターを全てチェックしている。なぜかというとたまにラブレターに混ざってファンレターや連絡の手紙が混ざっているからだ。

「…『応援してます』かあ、なんだか照れるなあ…『結婚してください』？いきなり話が飛びすぎでしょ…」

こんな感じで最近は朝から忙しい日々が続いているが別に悪い気はしないエルダであった。

「おはよう、これはまた大量ね…」

エルダが手紙を読んでいるとシャーリーがやってきた。

「まあね、さすがに私も疲れてきたわ…シャーリー手伝ってよ…」

「頑張つてね…」

「酷い！せめて理由くらい言ってから離れてよー！」

しばらくして朝のHRが始まり担任がやってくる。

「今日は転校生が来ている。皆仲良くするんだぞ」

こうして朔夜がエルダ達のクラスにやってきた。しかし朔夜はもはや勉強などしなくても十分な知識は身につけている。それでも学校に通うのには理由が二つある。

一つは単純に楽しそうだから。もう一つはオーズの襲撃を警戒してなるべく離れないようにしているのだ。今のところはまだ何もしてきていないがいつ再び襲ってくるかわからないため警戒は崩さない。

そして放課後。エルダ達はギルドの前にいた。最近依頼をこなしていないため生活費を稼ごうという考えたのだ。

「さて、ちょうどいい依頼はないかなあ」

リリイがやる気に満ちた顔で中に入っていたのでエルダと朔夜も後に続く。

「こんにちは」

ギルドに入りカウンターの受付をしている女性に話し掛ける。

「あ、お久しぶりですね！」

受付の女性とは何度も依頼をこなすうちに仲良くなっていた。

「依頼を受けられますか？」

「うん、お願いします」

「それではしばらくお待ちください」

お互いに笑顔で話を進める。彼女が依頼の確認をしている間、朔夜はギルドの中を隅々まで眺めていた。

「朔夜、どうしたの？」

朔夜がずっとキョロキョロしているのでエルダが尋ねる。

「うん、ここのギルドはなかなかいい所だね。大体のギルドって結構喧嘩があつてたりするんだけどね」

「そうだね、この町のギルドで問題になるようなことは起こってないね」

そんなかんじでしばらく待っていると先程の女性が戻ってきた。

「お待たせしました。エルダ様に指定依頼がありますよ?」

「私に?」

指定依頼とは依頼を受ける人を依頼主が指名している場合のことをいう。

「依頼主はどんな人?」

「それが…10歳くらいの少女でした」

「少女?」

「はい、エルダ様のような長い銀髪の少女でした」

エルダは依頼用紙を覗きこむ

リンク

・A

依頼内容

・とある人物の行っている研究の阻止。

報酬

・50万G（Gはギルのこと、1G=1円と同じ）

場所

・産業都市ミラルトスの宿屋にて詳しく説明。

指定人数

・なし

任意指定

・エルダ・シャルリン

依頼の確認を終えたエルダは考えるように腕を組む。Aランクの依頼を10歳の少女が頼むのはおかしいと思ったからだ。

「産業都市ミラルトスかあ… たしかここから南にある周りを山に囲まれた街だったよね？」

「ええ、産業都市というだけあってとても大きな街よ」

後ろの二人の声を聞きながらエルダは何やら一騒動ありそうな予感を感じていた。

3 - 2 産業都市ミラルトス（前書き）

いよいよ面白くなってきました！

誤字訂正しました。

3 - 2 産業都市ミラルトス

エルダ達が依頼を受けてから二日後、エルダ、リリイ、朔夜は産業都市ミラルトスに来ていた。

「ここが…」

「産業都市ミラルトスかあ…」

エルダとリリイは街のあまりの大きさに驚いていた。

産業都市というだけあって機械技術が発達しており、多くの店がひしめきあっている。

「ここは産業都市だから人口も多いし必然的に大きくなるのよ」

朔夜が前を歩きエルダとリリイが後ろに続く。

「朔夜はこの街に来たことがあるの？」

「うん、少し前にね。このナイフを見つけたのもこの武器屋だよ」

そのまま私達は街の宿屋に向かった。

エルダSide

宿屋に入った私達は宿屋の主に話をして部屋の番号を聞いた。

「624号室：ここだね」

私が部屋の扉をノックすると中から『どうぞ』と聞こえた。

「失礼するわ」

私が部屋に入ると窓辺の椅子に座って外を眺めている少女がいた。ゆっくりとこちらを振り返る少女は一言で言うなら可愛らしかった。長い銀髪に金色の瞳。白いゴスロリ服、頭には白いカチューシャ。思わず私達は見とれてしまった。

「はじめまして、エルダさん、リリィさん、朔夜さん」

少女は椅子から立ち上がると私達に頭を下げる。

「あ、はじめまして」

私達も慌てて挨拶をする。

「どうぞ座ってください」

私達は少女の言う通り向かい合う形で椅子に座る。

不思議な少女だった。見た目は10歳ほどの少女だが纏っている雰囲気は妙に大人びていた。まるで私のように見た目と精神年齢が合わないかのように…

「わざわざこんな所に来てくださりありがとうございます」

少女はニッコリ微笑む。その笑顔があまりに綺麗なので私は再び見とれてしまった。

「それでは自己紹介しましょうか…」

少女は真っ直ぐ真剣な顔で私達を見つめると名前を口にした。

「私はシオリ、お願いします。イリナを、私の家族を…止めてください!」

少女…シオリはそう言って頭を下げた。

S i d e O u t

とある部屋に一人の女性がいた。

「シオリ…」

黒髪黒目の女性、イリナは水晶に入った少女を見つめる。黒髪の

ロングヘアーの十四歳ほどの少女は祈るように腕を組み、水晶の中で眠りに就いていた。

イリナは近くの机に乗っている丸い球体を見つめる。まるでパズルのようにいくつものかけらが組み合わさり、一つの球体をかたどっている。しかし中心のかけらだけはまだはまっていなかった。

「もう少し…もう少しよ。待っててね」

イリナはゆっくりと部屋を出て行った。

エルダSide

「家族…？」

私の言葉にシオリはゆっくりと頷いた。

「私の家族…血はつながってませんが私とイリナは姉妹のように毎日楽しく暮らしていました。しかし、ある事件が起こってから彼女は変わりました」

シオリは俯きながら肩を震わせる。

「イリナはあることをするために世界中の種族を狩り、その心臓を

集めたんです」

「…なっ!!」

私は思わず声を出すほど驚いた。つまりイリナという女性は全ての種族の生き物を一匹、または一人を殺して回ったことになる。

「…なぜ心臓を集めるの？」

私の隣に座っている朔夜が質問をすると、シオリは顔をあげた。

「…生物は生まれながらに魔力を持ちます。その魔力は体のどこに蓄えられるかわかりますか？」

私は答えがわかり、自分の胸の中心をおさえる。

「…心臓？」

シオリは頷く。

「正解です。イリナは全ての種族の心臓を集めてとあるものを作ろうとしています」

「…とあるもの？」

リリイの言葉にシオリはゆっくり息を吸うと

「生命の創造…彼女は死んでしまったある人物を生き返らせようとしているんです」

Side Out

宿を出た三人をシオリはまどから眺める。

「（彼女ならきつと…）」

シオリは祈るように両手を胸の前で組む。するとシオリの背中から一瞬だけ純白の翼が現れ、次の瞬間

そこに彼女の姿はなく、白い羽が一つ床に落ちているだけだった。

エルダ達は街の外れにある古い工場跡に来ていた。

「ここにイリナがいるはずなんだけど…」

しかし工場は使われなくなってからだいぶたっており、ぼろぼろになっていた。

「どこかに隠し通路でもあるのかしら？」

朔夜はロッカーや本棚をどかしてみる。エルダとリリイも同じように隅々まで探してまわる。

「仕方ないわね、敵に気づかれるかもしれないけど魔力で探すわ」

そう言つとエルダは工場跡全体に魔力を流す。

「見つけた！その壁、隠し通路があるわ！」

朔夜が壁を切り刻むと地下に行く階段が現れる。

「よし、行くわよ……」

「ほう、これはこれは…わざわざそこから出向いてもらえるとはな」

「…っ!？」

三人が振り返ると空間が歪み中からオースが現れた。

「しかし、些か邪魔な者が二人ほどいるな…悪いがこの先はエルダとやら一人で進んでもらいたいのだが？」

エルダが咄嗟に構えるが朔夜が片手が制した。

「エルダ、先に行つて。ここは私が何とかするから」

「朔夜、でも…」

「大丈夫よ、あの時の仕返しをしたいし」

それでも前に出ようとするエルダをリリイが止める。

「行こう、エルダ」

「リリイ……」

「朔夜は大丈夫。朔夜の強さは私がよく知ってる……今は先を急ぎましょ？」

リリイの言葉にエルダは頷き階段を降りていく。朔夜はそれを確認した後、オーズに向き直る。

「ほう、あの傷で生きていたとはな」

オーズは腕を組んで朔夜を見る。

「生憎、私は人間じゃないのよ」

朔夜はそう言うと言いつとナイフを逆手に構える。

「成る程、少々派手な戦いになりそうだな」

オーズの言葉と同時に急に周りの温度が下がり始める。そしてオーズの右手に氷の剣が現れる。

「我は主イリナを守る氷の守護者、オーズ。主のためにいざ参る！」

二人は同時に走り出し、真正直からぶつかりあった。

階段を降りるエルダとリリイは突然広い空間に出た。

「地下にこんな空間があつたなんて…」

そこは半径100mはある広場のような場所だった。

「エルダ、あれ！」

広場の隅に更に下に降りる階段があつた。

「行くわよ、リリイ」

「うん……っ！危ない！！」

リリイは咄嗟にエルダの手を掴み自分の後ろに引く張る。するとエルダがいた場所に突然地面から鋭い木の枝が現れた。

「ありがとう、リリイ」

「うん、もう少し遅かったら串刺しだったね」

すると、空間が歪み中から肩まである緑の髪を揺らしながら一人

の女性が現れた。

「…あたな達をこのまま行かせるのは危険」

その女性が無表情にそう言つと周りに木の枝や蔓が伸び始める。

「…だから、気絶させてから連れていく」

リリイがエルダを庇うように構えると炎が舞い上がる。

「エルダ、先に行つて。ここは私が抑える」

「だめよりリイ！」

エルダがリリイの肩を掴むがリリイは前を向いたまま動かない。

「大丈夫、エルダは私が守るよ。私だってやればできるんだから」

「でも…」

そこでリリイは振り返ると微笑んでエルダ手を握る。

「私を信じて、エルダ」

エルダはリリイの緑の瞳に強い決意の色が浮かんでいるのを感じて無言で頷いた。

そして階段へと走り出したエルダに大量の蔓が向かうがリリイが作り出す炎の壁に阻まれる。

「あなたの相手は私だよ！」

「……」

リリイは両手に炎を集めると、いつでも発射できる態勢にする。

「私には守りたい人がいる。彼女を傷つけるなら私は容赦しない！」

リリイの言葉に緑髪の女性の顔がわずかに微笑みに変わる。

「私は木の守護者、フィーレ。主を守るため、お前を倒す」

そして大量の蔓と炎の塊がぶつかり合った。

エルダはひたすら階段を下に降りていた。

「（ここ、境界がはってある…でもどんなものかわからない。オリジナルなのかな…？）」

そしてついに最下層につくと古いドアがあったのでゆっくりとそれを開く。

「…いらっしやい、エルダさん」

部屋の中はそこそ広い空間で、部屋の中央に黒髪黒目の20代

半ばの女性が立っていた。

「貴女がイリナさん？」

「…そうよ」

イリナはエルダを見ながら僅かに顔を曇らせる。

「私の名前を誰に聞いたの？…それに、何故この場所がわかったのかしら？」

「シオリに聞きました。貴女を止めてほしいと」

「…っ！？」

イリナが驚いた顔をするのでエルダは僅かに首をかしげる。

「…有り得ない」

「…え？」

イリナの呟きにエルダは思わず声を出してしまった。

「だって、シオリは……10年前に死んでいるもの」

「！？」

イリナの言葉にエルダは驚愕した。

高台から銀髪の少女が金色の瞳を細め、悲しそうに工場跡を見下ろしていた。

「…イリナ」

彼女はそう呟くと、まるで始めからそこにいなかったようにその姿を消した。

3 - 2 産業都市ミラルトス（後書き）

次回は回想になります。

3 - 3 心の傷（前書き）

ちょっと短いです

3 - 3 心の傷

少女が一人、地面に座りこんでいた。その少女の目の前で研究所のような建物が炎に包まれていた。

「君！危ないから離れるんだ！」

火を消すために走り回っていた大人が少女に駆け寄る。しかし少女は動かない。

「何でここに？親は何処だい？」

少女はゆっくりと燃えている建物を指差した。

「……っ！ー！そうか、でもここは危険だ！離れるよ？」

男性は少女の手をとって走り出した。

「あ……いや！離して！お父さんとお母さんが！」

少女の必死の叫びは森の中へと消えていった。

二日後、研究所があった場所はただ瓦礫が積もっているだけの廃墟になっていた。

「……………」

そこに黒髪の少女がやって来て瓦礫の一つに座る。

「…ただいま、お父さん、お母さん」

少女はそう言って空を見上げる。少女の目には生気が無く、虚なままずつと空を見上げていた。

それから毎日、少女はこの場所に通い続けた。

そして一年が過ぎた。

「ただいま…お父さん、お母さん」

いつものように瓦礫に座って周りを見渡す。一年間もそのままだった研究所跡は雑草で覆われ始めていた。

「ねえ…今日は私の誕生日だよ？…私、10歳になったんだよ？」

少女の呟きは誰にも聞かれることなく空へと消えていく。

ガサッ

「……………」

不意に近くの茂みから音が聞こえたのでゆっくりとそちらを向くと、大型の狼の姿をした魔物がいた。

「……」

少女は近づいてくる魔物に興味が無いという視線を向けていた。魔物は少女に近づくと口を開けた。

「（…死んだらお父さんとお母さんにあえるかなあ）」

少女がそんなことを思いながら迫る牙を見つめていると

「…貫け」

可愛らしい…しかし力強い声が響いた。

そして目の前にいた魔物の背中を光の槍が貫いた。

「……？」

少女が戸惑うような表情をしていると空からゆっくりと人が降りてきた。

「危ない危ない…怪我はない？」

長い銀髪に金色の瞳、そして背中から白い翼を生やした少女がそこにいた。

「…天使？」

少女が呟くと天使の少女は笑顔で頷いた。

「私、シオリっていうの！あなたは？」

少女は不思議と素直に口を動かしていた。

「私は…イリナ」

二人の少女、イリナとシオリはこうして出会った。

回想終了

イリナはシオリとの出会いを思い出しながらもエルダを見つめていた。

「シオリが…死んでるって本当なの！？」

エルダの言葉にイリナは頷く。

「じゃあ…私が話をしたあの子は誰だったの？」

「…シオリはここにいます！私とずっと一緒だった！あなたが会ったのは偽物よ！ありえない！」

イリナは肩を震わせてエルダを睨む。

「シオリが私を止めようとするはずがない！だって、私はシオリを生き返らせようとしているのよ！？シオリだって…もっと生きてい

たいと思ってるはずよ!」

イリナは右手を前に突き出すとそこから黒い矢がいくつも発射される。

「…っ!」

エルダは反射的に近くの柱に身を隠す。

「（あれは闇の魔術? そんな… 普通は使えないはず… まさか）」
エルダは柱に隠れたままイリナに向かって口を開いた。

「イリナ… シオリはひょっとして天使だったの?」

エルダの言葉にイリナの動きが止まる。そしてしばらくの沈黙の後、イリナは左手を前に掲げる。その中指には黒い指輪がはまっていた。

「…そう、シオリは天使だった。そして私は彼女の眷属」

イリナの背中から黒い翼が現れる。

「シオリを生き返らせるための最後のかけら… 貴女の心臓、貰うわよ!」

エルダは咄嗟にその場にしゃがむ。するとさっきまで自分の心臓があつた位置を黒い槍が柱ごと貫いていた。

「…私の心臓!」

柱から離れてイリナを正面から見つめる。

「そう、私が作ろうとしているのは心臓のかわりになる永久機関。その材料の最後の一つが天使である貴女よ！」

「…くっ！」

イリナの闇の槍とエルダの光の槍がぶつかり合う。

その頃、地上の工場入口で銀髪の少女が扉を開けようと手を伸ばすが見えない壁でもあるかのように弾かれてしまう。

「イリナ、もう止めて…このままじゃあなたは…」

金色の瞳を悲しそうに細めながら少女は再び中に入ろうと手を伸ばし続けた。

3 - 3 心の傷（後書き）

次回から本格的に戦闘を入れていきたいと思えます。

回想・絶望の始まり（前書き）

シオリとイリナの回想をやりたいと思います。

回想・絶望の始まり

回想

雑草の生えた瓦礫の山の前で15歳くらいの黒髪の少女が目を閉じて立っていた。

「イリナ、そろそろ行くよ？」

後ろから声をかけられ振り返ると10歳くらいの銀髪の少女がいた。

「うん…わかったわ、シオリ」

そして少女：イリナは瓦礫の山をもう一度みてから

「いってきます。お父さん、お母さん」

振り返り歩きだした。そして一度も振り返らなかった。

イリナSide

私がシオリと出会ってから五年が経った。私は今15歳だ。しかし、15歳になった日に私はシオリと契約して彼女の眷属となった。出会ったばかりの時は大変だった。私は泣いてばかりの毎日を送

つていたからシオリにはたくさん迷惑をかけた。

でもシオリはそんな私をいつも慰めてくれた。シオリは私にとって大切な存在になり、彼女からたくさんの事を教えてもらった。

知識、戦闘の仕方、魔術、武器について。私に召喚魔術の素質があると思われるお互いに協力して様々な召喚を試した。オーズとフイーレに出会ったのもこの時だ。

その後、私達はギルドで依頼を受けながら旅をして回った。今日はたまたま私の故郷の近くにきたから両親に挨拶にきたのだ。

私は荷物を背負い直してシオリと一緒に歩き始めた。

「ねえ、イリナ」

「ん？なあに？」

私は隣のシオリを見る。昔はシオリの方が背が高かったのだが12歳を過ぎたあたりからシオリが私を見上げる形になった。

私は思わずシオリの頭に手を乗せた。サラサラとした髪が気持ちいい。

「ふあ！？な、何するの！？やめなさい！！」

両手をぶんぶん振り回しながら顔を赤くしているシオリは凄く可愛い。しかもしばらく撫でていると

「はにゃ／＼／／／」

と、いつの間にか気持ちよさそうにしている。私は名残惜しいが手を離す。

「…あ」

この時いつも寂しそうな顔をするので微笑んでおく。

「うゝイリナの意地悪」

「はいはい、ごめんなさいね？…それで、話があるんじゃないかったの？」

シオリはハッとして顔を赤くした。

「もう、イリナのせいで忘れるところだったじゃないの！」

「あははは、ごめんなさい。それで？」

「えっと、これから新しい依頼を受けるんだけど、その内容がちょっと危ない内容だからイリナはどうするって聞こうとしたのよ」

私はシオリを見下ろしながら溜息を吐いた。

「シオリ、私がそんな事で行かないなんて言うと思う？」

「でも…今回は神器を扱う研究所に乗り込むのよ？」

「だったら尚更一人で行かせられないよ。私もシオリが心配なの！私も行くからね！」

シオリは溜息をはいた後、苦笑いしながら了承してくれた。

私は暗くなつた雰囲気を変えようと話を変えることにした。

「そういえばシオリって私より年上なのに私より小さいよね…」

「な、ななな何ですって！？私が気にしていることを！」

私はシオリの頭を撫でる

「はにゃ／＼／／／」

「（本当に私より年上か疑わしくなるわ）」

「はっ！？イリナ！また私をからかったわね？（怒）」

シオリが少し何かを呟くと、突然シオリの体が光り、身長が私と同じくらいになった。

「どう？変身魔術を使ってみたんだけど。これなら何も言えないでしょ？」

私は驚いたがそれよりも口が勝手に先に動いた。

「綺麗…」

「…へ？／／／／」

身長が伸びたシオリは可愛いというより綺麗だった。

「なんだかお姉ちゃんができたみたいだね…」

「お、お姉ちゃん…私が…お姉ちゃん」

さっきまでの怒りはどこへ行ったのか、今のシオリは顔を赤くしながらにやけていた。…別の意味で怖いかも（汗）

シオリはしばらくはこのままでいたいと言って元に戻らなかった。

そして、私達は依頼を受けにギルドへと足を運んだ。

「すみません、先日依頼を受けると連絡していたのですが…」

シオリが依頼を確認している間に私はギルドの裏で召喚魔術の術式を組んでいた。

「えっと…ここにこれを書いてつと…よし、完成！」

地面に書いた魔法陣を見下ろしてから私は頷いた。

『私の呼び声に応えよ、凍てつく氷の守護者と大自然の守護者よ』

魔法陣が輝き、もうすっかり見慣れた顔がそこにいた。

「お呼びでしょうか？主よ」

「……………」

二人の守護者、オーズとフィーレがこちらを見ていたい。

「ちょっと危険な依頼を受けるから手伝ってくれないかしら？」

「わかりました」

「…了解」

二人が返事をするところちょうどシオリが帰ってきた。

「お待たせ…あら、オーズ、フィーレ、久しぶりね」

「はい…シオリ様、その姿は変身魔術ですか？」

「ええ、イリナが私のことを小さいなんて言うから…」

私とフィーレはそんなシオリを見て笑っていた。

思えば私が笑ったのはこの時が最後だった。私達は全ての始まりである研究所へと向かって歩きだした。

回想・絶望の果てに（前書き）

更新遅れてすいませんでした！

回想・絶望の果てに

イリナSide

神器：それは神、または天使のみが作ることのできる強い力を持った武器、または道具の事だ。

私達が今回受けた依頼は神器を不法に持ち、研究材料としているとある研究所の制圧、そして研究員の逮捕である。

「うーん…見張りは二人か…」

私達は現在研究所の近くの丘の上から様子を伺っている。

「特別な武器を持っているわけでもなさそうですし…あっさり入れそうですね」

私の隣に屈んでいるオーズの言葉に私は頷く。私達にかかればただの一般人は敵ではない。

「じゃあ早速「まちなさい」…シオリ？」

立ち上がるうとしていた私をシオリが止めた。

「見張りは二人じゃない…五人いる」

「五人？」

私の目には確かに二人しか姿が見えない。残りの三人は隠れているのだろうか？

「私がかたずけるから待つてて…」

シオリはそう言うとき大きく跳躍、二人の見張りの目の前に着地すると光の魔術を使い見張りの目を眩ませた。

それと同時にシオリは刀を抜くと峰打ちで二人を気絶させる。そして振り向きながらさらに三回刀を振った。

刀を鞘に戻し、私達に手招きするのが見えたので私達はシオリの所に駆け寄った。

「…ほら、そこ…少し歪んで見えない？」

シオリの指差した場所は陽炎のように地面が少し歪んで見えた。

「何これ？」

「たぶん神器を使って姿を隠してるのよ。その二人と違ってちゃんとした武装もしてるし…油断してるところを狙うつもりだったみたいね」

「つまり姿を隠してたってこと？」

「そういうこと。私には効かないから大丈夫だけどね」

天使であるシオリには幻術等が効かない、そのおかげで研究所へ

の潜入は楽だった。

しかし、研究員達が私達に気づくと神器を使って抵抗してきたので研究所の制圧には時間がかかった。

「はぁ… やつと終わった」

研究員全てを気絶させたのを確認すると私はため息をついた。

「お疲れ様… 大丈夫？」

シオリが心配そうに話し掛けてきたので私は笑顔を作って頷いておいた。

「じゃあ… 神器を回収して帰るわよ？」

「了解……… つ！」

歩きだそうとした私は右足に痛みを感じて思わず屈み込んだ。

「イリナ、その足……」

シオリが見る右足の足首あたりは血で赤く染まっていた。

研究員達の攻撃を避けている時にかすったのだ。普通ならすぐ治るのだが神器であっただけになかなか傷が塞がらない。

「大丈夫、そのうち治るよ」

「…そう」

シオリは心配そうにここで待つように言ったが私は平気だと言って先に進んだ……しかし、私はこのことを後で後悔する事になる。」

「後はこの中に保管されている神器を回収すれば任務達成だね」

私とシオリはオーズとフィーレに研究員の見張りを任せて神器の保管されている部屋の前に来ていた。

「さあ、さつさと回収して帰りましょう！」

そして私達は扉を開けて中に入った。そこには30個ほどの神器が保管されていた。指輪の形をしているもの、剣の形をしているものの、様々である。

「よくこんなに集めたよね。神器自体珍しいのに……」

「そうね……さあ、早く運びましょ」

シオリが近くにある神器を回収している横で私も指輪の形をした神器を袋に詰める。

「……………ん？」

ふと、私の視界に不思議な神器があった。腕輪の形をした神器なのだが色が黒い。

神器の色は決まっていなかった。黄色や白、銀といった明るい色をしている。しかし、そこにあった神器は黒一色だった。

…ゾクリ

「……っ!？」

突然寒気を感じて私は思わず後退りをした。

黒い神器からまるで呪いのように気持ち悪い気配が漂っている。私の本能が危険だと警報を鳴らしている。

「（逃げなきゃ! “あれ”は危険だ!）」

私がシオリを呼ぼうとした瞬間

腕輪が空中に浮かび上がった。

「…なっ!？」

そう、ひとりで浮かび上がったのだ。

「イリナ!？」

腕輪の異常な気配に気づきシオリが駆け寄ってきた。

「シオリ…あ、あれ何？」

「……………」

隣にいるシオリに聞いてみるがシオリは顔をしかめると首を横に振った。シオリにもわからないらしい。

すると、腕輪から黒い炎が噴き出して空中に集まると黒い塊になる。腕輪は炎を吐き出し終わると床に落ちた。

「（何？あの黒い炎の塊…怖い）」

空中にある黒い炎を見ていると体が震えるほどの恐怖を感じる。

「イリナ、逃げるよ？」

「う、うん」

私達が距離をとろうと後ろに下がろうとした時、黒い炎が突然こちらに向かって弾丸のように飛んできた。

私が回避しようとした時、怪我をした足が痛み動きが止まってしまった。

「危ない！」

シオリが私を突き飛ばし、黒い炎が彼女の胸を貫いた。

「うあああああ…！」

シオリは口から血を吐きながらその場に倒れた。

「シオリ!!」

黒い炎の玉はゆらゆらと揺れると私に再び向かってきた。

「…っ!この!」

私は詠唱破棄で水の魔術を放つ。しかし黒い炎に当たるとすぐに蒸発して消えてしまった。

「…くっ!」

私はある程度の魔力を込めた結界を張る。“ドガッ”という音と同時に黒炎が結界にぶつかる。

「えっ!?!」

しかし、私は驚愕した。黒炎が結界に込めた魔力を吸収しはじめたのだ。同時に私自信からも魔力がなくなっていく。

「(…回復する量より吸われる量の方が多い!)」

天使の回復量を上回る速度で魔力が吸われていく。このままではまずいと思った瞬間、

「後は任せて!」

私の後ろからシオリが飛び出した。両手に膨大な魔力が集まっている。

「やあああああああああ！！！」

シオリは両手の魔力を全て黒炎にぶつける。するとその魔力も吸い取りはじめる。

「シオリ！ダメ！魔力が減るだけだよ！」

「大丈夫、見てなさい！」

シオリは更に魔力を重ねる。すると黒炎が急に苦しむかのように暴れたした。

「やっぱり！」

「シオリ、何をしたの？」

「普通は魔力吸い取られるから魔術は使わない方がいいと思うけど…もしかしたら逆に与え続けたらどうなるかと思って…」

そこで私は気づいた。いくら魔力を吸い取るといっても限界というものがある。もし限界を越える量を吸い取ったらどうなるか…答えは

「弾けなさい！」

シオリの声と同時に黒炎は爆発するように吹き飛んだ。

しばらく爆発した辺りを見つめ、安全だとわかると私はその場に座り込んだ。

「はあ…よかった」

私が安心して思わず声を出すとシオリが肩に手を置いて顔を覗き込んだ。

「…大丈夫？」

こうやって私の心配をしてくれるシオリの気遣いが私はとても嬉しかった。

「うん、私は大丈夫。シオリは？」

「私もだいじょ……………うあつ！？」

急にシオリが苦しそうに胸を押さえて倒れた。私は突然の出来事に一瞬思考が停止したがすぐ我に帰った。

「シオリ！？どうしたの！？」

「う…あ…………っ！」

シオリは苦しそうに顔を上げると私を見た。

「イリナ…」

私はシオリの体に触れて直ぐに原因を探った。すると何故かシオリの魔力がみるみる減っていくのがわかった。

「なんで！？あの黒いのは倒したのに！！」

私が混乱しているとシオリが私の手を握った。

「イリナ…たぶん私は…もうだめかもしれない」

私は言われた言葉の意味がわからなかった。

「な、何言ってるの…冗談はやめてよシオリ！」

しかしシオリの目は真剣そのものであり私は思わず俯いた。そして気がついた。シオリの髪が先の方から黒く染まりだしていた。

「…シオリ？」

「たぶん最初に攻撃された時…心臓をやられたんだと思う」

そう言ってシオリは私の手を自分の胸に移動させた。

そこから彼女の鼓動は感じなかった

「…さつきから心臓だけ治らないの。魔力は生命活動にも使われる…私は不死だから死にはしないけど、魔力が切れたら…たぶん意識を保てない。魔力が戻るまでずっと…」

意識を保てない…つまりずっと彼女は眠ったままになることになる。

「やだ…嫌だよシオリ！一人にしないで！」

「…大丈夫、イリナは一人じゃないでしょ？オーズもフィーレもいる…」

「でも…でも私は……………っ！」

私の言葉をシオリは唇に指を当てて止めた。

「大丈夫…私は……………て…る……………から……………」

その言葉を言い終わると同時に私の唇から彼女の手が離れ…それ以来、シオリは目を覚まさなかった。

どのくらいたったのか…私が気がついた時、そこは近くの街の宿屋のベッドの上だった。

「（全部…夢だったの？）」

しかし、その考えは打ち碎かれる。ふと隣のベッドを見るとそこにいたのはいつもの銀髪ではなく黒髪でただ眠り続ける最愛の人だった。

頭の中が真っ白になる。認めない…認めたくない…もうシオリが起きないなんて…

今名前を呼べばいつものように起きるのではないかと思えるほど自然な寝顔…

私はその日、ずっと彼女のそばから離れなかった。私達を運んだのはオーズとフィーレだった。二人が帰り、静かになった部屋で私

はひたすらシオリを起こす方法を探して本を読み漁った。

そして本ばかりを読んで三年がたった頃、ふと違和感に気がついた。身長が伸びていたのだ。

まさか、と思いナイフで指の先を少し切ってみた。その傷は治らず、私は魔力と翼以外の天使としての力を失っていたことに気がついた。

つまり老いもあれば死ぬことだってある。

…時間がない

それから更に三年、私はついに永久機関について書かれていた本を見つけた。そこには様々な種族の魔力の“結晶”を集め、それを永久機関として魔力を供給する技術が書かれていた。

それから私は毎日世界中を飛び回った。全ての種族の魔力の結晶を集めるために…魔力が集まる量は心臓が一番多い。だから私は毎日集め続けた。

時には油断して返り討ちにあい大怪我をしたこともあったが諦めなかった。時には禁忌である闇の魔術を使っても集めた。

そして更に四年。私は25歳になりシオリが眠りについてから十年がたっていた。

丸いパズルのような形をした永久機関に空いているピースはあと一つ。

もうすぐだから待っていて…シオリ

最後の一つは天使の魔力、それは世界に戦いを挑むようなものだ。

それでもいい…彼女のためなら、私は世界だって相手にしよう

回想・絶望の果てに（後書き）

次回から戦闘に入ります。

3 - 4 オーズVS朔夜（前書き）

両儀式ネタがたくさんあります。彼女のファンの方々、ごめんなさい！（汗）

3 - 4 オーズVS朔夜

工場跡に響く刃物がぶつかり合う音。その中心にいるのは黒髪で眼帯をした女性：朔夜。

そして青い髪をした鋭い目つきの男：オーズ。

朔夜はナイフを、オーズは氷の剣を振り、お互いに切り結んでは離れるというヒットアンドアウェー戦法を続けていた。

「…さて、私としても早々と決着をつけたいし…そろそろお互いに真剣になりましょう？」

朔夜が様子見は終わりだと言わんばかりに左手をひらひらとさせる。

「ふん…いいだろう。我としても早々と主の加勢に行きたい。貴様と遊んでいる暇はない」

オーズの言葉に少しばかり笑みを浮かべ、朔夜はナイフを構え直す。持ち方を逆手持ちに変えて腰を落として姿勢を低くする。

「なめてるなら痛い目を見るわよ？」

「ふん、安心しろ。すぐに終わる」

「そう…じゃあ」

朔夜の体を紫電が包み込む。そして一気にオーズへと走り込む。

「はっ！」

オーズは気合いの入った突きを放つが朔夜は体を捻りながら跳躍。

「がら空きよ？」

空中で一回転しながらオーズの首筋に一閃。

オーズは横に転がり回避すると着地した瞬間を狙い剣を振り下ろす。朔夜は振り向きながらナイフでそれを弾くとスルリとオーズの真横をすり抜けて後ろに回り込む。

「そらっ！」

「チッ！」

流れるような斬撃を放つ朔夜の攻撃をオーズは全て防ぐ。

朔夜は一旦離れるとナイフを構え直す。

「なかなかやるわね…流石は守護者かしら？」

オーズも剣を構え直しながら朔夜を睨む。

「ふむ、認識を改めよう…貴様は強い。故に全力で相手をしよう！」

それを聞いた朔夜はクスクスと笑いながらも鋭い視線をオーズへ

と向ける。

「嬉しいわね。貴方、負けた経験は？」

「無いな…我は主のためにも負けられぬからな」

「そう…」

昨夜はナイフをしまつと別のナイフを取り出した。柄は青く鍔はない。片刃のナイフ…というよりは短刀に近い。

「じゃあ私が最初に貴方に勝つことになるのね？」

朔夜の言葉をオーズは鼻で笑った。

「ふん、貴様何様のつもりだ？神にでもなったつもりか？」

「神？…ふふ、ふふふ…あはははは！」

突然笑いだした朔夜をみてオーズは顔をしかめる。

「…何がおかしい？」

「いえ、私が神ねえ…考えたら可笑しくて。……だつて」

朔夜は先程と変わって真剣な顔をしてオーズを見る。

「私は神を殺したいほど憎んでいるもの」

その言葉と同時に朔夜から魔力が放たれる。巨大で強く、しかしどこか悲しい紫色のオーラ。

「神が憎い…か。神殺しでもしたいのか？」

神は存在する…しかし誰も倒せない絶対の存在。それを殺したいと言つ女性を見ながらオーズは自然と口を開いていた。

「…ええ。ちよつと昔いろいろあつたのよ。…あの時、私は自分の意思で生きていくと決めた…邪魔するなら」

あまりにも自然に、そしてあまりにも自信満々に、彼女は呟いた。

「…神様だつて殺してみせる！」

その彼女の顔を見たオーズは無意識に自分が震えているのに気がついた。恐怖からではなく、強い者と戦えるという歡喜の震えだった。

（おもしろい）

オーズは心の中でそう呟いていた。過去に何があつたかは知らないが、神を殺してみせると平然と言いきつた彼女の实力を見てみたい。純粹にそう思った。

「そうか、だがそんな言葉は我に勝つてから言つことだな！」

オーズは地面に拳を打ち付ける。すると巨大な氷柱が地面から突き出し朔夜に向かう。

朔夜は迷わずその沢山の氷柱の攻撃へと走り込む。体を捻り、時には氷柱を蹴りで碎きながらオーズへと接近すると右から左へ低い

姿勢から横薙ぎに一閃。

「――！」

オーズがそれを剣で受け流すと更に刃を返して右下へ一閃。

「二の…」

キンツと音がしてまたも受け止められるが構わず今度は右下から左上へとナイフを振り上げる。

「三―！」

オーズは迫る刃を再び剣で受け止めようとした。しかし、それはできなかった。

「なに！？」

先程から朔夜の斬撃を受けても刃毀れしなかったオーズの剣があっさり切断されたのだ。慌ててバックステップで離れると朔夜はナイフをオーズに向けて笑う。

「さあ、いつまで避けられるかしら？」

オーズは再び氷で剣を作り出すと朔夜に切り掛かる。朔夜はまるで剣など始めからないかのようにナイフを振る。

「…くっ！」

再び距離をとったオーズが剣に目を向けると先程と同じように切断されている。

「…神器か？」

「正解よ」

朔夜はナイフ型の神器『タツリアーノ・ア・ツエツペッティー』を握り直す。

「成る程『切断』の効果を持っているのか…」

オーズは切断された剣を捨てると両手に魔力を集める。

「…では遠距離から攻撃させてもらおう」

オーズが両手を真上に向けると空中からいくつもの氷柱がふりそそいだ。

「…くっ！」

朔夜は体を捻ったりナイフで弾いたりするが氷柱は小さくダメージが少ないものだが予想以上に数が多かった。

「（数で押し切るつもりなの？）」

次々迫る氷柱を弾きながら朔夜はゆっくりと後退する。

しかし氷柱のせいで視界が悪く下手に動くのは危険だと朔夜は判断した。

「まずは…この攻撃を止める！」

朔夜は全身にかけている紫電による身体強化の魔術を周りにむけて解放する。

その衝撃で氷柱は全て吹き飛び視界も良好になる。しかし、そこで朔夜が見たのは巨大な氷の弓を構えてこちらを狙うオーズの姿だった。

「しまっ…！」

慌てて回避しようとしたが間に合わず、朔夜の胸の中心をオーズの腕ほどの大きさの氷の矢が貫く。

「がつ…！」

そのまま衝撃で背後の壁まで吹き飛ばされた朔夜に追い撃ちとばかりに大量の氷柱が撃ち込まれる。

舞い上がった埃が風で流され朔夜の様子が見えるようになるとオーズは感嘆の声を上げた。

「ほう、まだ生きているか…」

「生憎、体が丈夫なのが取り柄なのよ」

朔夜は体中に氷柱が突き刺さった状態にもかかわらず平然としていた。

「まあ…痛いものは痛いけどね」

体中の氷柱を抜く度に血が吹き出るがすぐに傷は塞がった。

「さて、お返しをしなきゃね」

朔夜は紫電を纏うと地面に片手をつく形で姿勢を低くするとオーズとの距離を一瞬で詰める。

「紫電〜乱れ桜〜」

すり抜けざまに20回程の斬撃を繰り出す。しかし、朔夜は顔をしかめて距離をとった。

「なかなか速いが全て見切った」

「……………」

朔夜は今度は突きの構えをとると再びオーズへと走り込む。

「紫電〜嵐雪〜」

今度は無数の突きを放つがオーズは目の前に氷の壁を作り出し朔夜の視界を遮るとその隙にバックステップで離れる。

「…面倒だわ」

思わず朔夜が呟く。オーズは朔夜の動きを少しずつだが見切り始めていた。

「（早目に決着をつけなきゃ…）」

朔夜はオーズの周りを回るように走りだすとフェイントを混ぜながら斬撃を繰り出す。しかしオーズはその一つ一つにしっかり対応してくる。

「どうした？お前の力はその程度か？」

朔夜は攻撃を一旦中断すると両手に紫電を集めてナイフを何本も作ると一斉にオーズに投げつける。

「ふん、こんなもの……」

オーズがそれを素手で弾く。

「かかったわね」

「なに？……っ！？」

オーズが弾いた紫電のナイフから電撃が放たれオーズが動きを止める。その隙を朔夜は逃さなかった。

「紫電〱乱れ鐘楼〱」

オーズの懐に入り込んでの連撃。手応えを感じた朔夜が一旦距離をとろうとした瞬間

「結界〱悠久凍土〱」

「……！？」

辺り一面が氷に覆われ氷柱が無数に突き出てきた。

「結界！？…まさか」

朔夜が先程攻撃したオーズを見るとまるでガラスのように輝がはいりそのまま崩れ落ちた。

「かかったのは貴様の方だ」

朔夜は舌打ちをするという攻撃がきてもいいように身構える。

「いくぞ、いつまで立っていられるかな？」

突然目の前にオーズが五人現れて一斉に攻撃をしてきた。

朔夜は一番近いオーズの攻撃を受け止めようとするがまるで実体がないかのようにすり抜け、かわりに左側から蹴り飛ばされた。

「…くっ！！」

慌てて態勢を立て直すが更に三体増えたオーズが襲い掛かる。

「（たぶん本物は一人、他は光の屈折を利用した幻…）」

朔夜は攻撃を避けつつ周りの氷柱を切ると四方に蹴り飛ばした。氷柱がぶつかることで周りの氷に輝が入り、若干幻の姿が歪んだので目を凝らしてオーズ達を見る。

すると一人だけ姿が歪んでいないオーズを見つけたのでそこに魔力弾を放った。

「ほう、考えたな」

魔力弾を弾きながらオーズ達が再び襲ってきた。

「（このままじゃじり貧になる…この結界を破壊しなきゃ）」

朔夜が結界の壁に向かってナイフを振る。

「さっせんぞ！」

「！？」

顔を狙って右からきた氷柱を顔を逸らすことで回避しようとするが掠ってしまい眼帯が外れた。

「……………」

右目を押さえながら朔夜は距離をとった。

「さて、いい加減諦めろ。貴様は俺には勝てない」

「……………」

朔夜は右目からゆっくりと手を離す。そこから見える右目は血のように真っ赤な色をしていた。

「…いいわ、私もそろそろ終わらせたかったし」

朔夜がナイフを構える。戦い始めてから何度も見た構えだがオーズは何故か“違和感”を感じていた。

「なんだ…何かが違う？」

オーズがそう思った瞬間

目の前から朔夜の姿が消えていた

「…なっ！？」

慌てて辺りを見渡すが朔夜の姿はない。

そして、突然オーズは体中を切り刻まれた。

「がっ…！？」

同時に結界も消えて目の前にはいつの間にか再び朔夜が立っていた。

「き、貴様…何をした！」

朔夜は静かに笑っている。それが屈辱だったのかオーズは魔力を一気に解放させる。

「がああああああ！！！」

オーズは巨大な氷の爪で朔夜に切り掛かる。朔夜はナイフをオーズの目の前にほうり投げた。オーズがそれに気をとられた瞬間、腰にさしてあった普通のナイフを手にとる。

「戦いの途中で冷静さを失うなんて…平和ボケしすぎじゃないの？」

朔夜は片手を地面につけると右目を一度閉じて再び開く。

その瞳は先程の血のような“紅”ではなく、空のように“蒼”だった。

「……見えた」

二人がすれ違う瞬間、朔夜の眩きだけが妙に響いた。

そして、オーズの左腕が宙を舞い、彼はその場に崩れ落ちた。

「安心なさい…腕一本だけにしてあげる」

朔夜はそう言うのと投げたナイフを回収し、一瞬でその場から消えた。

「…我は負けたのか」

朔夜がいなくなった後、オーズはぼつりと呟いた。ただのナイフでは切れないはずの腕を切られたこと、そしてあの紅と蒼の目…

「…そうか、彼女が“魔眼”の使い手…“時”と“直死”の魔眼を使ったのか…無謀な…勝負だったな」

誰もいなくなった工場跡でオーズは一人笑った。彼の顔はどこか清々しいものだった。

3 - 4 オーズVS朔夜（後書き）

朔夜は複数の魔眼を使えます。今回使ったのは“時”の魔眼と“直死”の魔眼です。他にもありますので楽しみに。

3・5リイVSフイーレ(前書き)

だいぶ遅くなりました！すいません！

3・5 リリVSフィーレ

リリ Side

「はあ！やあ！」

私が放った炎弾を相手は次々と回避していく。戦いが始まってからずっとこの繰り返しだ。

相手はイリナの守護者フィーレ。無表情で戦闘が始まってから一言も喋っていない。

どうも私からすれば相手ににくいタイプであるために若干だがイライラがたまっている。

私は戦闘の経験が一度しかない。おそらくエルダと契約して天使の力が使えていなかったら勝負にすらならないだろう。

私はどうするか考えながらも炎弾を休みなく放ち続ける。フィーレは回避に専念しているので今のうちに何かしらの作戦を考えなければならぬ。

そんなことを考えているとフィーレが大きく跳躍した。ふわりとした動きの10メートル程のジャンプ、私は着地地点に狙いを定める。

「フレイムランス！」

私が放った炎の槍はフィーレが着地した場所に命中し爆発した。

「これでちょっとはダメージを受けて……くれないかぁ」

爆発によって舞い上がった土煙が晴れると、そこには無傷のフィーレが立っていた。

「うわぁ、何となくわかってはいたけどちょっとショックだよ……」

私がため息をつくときフィーレの口が僅かに動いた。

「……お前は私には勝てない。諦めろ」

やっと喋ったと思ったならそんなことを言ってくるなんて…

「絶対に嫌だね。私はエルダを守るって決めたんだから諦めるなんて選択肢は最初からないよ」

私にだって意地というものがある。一度言ったことは守るのが私の性分だ。

それに、エルダのためにも強くないとね。

「そうか、では私も少々本気を出そう」

フィーレの周りに魔力が集まるのがわかる。何かでかい魔術を使うつもりなのだろう。

私は詠唱の妨害が間に合わない判断して距離をとりつつ攻撃に備える。

「…惑え、結界魔法『迷いの森』」

次の瞬間、私の見ていた景色に突然木が現れ次々と増えていく。あつというまに私の周りは辺り一面鬱蒼としげる森となっていた。

「…結界魔法か、厄介な魔法ね」

結界魔法は周りの環境や状態を変化させる魔法であり、ほとんどが使用者に適した環境になる場合が多い。

「森の木が邪魔で敵の位置がわからない。探知魔法も……駄目ね」

探知魔法を使えば何とかなると考えたが結界全体から魔力を感じるのでわからない。

私がどうしようか考えようとした瞬間、突然大量の魔力弾が降り注いできた。

「うわっ!？」

私は咄嗟に近くの木の後ろに回り込む。魔力弾の威力はそれほど強くないようで木はえぐれてはいるが倒れはしなかった。

といっても生身の状態で当たれば怪我では済まないかもしれない。私は死なないがしばらく動けなくなる可能性もある。

そうなればエルダの手助けができない。まったく…厄介な相手と戦うことになったわ…

「いつそのことこの森焼き払おうかしら…」

いやいや、そんなことしても無駄だろう。結界魔法で作られた森なら結界ごと破壊しなければいくらでも修復できる。

逆に燃やして脆くなった木を盾にしようものなら一緒に撃ち抜かれる。

「うわあ…面倒だなあ…」

考えるのも鬱になりそうなので私は飛んできた魔力弾からフィーレの位置を予想して炎弾を放つ。

すると今度は別の位置から魔力弾が飛んできた。慌てて場所を移動して炎弾を放つ。

こちらから敵の位置がわからない間は何をしても無駄になりそうなので少々考えを変えてみよう。

まずは敵の位置を確認することが必要な？私は全力で森を走り出した。

場所を変えていくつも魔力弾は飛んてくる。場所を移動しているのか、それとも別の方法を使っているのか…

「うーん、やっぱりいい方法が思い浮かばないなあ…仕方ない」

私はちよつと大きめの木の後ろに隠れると詠唱を開始する。

「集まれ、焰の力。我に従い、敵を撃ち抜け…」

私は魔力弾が飛んでくる場所に両手を向ける。

「バーニング…バスター…!!」

私が唱えた魔法は広範囲攻撃型の魔法、「バーニングバスター」
簡単にいえば巨大な炎の塊を一直線に発射する魔法だ。

私の打ち出した炎の塊は木々を薙ぎ倒しながら魔力弾が飛んでくる方向へと進んで行く。しばらく進むと魔力弾が飛んでこなくなり、今度は左の方から飛んでくるようになった。おそらく場所を移動したのだ。なら…アタリか！

私は右手を前に突き出すと、左へと流すように動かす。

「……曲がれ」

炎塊は私の腕の動きに合わせる様に左へと向きを変えた。この魔法は使用者の意思により自由に進行方向を変えることができるのだ。

私は魔力弾を飛ばしているであろうフィーレがいる場所を予測してそこへ炎塊を飛ばす。魔力弾は私から炎塊へと標的を変えた。おそらく打ち落とすつもりなのだろう。

「残念…もう、遅いわ!」

広げていた右手にぐっと握りしめる。

「弾ける!!」

次の瞬間、炎塊は一瞬膨らんだかと思うと辺り一帯を巻き込みながら爆発した。赤い炎が周りの木々を焼き尽くし、一人の人影を浮かび上がらせる。

「見つけた！」

私は今ある魔力の半分を込めたフレイムランスをその影へと投げつけた。

「いつけええええ！！」

私の渾身の力を込めた炎の槍は吸い込まれるようにフィーレへと迫り、彼女の胸を貫いた。

「はあ…はあ…やったの？」

私は魔力の急激な消費による疲れで少しクラクラする頭を抑えながら倒れた彼女へと近づいた。

間違いなく倒れているのはフィーレだった。目を閉じて俯せに倒れている。背中には私の攻撃による穴が空いている。胸から背中に貫通した穴から地面が見えていて本当に攻撃が当たったんだと実感する。

「勝った…」

私は安堵のため息をつくとき深呼吸をして乱れた息を整えた。これでエルダを助けに行ける。そう思うと嬉しさが込み上げてくる。

私は早速エルダの所へ行こうとして　そこで小さな違和感を覚

えた。

「…………あれ？」

何かが…おかしい？

何故か安心した心が再び不安に染まっていく。何かが足りない…足りない？

フィーレは今私が倒した。実際、彼女の死体はここにある。それなのに何故？

周りを見渡すが木々が茂っているだけで何もなし…ん？木々が…ある？

そして、私は気がついた。結界が今だに破られていないことに…

彼女の背中から胸にかけての穴から地面が見えているのに“血”が流れていないことに…

そして、初めて人を殺したという実感がない…というより感じられない。まるでこれが“生物”ではないかのように

私はその事に気がついた瞬間

ドスッ

「あっ……」

胸に何かが入り込む感覚がして、ゆっくりと視線を下げる。

そこで私が見たのは私の胸から突き出ている血まみれの腕だった。

「え？……あぐっ！！」

突然の痛みと口の中いっぱいに広がる生暖かい液体を意識してから私はようやく誰かに背後から貫かれているんだと理解した。

「そ……んな、誰……？」

私が力を振り絞って振り返って見たのは、たった今倒したはずの敵。無表情で私を見ているフィーレだった。

「な、なん……で……」

「まだわからないのか？それは私が作り出した幻だ」

「ま……ぼろ……し？」

私が顔を前に向けると、目の前に倒れているはずのフィーレはまるで陽炎のように薄くなり消えてしまった。

「ここは私の結界、『迷いの森』の中だ。この結界は名前の通り相手を迷わせる。お前は最初から私の幻と戦っていたんだ」

「そ…んな」

「実際、私は結界を発動してから一步も動いていなかった。お前が攻撃している間ずっとな」

私が戦っていたのが幻？…まったく気がつかなかった。私は最初から彼女の手の平の上で踊らされていたのだ。

「残念だったな。最初にも言ったが、お前では私には勝てない」

「は…はは、なん…だ…結構…喋るん…だね…あんだ…」

私の言葉にフィーレは顔をしかめると勢いよく腕を引き抜いた。ビチャツと、大量の血が地面に落ちる音が聞こえるのと同時に私は地面に倒れていた。

「…ふん」

フィーレは私の血で染まった右腕を自分の服で適当にふくと私にはもう興味が無いとばかりに背中を向けて歩き出した。

視界がぼやけていく。血を流しすぎたからだろう。私は死なないが…厄介なことに心臓を潰された。心臓は魔力を貯める役割があるから、ここを潰されたら魔力が行き渡らなくなり再生に時間がかかる。

フィーレは下へと降りる階段へと歩いて行く。あの先にいるのはエルダとイリナ。このままフィーレを行かせたらエルダが危ない。

「（う…この、動いてよ！私の体！）」

私は体を動かそうと必死に力を入れようとするが、体は言うことをきかない。視界ももう半分しか見えていない。

「（動けええええ！！）」

必死に力を入れて立ち上がろうとする。しかし、いくらやっても体は動かなかった。

「（ごめん…エルダ）」

心の中でエルダに謝る。悔しくて悔しくて仕方ない。せめてフィーレに一撃だけでも…

いい？リリイ、なるべく封印は解かないでね？貴女はまだその力に慣れてないんだから

「あ…」

ふと、依頼を受ける前にエルダと交わした会話を思い出した。

私の中に眠る天使の力。まだ契約したばかりで慣れていないから、という理由で殆ど封印されている。現在使えているのはほんの一部。傷の再生と魔力の限界量を増やす程度だ。

「（もし、封印を解いたら…）」

まだ力に慣れていない私がどうなるかわからない…でも、エルダを守るためなら…私は……

Side Out

フイーレSide

私は標的の天使の眷属である少女と戦った。黒髪にエメラルドグリーン瞳が印象的な少女で、よく喋る私の苦手なタイプだった。

魔力量は私と同じ…いや、それ以上だった。魔力のぶつけ合いなら私が負けていただろう。ただ、彼女は戦闘の経験が少ないようで、私の幻術にあっさりと翻弄されていた。

はつきり言って、私と戦うには経験不足だ。あっさりと背後に回り込むことも許していたし、私の攻撃に最後まで気がつかなかった。私と互角に戦うにはあと10年程足りない。

私は彼女に背を向けて歩き出した。主の手伝いに行かなければならないからだ。流石に一人で天使を相手にするのは無理がある。

私が階段を降りようとしたその時、背後から強力な殺気が私に向かって放たれた。

「！！」

私はその殺氣に一瞬だが気圧されてしまい、慌てて振り返る。

「…なっ!？」

そこには胸から血を流しながらも俯いて立ち上がっている少女がいた。

「馬鹿な…」

私は思わず呟いていた。彼女が先程までとはまるで別人のような魔力をまとうていたからだ。

「いったい何をした…?」

私の問い掛けに彼女は答えない。そのかわりに右手をゆっくりと持ち上げていく。

「第一の封印…解除」

彼女の言葉から私は彼女が自分に何らかの封印をしていたのだとわかった。今感じている巨大な魔力も封印を解放して抑えていた魔力を解放したため…

「我は願う」

彼女が詠唱を始めたのを感じて、私は咄嗟に魔力弾と植物の蔓を鋭く伸ばして彼女に放つ。しかし…

「紅蓮に輝く焰よ、我が意志に従い此処に集まりたまえ」

彼女の周りに現れた紅蓮の炎が私の攻撃を掻き消した。私が驚愕する間にも彼女の詠唱は続く。

「その力を一振りの剣（しるぎ）に変え…今、此処に顕現せよ！」

俯いていた彼女が顔を上げる。その瞳はこれまで見たどの戦士よりも力強く、輝いて見えた。

S i d e O u t

リリイ S i d e

全身に力が溢れる。魔力が無限に湧いてくるみたいな不思議な感覚。しかし、同時にちよつとでも気を抜いたら大きすぎる力に飲み込まれそうになる。

胸が痛むのを無視して私は一つの魔法を発動させる。私が知る中で一番の破壊力を持つ魔法。まだ使いこなすのは無理だが彼女に少しでもダメージを与えることができればいい。私は呼ぶ、全てを焼

き尽くす剣を

「全てを灰燼と化せ 炎の魔剣・レヴァンティン!!」

私は目の前に現れた紅蓮の炎で作られた剣を持つと、勢いよく横薙ぎに振り抜いた。

「はああああああああ!!」

その瞬間、私の目の前は紅蓮の炎で埋め尽くされた。私を中心として放たれた炎はファイアの張った結界をあつさりと破壊し、彼女も巻き込んで辺りを焼き尽くした。

しばらくして炎が消え、少し離れた場所でボロボロになったファイアが地面に片膝をついた状態で苦悶の表情をしているのが見えた。どうやらちゃんとダメージを与えられたみたいだ。

「はは…どうだ、私だってやればできるんだから」

封印を掛け直した私は体を支える力がなくなって後ろに倒れていくのがわかった。

「少しは…役に…立て…た…か…な？」

「うん、十分だよ。お疲れ様、リリィ」

突然落下の感覚がなくなり、誰かに抱きしめられたんだ…と、わかった私は目を僅かに開く。

そこには、自分よりも長い黒髪をなびかせた女性がいた。いつもしている眼帯は無く、真っ赤な右目がこちらを見ていた。血を連想させる真紅の瞳…

でも、この時の私はその瞳を綺麗だと感じた。そして、彼女の微笑む顔を見て私は一言呟いた。

「後は…よろしくね……朔夜」

「ええ、任せなさい」

朔夜の言葉を聞いて私は今度こそ意識を手放した。

3 - 6 恐怖再び…（前書き）

いよいよクライマックス！

3 - 6 恐怖再び…

朔夜Side

私がリリーの元へとたどり着いた時、そこでは今まさに勝負が決しようとしていた。

リリーは魔力で作り出した炎の剣を横に一閃：それだけで結界ごと敵を吹き飛ばしていた。危うく私も巻き込まれそうになったのでかなり焦った。

その後、私が倒れるリリーを抱き留めるとリリーの口が微かに動いて後は頼むと言われた。おそらく急激な魔力の増減に慣れていないためだろう。

私はリリーを抱き抱えると下へと降りる階段に向かい歩きだす。

「ま、待て…」

呼び止められた私は立ち止まり声のした方へと顔をむける。そこには立ち上がるのがやっとの状態のフィーレがいた。

「行かせ…ない…主の……ために！」

私はじつと彼女の目を見つめる。彼女の目はとてもまっすぐで…だからこそ間違っていることに気がついていない。主の命令を成し遂げようとするその心意気は見事だが…

「…まったく。貴女もオーズも真面目過ぎるわね」

「…なに？」

フィーレは何のことだ、と言わんばかりの視線を向けてくる。

「…さて、私が今から言うのは単なる私個人の考えだから無視してもいいわ…」

「……………」

「シオリが何で眠っているのか…これはオースに聞いた。その後ずっと彼女が眠り続けているのは黒い炎のせいだってこともね…」

フィーレは私の話を黙って聞いている。一応聞いてみるつもりのようなのだ。

「ここで疑問が一つ……私達は依頼を受ける時に彼女に会っていること。でも彼女は眠り続けている。それなら私達が出会ったシオリは一体何なのか……私は考えた…もしかしたら彼女は今…魂が体から抜け出ているんじゃないかって…」

「…！」

「彼女が起きないのは黒い炎に侵食されてるだけじゃない。…魂が体の中になからじゃないかしら？」

「馬鹿な！」

フィーレは腕を振って否定の意思を示す。

「もしそうなら…何故シオリ様は主に会いに来ないのだ!？」

私はフィーレから視線を外して天井を見上げる。一見何も無いように見えるがしつかりと結界が張ってあるのがわかる。

「ここには結界が張ってあるわね？」

「そうだ、主が主自身とシオリ様を守るために張った結界だ」

「じゃあ、その結界の外側にもうひとつ結界が張ってあるのには気がついた？」

「…え？」

フィーレは目を見開いて呆然としている。どうやら気がついていなかったらしい。

「まあ、仕方ないわ。私もさっきこの右目で見てから気がついたから」

私が自分の右目を指差しながらそう言うと、フィーレは信じられないという顔をした。

「そんな…私やオーズでさえも気づけない程高度な結界があるだとい!？」

私は頷くと続きを話し出す。

「私の魔眼で見た二つの結界。片方は綺麗な虹色で大切なものを守りたいって気持ちが感じられた。これはイリナの結界でしょうね…
…もうひとつは」

私は言葉を区切るとフィーレに向き直る。フィーレの顔はこれから私が言う言葉を予想できたのか青ざめていた。

「…もうひとつの結界は…全てを塗り潰すほど　黒かった」

「　　っ…！」

フィーレはガクンと膝をついて震えはじめた。おそらく彼女は何が起きているのか理解できたはずだ……

「おそらく…まだ…その黒い炎は生きてる。10年間…シオリの体を隠れみのにして…。シオリはここに来ないんじゃない。…その黒い炎が張った結界が邪魔をしているから来ることができないのよ」

「まさか…ヤツが生きているのか！？それでは…ヤツがシオリ様の体に入っている理由は…」

「おそらくイリナに魔力を集めさせるため…かな？たぶん知らないうちに幻術にでもかけられてるんじゃないかしら…」

「そうだとしたら…」

フィーレがハッとした顔で下へ続く階段を見る。

「たぶん…永久機関を完成させて…真っ先に狙われるのは…」

「…主！」

フィーレは傷ついた体を見捨てて階段へと走り出した。私もリリ

イを抱えて後に行く。

私がフィーレに追いついた時、彼女は呆然と床に座りこんでいた。

「あ…ああ」

フィーレは声を震わせながら部屋の奥を見ていた。

そして、私は見た。

こちらに背を向けてシャルを構えているエルダと…

血を流して倒れているイリナと…

歪んだ笑顔を浮かべながらエルダと向かい合う銀髪金目の少女
を…

「数分前」

エルダSide

「はああああ！」

イリナから放たれる魔法を真横へと跳ぶことで回避する。戦闘が始まってから約一時間…彼女の攻撃は私には当たらず、私の攻撃は直撃こそないものの彼女に少しずつダメージを与えていた。

「…くっ！」

イリナは私が放つ魔力弾を寸前で回避すると片膝を床につけた状態で荒い呼吸を繰り返していた。

現在のイリナは天使の眷属としての力を無くしている。残っているのは膨大な魔力が扱えることくらいだ。だから傷も治らないし、疲れも溜まる。今のイリナは正に満身創痍といった感じだ。

「イリナ…まだ…続けるの？」

私の問い掛けにイリナは構えをとることで答える。

「もう止めよう？シオリだってこんなこととして欲しくないはず…」

「うるさいー！」

「っ！」

イリナの声に私は驚いて言葉を繋げなくなった。

イリナは涙を流しながら、しかし私を睨みつけながら構える。

「私には…シオリしか…いないのよ!」

「……………」

「あの子の側が私の居場所なの!あの子がいない世界なんて生きる意味がないのよ!」

「…イリナ」

「うあああああ!」

彼女から放たれた魔力弾を障壁を張り正面から受け止める。

「ああああああ!」

パキパキッ

「…っ!」

突然彼女から放たれる魔力が増え、私の障壁に輝がはいる。

彼女は結界に回していた魔力を魔力弾へと上乘せしたのだ。

「…くっ!」

私も魔力を上乘せして障壁を強化して真っ正面から受け止める。避けてしまってもいいのだが、私は彼女の攻撃を避けようとは思わ

なかった。

やがて攻撃がおさまるとイリナはふらふらとシオリが眠る結晶へ背中をつけると悔しそうに私を睨んでいた。

「イリナ、もう止めて…もう苦しむあなたを見たくない」

「うるさい…うるさいうるさいうるさい…！」

彼女はふらふらしながら再び構える。私はゆっくりと彼女へと歩いて近づいていった。

「…っ！来るな！」

イリナは少ない魔力で魔力弾を作ると私に放ってきた。私はそれを避けることも防御もせずに正面から受けた。それでも彼女へと歩く足を止めない。

「来ないでって言うてるでしょ…！」

目の前まできた私に殴りかかるイリナの腕を掴んで結晶へと押し付ける。

「離して！離してよお！」

必死に私の腕を解こうとする彼女を私は真っ直ぐ見つめる。イリナも涙を流しながら私を見ている。今の彼女の瞳は虚で、そこには絶望の色があるだけ。

「もう少し…もう少しで…シオリが帰ってくるの…お願い…邪魔

…しないで！」

バシンッ

「……あつ」

必死に私に訴えるような視線を向けてくるイリナの頬に私は平手打ちをした。

「あなた、それでシオリは本当に喜ぶと思ってるの？」

「…え？」

彼女は状況がうまく飲み込めないのか呆然としている。

「私はシオリのことをよく知らないからこんなこと言う資格なんてないのかもしれないけど…彼女がもし目を覚ましたとして、あなたが彼女のために一人で沢山の命を奪ったことを知って彼女は喜ぶの？」

「…っ！」

「少なくとも、私がシオリの立場なら嬉しくないわ。そんな危険なことをあなたにさせるくらいなら…私ならずっと眠ったままでいい」

私の言葉にイリナは視線をそらす。

「じゃあ…私はどうすればいいのよ…シオリを諦めて普通に暮らせてっていうの！？」

イリナが再び私に視線を向けてくる。その表情は叱られた子供のようで今の彼女より幼く見える。

「違うわ。私が言いたいのはもっと周りを頼りなさいってことよ」

「…頼る？」

「そう…あなた、10年の間一人で魔力を集めて回ったんでしょ？
どうしてオーズやフィーレ、他の人に助けを求めなかったの？」

「そ、それは…」

イリナは言葉を繋ぐことができずに俯いて肩を震わせている。

「私が…私がつとしつかりしてたら…シオリを守ってあげられたら…こんな事にはならなかったかもしれない。私がシオリを…殺したようなものじゃない…」

私はため息をつくといりナの腕から手を離す。彼女はまだ俯いたままだ。

「いい？彼女は自分の意思で行動したのよ？なら、あなたがそれを悔やむのはおかしいわよ」

「…でも」

「ストップ、そこまで！…そんなに自分が悪いと思うなら彼女を起こしてから本人に直接言ってみなさい？たぶん怒られると思うわよ？」

「……………」

「それに、魔力を集めるのにわざわざ奪うやり方ばかりするのも関心しないわよ？頼めば魔力を提供してくれる人だっていたかもしれないのに…」

「っ！」

イリナは懐から丸い球体を取り出す。淡い青色をした水晶のような球体。魔力が詰まった永久機関。パズルのように様々な形のカケラが組み合わさってできた球体は一カ所だけカケラがはまっていなかった。

「…ごめん、なさい」

イリナは永久機関を胸の前で握りしめると呟くように謝った。

このカケラとなった生き物全てに謝るように。

「あなたにも…」

「ん？」

「あなたにも酷い事をしたわ…」

イリナは申し訳なさそうに私に向かって頭を下げた。

「気にしないで…私があなたならたぶん同じ間違いを犯したかもしれないし…大切なものをなくす辛さは…私にもわかる」

私は今だに頭を下げているイリナの顔を上げさせると彼女が持つ永久機関へと視線を向けた。

「これって魔力を流し込めばいいの？」

私の言葉にイリナは驚いた表情をしていた。

「え？そんな、私、あなたの魔力を貰うなんて…いっぱい酷いことしたし、あなたの恋人や友人を傷つけたのに…」

「だから、気にしないでって言ってるでしょ？それに、私がそうしたいの。…駄目かしら？」

私の言葉を聞いた途端にイリナは泣きながら何度もありがと、と頭を下げてきた。

「それじゃ、早速始めるわよ？」

「はい」

シオリの入った結晶に背を背後にしたイリナの持つ永久機関に少しずつ魔力を注いでいく。すると、最後のカケラの部分がゆっくりと埋まっていき、輝きが増した。10年かけて作りだした永久機関はついに完成した。

「やった…これで…シオリを…」

バキンッ

「…え？」

私は不意に何かが碎けるような音が聞こえたので周りを見渡す。

その瞬間

ズバッ

「あっ！？」

目の前のイリナが突然倒れ込んだので思わずそれを抱き抱え
るとすぐにその場から離れる。

「イリナ？イリナ！？どうしたの！？」

ぐったりとした彼女を抱き起こそうとして手にねっとりした感覚
が伝わってきた。

「…え？」

私が抱き抱えているイリナの背中には無数の切り傷がついていた。
しかもかなり深い。

「一体誰が……っ！？」

私が顔を上げるとそこには結晶から出たシオリの腕。そしてその腕は永久機関をしつかり握りしめていた。

「なっ…シオリの体が…勝手に動いたの!？」

私は急いでイリナに回復魔法をかけて応急処置をするとシャルを構える。

ようやくだ

「…!？」

シオリの口が微かに動き小さく、しかしはつきり聞こえる声でそう呟いた。

この日をどれ程待ちわびたことか！

次の瞬間、結晶は粉々に砕け散り、中にいた少女がゆっくりと地面に足をつける。その瞬間、髪は銀色に、体は10歳ほどの少女に変わる。いや、あれが彼女の本当の姿…

「…わざわざ私の復活を手伝ってくれるとは…感謝するぞ、現在の管理者よ」

見た目や声は少女のものだがこの威圧感と目眩を起こしそうな程邪悪な気配。彼女がシオリではないことは一目でわかった。

「お前は…誰だ!？シオリはどうした!」

そこにいるシオリの姿をした“誰か”はニヤリと口元を歪める。

その顔は少女のものとは思えないほど邪悪で、歪んでいて…

「我が名は“アベル” 10年前、この体に取り付いてなんとか生きながらえたが…ふっ、なかなか面白かったぞ。必死に魔力を集めるその女を見るのは飽きなくてな。この体の持ち主の魂はおそらくまだこの世界をさ迷っているのだろうが…出会われたら面倒なのでこの建物に結界を張り、さらに幻術を使って惑わすことでなんとか今まで上手く事を運べた…ククク…ハハハハ！」

アベルの笑いと同時に黒い炎が立ち上る。全てを塗り潰すような黒炎の中心でシオリの体に取り付いた“ソレ”は笑い続けている。

「主…！」

ちょうどその時に守護者であるフィーレと、少し遅れて朔夜が気絶したりリイを抱えてやってきた。

「…あ…ああ」

フィーレは目の前の光景に言葉を失い、朔夜も啞然としていた。

「朔夜、イリナの治療を！できるだけ急いで！応急処置はしたけど出血が酷い！」

「わかった！」

私は視線を外さないようにしながら朔夜へと指示を出す。

「ククク、さあ…始めようか！我が復活を祝う戦いを！アハハハ！」

少女の姿をした悪魔は楽しそうに両手を広げて…

今ここに開戦を宣言した。

3 - 7 星の代行者（前書き）

決着です！！

3 - 7 星の代行者

エルダはシャルを構えたまま目の前の相手を睨みつける。

「ククク…怖い怖い…そう睨むな。我は今機嫌が良いのだ。遊んでやるからもつと気楽にするがいい」

「ふんっ…馬鹿にしてるの？」

言葉とは裏腹にエルダは内心焦っていた。

目の前にいるアベルと名乗った“ソレ”はただ立っているように見えて全く隙がない。下手に動いたら間違いなくやられるだろう。

「…ふむ、このままでは面白くないな。ここは我からいかせていただこう！」

「…っ!？」

ゆっくりと前屈みになった瞬間、まるで初めからいなかったかのようにアベルの姿は消えた。

それと同時に右側から感じる強い殺気。

体を左に動かしながらアベルの放つ蹴りをエルダは両腕を使って受け止める。

いや、受け止めようとした。

「…ぐっ!？」

両腕に伝わる感じたことがない強力な力。そして、アベルが脚を振り抜くと同時にエルダは反対側の壁まで吹き飛ばされた。

「…うぁっ!！」

轟音と同時に壁に激突したエルダはそのままその場に倒れた。壁は大きく凹み、激突の衝撃がどれほど強力だったかを表している。

「エルダ!！」

走り寄ろうとした朔夜をエルダは片手で制した。

「大丈夫…朔夜はイリナの…治療…を…お願い…ごほっ!」

「エルダ!？」

立ち上がったエルダは口から血を流していた。激突した時に内臓の数カ所にダメージを受けていたのだ。

「私の怪我はすぐ治るから…朔夜は彼女を」

「…わかった。無理しないでね?」

「ええ…」

朔夜は再びイリナの治療に向かい、エルダはアベルと向かい合う。

「話は終わったのか？」

「ええ、わざわざ待っていてくれてありがとう」

「ふっ…」

シオリの姿をしたアベルは再び構えをとる。右足を軽く引いて軽く前屈みの状態をつくる。

「さて、次はどうする？」

エルダは真剣にアベルの顔を見返すとシャルを構える。

「次は…止める！封印第一段階解除、アンチモード！」

エルダは自らにかけてあった封印の一つを解いた。同時に髪は黒くなり瞳は輝きを増す。

アンチモード…エルダが本気で相手を危険と判断した場合のみ使う身体能力強化である。髪が黒くなるのが特徴で、相手に一切の情けをかけないという現れでもある。

「ほう、少しは楽しめそうだな。…だが、我にはとどかないな」

再びアベルが視界から消える。身体能力を強化したエルダでさえ見えない速度である。しかし、先程とは違いエルダは目を閉じてシャルを構える。

「…そこだ！」

「…っ!？」

振り向きながらの一閃。その攻撃は僅かにアベルの体をかする。

「ほう…今の速度を見切るか…たいしたものだ」

エルダも日々、朔夜と鍛練をしていたこともあり以前よりも確実に強くなっていた。しかも朔夜はスピードタイプであるため高速移動からの攻撃への対処は慣れたものだった。

「しかし…いいのか？この体は我ではなくシオリという者の体だ。傷つけていいのか？」

「……くっ！」

実体がシオリのものである以上攻撃するのを躊躇ってしまう。イリナのためにも何とかして“アベル”という存在のみを倒さなければならぬ。

「シオリという娘…魂だけになっても我に挑んできたのには驚いたものだ。今も結界を何とか通り抜けようと必死なようだ」

「……！」

この時、エルダはある事に気がついた。アベルは彼女の肉体に強引に入り込んでいるようなものだ。ならば持ち主が現れたらどうなるか。

「（もしかしたら…!）」

エルダが打開策を考えると同時に治療を終えた朔夜がやって来た。

「遅れてごめん」

「いや、大丈夫よ。それより朔夜、ちょっと頼みたい事があるの…」

「…？」

そしてエルダは小声で朔夜にある作戦を告げる。

「…なるほど。わかった、しばらく待ってて！」

「…よろしくね、朔夜！」

そしてエルダはアベルへ、朔夜は階段へと走り出す。

「ふんっ…何を考えているかはしらんが…無駄な足掻きだな」

「どうかしら？…いくわよ！封印完全解放！」

エルダは封印を全て解除する。純白の翼が現れ髪も元の銀髪へと戻る。

「（とにかく時間をかせがないと！）」

エルダはアベルへと走り込むと大量の魔力弾を作り、それを発射する。少しでも動きを止めるのが目的だった。

しかし

「ならば私も少々本気を出そう」

アベルが右手を前に突き出し、そこから視界いっぱいを覆う程の黒炎が放たれる。それはエルダの魔力弾を全て飲み込むとそのままエルダへと殺到する。

「くっ！」

咄嗟に魔力を込めた障壁を張るが、黒炎がぶつかった瞬間から輝が入り始める。

「（くっ！なんて威力なの！？）」

輝は徐々に広がりついに障壁は破壊される。黒炎はエルダを飲み込むと分厚い壁を突き破り四つ隣の部屋へと到達してようやく消えた。

「…う…うあ」

エルダは何とか意識を保つことはできたものの体中に傷を負い、彼女を中心に血が広がっていく。

「どうした、それが貴様の全力か？我は目覚めたばかり故、まだ一割の力しか出していないぞ？」

「（一割…ですって？一割で私の全力より上なの？）」

先程の障壁は咄嗟に張ったとはいえかなりの魔力を込めたはずだった。それをあっさりと破ってみせたアベルの力にエルダは戦慄する。

「もう少し楽しめるかと思ったが…興が冷めた。消えるがいい」

アベルは再び右手をエルダに向けると魔力が集まり、黒炎が燃え上がる。あきらかに先程よりも強力なものを放とうとしていた。

「…くっ…うあ…」

エルダは何とか立ち上がろうとするが傷が深過ぎて回復が間に合わない。体を起こすのが精一杯だった。

「（まさか…ここで終わるの？まだこの世界のことを何も知らないのに？）」

アベルの右手には先程の二倍の大きさの黒炎ができていた。これが直撃すれば間違いなくエルダといえど、この世から完全に消滅する。

「安心しろ、恐怖は一瞬だけだ…」

アベルが右手を突き出そうとした瞬間。

「うおおおおおおお！！」

「…む！？」

突然アベルの真横から青い影が飛び出してきた。

「はあああああ！！！！」

さらに反対側からは緑の影が走り込む。

影の正体はオーズとフィーレだった。

「シオリ様の体を返せえ！」

「ああああああ！！」

アベルは一旦黒炎を消すと両手を広げて障壁を張り二人の攻撃を防ぐ。

「うおおおお！！」

「はああああ！！」

二人は全力で力を込めるが障壁は傷一つ入らない。

「小賢しいわあ！！」

「ぐっ！？」

「きゃあ！？」

アベルが力を込めると障壁から衝撃が放たれ二人を吹き飛ばした。

「今だ、やれ！」

「…っ！？」

二人に気をとられていたアベルは背後から走り込む三人目に気が

つかなかった。

「全てを灰燼と化せ！炎の魔剣、レヴァンティン！！」

三人目は先程まで気絶していたリリイだった。右手には炎で作られた魔剣が握られている。

「いつけえええ！！」

リリイはそれをアベルへと振り抜く。圧倒的な熱量を持った魔剣を

「ふっ…」

「…え？」

リリイは何が起きているのかわからなかった。

アベルは、リリイの攻撃を指一本で受け止めていたのだ。

「なかなかの威力だが…」

アベルは空いている方の腕でリリイの首を掴むとそのまま持ち上げる。

「あ…かはっ…が…」

小柄な少女の腕がリリイの首を絞めるその光景はまさに異常だっ

た。

「まだまだ未熟だな。そんな不安定な魔剣など、我にとってはそよ風程度にしかならんわ」

「う…あ…あつ！」

アベルはリリイを掴む腕にさらに力を込める。

「~~~~っ！」

まともに呼吸ができないリリイは声も出せず、酸欠によって意識も朦朧としていた。

「（やめて…やめて！やめて！やめて！）」

その光景を見ていたエルダは心の中で叫び続けた。今だに動けず、声もうまく出せないこの状態が悔しくて、エルダは何度も叫び続けていた。朔夜はまだ帰ってこない。やはりあちらはあちらで手こずっているようだ。

「（お願い…誰か！）」

そう思った瞬間。

エルダ

声が聞こえた。

ようやく妾も目覚めた。

それはとても綺麗な声で…

今、助ける。

とても安心できる優しい声で…

しばし、体を借りるぞ？

その言葉を聞いた瞬間、エルダの意識は沈んでいく。不意にエルダは誰かが自分に微笑んでいるように感じて目を懲らす。そこには…

赤い目をした自分がいた。

「…っ!？」

強烈な殺気を感じてアベルはリリイを掴んでいる腕を離れた。リリイはその場に倒れると咳込みながらも何が起きたのか理解しようとする。

「…馬鹿な、この気配は…!」

アベルの視線は先程吹き飛ばしたエルダへと向けられている。

アベルの視線の先でエルダは静かに立ち上がった。傷も全て治っている。

「……五千年か…久しいな、アベルよ」

エルダは先程とはまるで違う雰囲気と口調でアベルに離しかける。

「貴様…先程の天使の娘ではないな…誰だ？」

エルダはクスクスと笑い、ゆっくりと瞼をあげる。その瞳はルビィのように赤かった。

「妾を忘れたか？五千年前はずいぶんと派手に戦ったのだが…」

途端にアベルの表情が驚愕に変わる。リリイや守護者二人は状況がわからず呆然としている。

「まさか…『エルフィナ』なのか？」

アベルの問いにエルダ…いや、エルフィナは微笑みによる肯定を

する。

「星の代行者…また…また我が前に立ちはだかるのか！」

アベルが右手を突き出し黒炎を放つ。エルフィナは黒炎に右手を向けると優雅に横に振り抜く。それだけで黒炎は霧散した。

「無駄だ…貴様はまだ真の力を使える程に回復していない。そんな状態で妾と戦うつもりか？」

「くっ！」

アベルは一步後ずさると黒炎を生み出す。

「まだだ、この体があるかぎり貴様は我に攻撃はできない！」

「たしかに…妾はその体を殺さずに貴様を滅することはできぬだろう。それなら貴様を外に追い出せばいいだけの話だ」

彼女がニヤリと笑い、アベルはどういうことかと思考する。しかし、その思考が答えを出す前に背後から声がした。

「待たせたわね。連れてきたわよ」

振り返ったアベルが見たのは黒髪の女性と、隣に並んで立つ銀髪金目の少女の魂だった。

「なに、馬鹿な！？」

アベルの目の前にシオリの魂が歩み寄る。

「く、くるな！」

シオリはアベルを睨むと右手を突き出す。

「私の体…返してもらっわ！」

シオリの突き出した右手が体の中へと入る。

「があああああー！！」

その瞬間アベルは苦しみだす。そして黒炎が大量に噴き出したかと思うとシオリの体はその場にまるで糸が切れた人形のように倒れる。

「おの…れえ！！」

空中に浮かぶ黒炎の塊からアベルの声がする。今、彼はシオリの体から弾き出されたのだ。

「どうやってあの結界を…！」

「私だよ」

朔夜が一步前に出ながら笑う。右手にはナイフ、そして彼女の右目は青かった。

「ちょっと手こずったけど、この神器と直死の魔眼であんたの結界に穴を開けたのよ。そこから彼女を中に入れたの」

「貴様はエルダにシオリの魂が近くにいると自らばらしていたからな。エルダは朔夜に結界の破壊に向かわせたのだ」

ニヤリと笑うエルフィナにアベルは焦り始める。

「終わりだ…消えろ、闇の者よ」

エルフィナが手を掲げ、そこから白い魔力弾が無数に放たれる。

「くっ！」

アベルは逃げようとするがそれよりも魔力弾の方が速かった。魔力弾は全てアベルへと向かい爆発した。

「やったの？」

朔夜が呟くがエルフィナは不機嫌そうな顔をしている。爆発による煙が晴れると、そこには…

「間一髪」

「どうやら間に合ったようだな…」

二人の人物がアベルを守るように浮かんでいた。

一人は真っ黒なゴスロリ服を着た黒髪の幼い少女。もう一人は黒い服に黒いマントを羽織った青年だった。

「メリーベル…それにシュナイダーか」

エルフィナは二人を睨むと魔力を集め始める。

「ストゥップ！今日は戦いに来たんじゃないよ」

少女：メリーベルは両腕で×の形を作る。

「今回は先走りし過ぎて消されかけた馬鹿なリーダーを迎えにきただけだ」

「あはは バカ、バカ！」

「お前達…後で覚えておけ」

少々頭にきたエルフィナは魔力弾を放とつと身構える。

「メリーベル…」

「はいはい、まっかせなさい！やあっ」

メリーベルが両手を前に出すと突然黒い霧が部屋の中を覆い尽くす。

「…チッ！」

エルフィナが魔力弾を放ち、その衝撃で霧も消えるがそこに三人の姿はなかった。

今回はこちらが退こう…次は貴様を消し去る！

やれやれだ…

まったね〜

気配が完全に消えさり部屋の中に残ったのは静けさのみとなった。

「……逃げたか」

エルフィナは不愉快そうに肩を竦めるとリリイ達へと振り向く。

「えっと…」

そこには状況がうまく飲み込めないでいるリリイと朔夜、守護者二人がいた。

「エルダ…なの？」

リリイが首を傾げながら尋ねると、エルフィナは首を横に振る。

「妾はエルフィナ、星の代行者と呼ばれている。現在はエルダの体を借りている」

「じゃあエルダは？」

「リリイよ、心配するでない。エルダは今心の中にいてちゃんと意識もしっかりしておる」

エルフィナは自分の胸を抑えると微笑む。

「よかった…あれ？なんで貴女は私の名前を？」

「妾はエルダの中から全て見ていた。…といつてもちゃんと目覚めたのはつい先程だ。…実は一度だけエルダの代わりに表に出たことがあるのだが…その…／／／／」

そこまで言つて急に顔を赤くしてモジモジと恥ずかしそうにするエルフィナにリリイは首を傾げる。

「いくら記憶が戻っていなかったとはいえ其方と…その…体を重ねることになるとは…／／／／／」

「え！？／／／／／」

リリイは記憶を探る。記憶がなかった…エルダに代わつて…赤い瞳…

「……あ」

リリイは一つの事件を思い出す。友達のフィアナの料理を食べたエルダが丸一日記憶喪失になったことがあった。たしかあの時のエルダは瞳が赤かったのだ。

「え！？じゃあ、貴女は…エルちゃん…なの？」

エルフィナは顔を真っ赤にして頷く。

「ええええええええええ！？」

その時のリリィの声は凄まじく、
気絶していたイリナとシオリが
目を覚ましたほどだった。

3 - 7 星の代行者（後書き）

次回はほのぼのを書こうかと思っています。

3・8 これからについて（前書き）

前半は百合的なシーンで後半は説明が入ります。

3・8 これからについて

アベルとの激戦が終わり一段落したエルダ達はイリナが用意した部屋で休んでいた。

「皆さん、本当にありがとうございました」

シオリはぺこりと頭を下げてエルダ達にお礼を言う。

「いえ、そんな…当然のことでしたまでですから…」

エルダもぺこりと頭を下げる。この二人、どうやら気が合うらしく話のネタが尽きない。相性がいいのだ。

「エルダとお話するのは楽しいわ」

「私もシオリとのお話は楽しいよ」

「…ただ」

二人は同時に呟くと視線を下げる。そこには…

「はあ、シオリ」

「エルダ」

お互いのパートナーが腰に抱き着いているのだ。いくら椅子に座

っているからといってもこの体制はなかなか辛い。

しかも部屋に入った瞬間からである。エルダとシオリが相性がいいのならばパートナーもまたしかり…である。

「イリナ…もう大丈夫だから…ね？どこにもいかないから離してくれと嬉しいな？」

「いやあ～～！」

幼児退行した成人女性を宥める少女…なんというか…シニールである。

「まあ、今日は色々あったからお話はまた明日ね。エルフィナもそう言ってたし…」

エルダの言葉にシオリも頷く。実はあの後、エルフィナは疲れたから詳しくは明日、と言ってエルダに交代したのだ。結局やることもなくなっただけでこうしてお互いの親睦を深めていたのだ。

「もうすぐ夜だし、疲れも溜まっているだろうから早目に寝ましようか」

「そうね、そうしましょ」

その後、シオリとイリナは同じ部屋で一緒に寝ることになり、エルダ達もその隣の部屋へと入る。

シャワーを浴びたエルダはベッドに倒れ込む。

「あゝ疲れたゝゝ」

はあ…、と息を吐くエルダは現在ネグリジェ姿。こうなれば当然パートナーの獣リリイが黙もくっていない。

「隙ありゝ！」

「え？ひゃあ！？リリイ、どこ触ふってるのよゝ！ゝ」

「よいではないかゝよいではないかゝ」

「あなたそんな言葉どこで覚えたのよ！？」

最近忙しくてエルダにかまってもえなかったため欲求不満だったリリイは完全に暴走してしまっていた。エルダは朔夜に助けを求めようと顔を向ける。しかし…

「うんしょ…よし、これでいいかな？」

朔夜はかなり露出度の高い下着姿でベッドをくつつけていた。

「さ、朔夜？何してるの？」

「え？何って、イチヤイチヤする準備だけど？」

「（ブルータス！お前もか！！）」

エルダは本能的な危険を感じてリリイの腕から器用に抜け出すと隣の部屋に逃げ込んだ。

「シオリ！助けて！私襲われ……る……」

エルダは中の光景を見て固まった。なぜなら……

「あ……イリナ……ま、待って……そんな……ああっ！」

「シオリ……可愛いわ……ふふふ」

そこにはピンク色の空間が出来上がっていた。

「（あんた達もかい！！）」

エルダは扉を閉めて別の場所へと移動しようとした。しかし……

「つゝかまゝえた」

「ひっ！？」

肩に手を乗せられて思わずビクリと体が跳ねる。

「ほらほら、あっちも盛り上がってるみたいだから……私達も……ね？」

そう言ってリリィはエルダの唇に自分の唇を重ねる。

「あ……ふあ……」

「ふふ、続きはベッドで……ね？」

「あう……／＼／＼／」

その後、二つの部屋から数時間の間、甘い声が途絶えることはなかった……

翌日

「うゝ、酷い目にあつたよ。二人がかりでこられたらいくら私でも対処できないよ……／＼／＼／＼」

エルダは着替えを済ませるとベッドで熟睡中の二人を残して部屋を出た。すると、丁度隣の部屋からシオリが出てきた。

「あ、おはようエルダ……」

「おはようシオリ……昨日は……その……楽しめた？」

「えー？……ま、まあ……ね……そっちは？／＼／＼／」

「……うん／＼／／」

二人は顔を赤くしながら……しかし、嬉しそうに一緒に朝食を作り始めた。

「うわっ！」

「きゃっ！」

「あ……」

体格的にイリナの方が大きいため、イリナがリリイを押し倒す形で床に倒れた。

「……………」

「……………」

この瞬間、部屋の空気が止まった。リリイは視線だけを動かしてイリナの体を見た。イリナは現在、裸にワイシャツ姿である。当然リリイがこの必殺的な格好を見てただで済むわけがない。

「ワイシャツ一枚の……お姉さんに……押し倒される……このシチュエーション……いい！……ぶはあ……！」

「ええ！？ちよっ……リリイ！？……きゃああ！鼻血が！」

鼻血をふいて倒れたままのリリイとおろおろする必殺スタイルのイリナ……朝からはっちゃけすぎである。

「あはは……あ、朝から元気ね……二人とも……」

「あ、あはは……」

もはや苦笑いするしかないエルダとシオリであった。

「えっと、朝から色々あったけど今後のことを話し合いましょうか」
朝の騒動から一時間程たったころエルダが話を切り出した。

「まずは昨日戦ったアベルとかいう奴と、彼を助けた二人について
…よろしく、エルフィナ」

『わかった』

エルフィナは一々表に出るのが面倒だからと念話を使って話すことになった。

『まずは妾のことから話そうか。妾はこの星…正確には世界そのものが具現化した存在だ』

「世界そのものが…具現化した存在…」

『うむ、妾は今から約五千年前にアベルと戦い、そして眠っていたのだ』

「五千年前…そんな昔に…」

五千年前という単語を聞いて皆はそれぞれ驚いた顔をしていた。

『次にアベルの正体だが、奴は元々人間だった』

「え！？あいつ人間だったの！？」

驚きのあまり大声を出して立ち上がったリリイをエルダが座らせる。

『アベルは平凡な人間だった。そんな彼は、ある時一人の人物に恋をした』

“恋”という単語に今度はリリイとイリナの目つきが変わる。彼女達にとってこの話の興味が一段階上がったようだ。実際、目を輝かせている。

『だが…彼が恋をした人物はただの人間である彼にとって手の届かない存在だったのだ』

「手の届かない存在？」

『そうだ。身分等や種族ではなく、存在が…いや、次元そのものが違うものに恋をしたのだ。故に彼は普通なままではその人物に近づけないと考え、人間であることを捨てたのだ』

「人間であることを…捨てた」

シオリが意味を確かめるように同じように呟く。思えばここにいるメンバーは皆“人間だった”者達だ。

「やっぱり、私達みたいに何かと契約を？」

イリナが自分の指にはまる指輪を見ながら尋ねる。

『いや、違う。彼は禁書を読みあさり自分だけの魔法を完成させた。…彼は、世界中の負の感情を取り入れることにより自分自身を“負の感情そのもの”という存在へと変化させたのだ…』

「負の感情？」

『そうだ、彼は人間が存在するかぎり生き続ける。なんといつても感情そのものなのだからな』

「でも、なにも負の感情じゃなくても…」

『負の感情は人間の感情の中でも特に力を発揮しやすく、同時に扱いが簡単なのだ。ただし、生半可な精神では負の感情は操れない。感情の重さに堪えられずに精神の崩壊を起こす。…しかし、アベルはその圧力に堪えた』

「それほどその恋した人と一緒にいたかったのね…」

「好きな人と一緒にいたい気持ちは…わかるよ」

エルダの呟きにリリイは微笑みながらそう言った。エルダもリリイを見ると頷いた。

『しかし、運命は残酷でな…世界を乱す力にした彼は世界そのものを敵に回してしまった。つまり妾のことだ』

エルフィナは一度言葉を区切ると悲しそうに話を話す。

『世界を乱す者は世界から排除される。当然のことだ。…だが、それは彼の絶望の始まりにすぎなかった。なぜなら…』

『彼の恋した人物とは妾のことだったのだから』

その場にいた全員が言葉を無くした。つまり、彼は恋した人物に近づこうとしたが故にその人物と戦うことになってしまったのだ。

『最後の戦いで奴の口からそう聞かされた時は驚いた。妾は世界そのもの、肉体は存在せず、天使の体を借りなくては何にも触れることさえできない。そんな存在に奴は恋をしたのだ…。たまたまその時の天使に体を貸してもらっていたんだが…妾と偶然出会い、話をするうちに妾のことを気に入ったようだ…。妾の正体を知ってもなにもないように振る舞っていた…。ふふふ、馬鹿な奴だよ…』

「あなたは…」

『…?』

寂しそくに笑うエルフィナに不意にシオリが声をかけた。

「あなたは…彼をどう思ってたんですか？」

シオリの質問にエルフィナはしばらく黙るとゆっくりと言葉を紡いだ。

『妾は…そうだな…嫌いではなかったよ。まだ人間らしさが残っていた時の奴は馬鹿がつくほど真っ直ぐで……それ故に間違いに気がつかなかった…。そんなことをしなくとも妾は何時でもそばにいたのだが…』

「じゃあ今のアベルは…」

『今のアベルは負の感情を取り込み過ぎて精神が崩壊してしまっている。……もうあれはアベルという名の別の存在だ』

今のエルフィナが表情を作れたならおそらく辛そうにしているだろう…と、この場にいる全員が思った。

『結局、アベルは負の感情にのまれて精神崩壊を起こして暴走した。妾は奴を止めようとしたのだが…結果は相打ちだった。世界中から力を集めたアベルの力は妾と互角だった。まさか世界を相手にして引き分ける力があるとは思わなかったからな…油断していた』

エルダ達の表情が陰しくなる。その世界を相手に引き分ける実力を持った相手と実際に昨日戦ったのだ。全員無事だったのが奇跡に近い。

『ダメージを受けた妾と奴は五千年眠り続け、最近になって目覚めた…というわけだ』

「なるほど…じゃあ質問。アベルを助けにきたあの二人は？」

『あの二人は名をメリーベルとシュナイダーと言う。以前にアベルが力を分け与えた眷属達だ。力はエルダと互角くらいだろう』

「エルダと互角ですって!？」

その場にいた全員がさらに表情を険しくする。

「彼等は何人いるんですか？」

『正確な数はわからぬ…しかし五人以上いるのは確かだな』

「そんな…」

エルダと同じ強さの敵が五人もいるという事実とその場にいる全員が息を呑む。

『奴はまだ完全に力を取り戻していないため派手な行動はしないはずだ。見つけるのは難しいだろう…。妾もまだ完全ではない。しばらく様子を見るしかなかるう…』

「それで、今のアベルの目的って何なの？」

朔夜の問いにエルフィナはふむ、と考えるような声を出すとはばらく黙った。

『おそらくだが今の奴には破壊衝動しかないと思われる。五千年前にもその傾向が見られたからな』

「うわっ…迷惑だね」

リリイが呆れたように言うのを見ながらエルダはこれからのことを考えていた。

「それなら、とうぶん奴は動かないみたいだから私達もできるだけ鍛練して強くなきゃね」

「そうね…むこうもただじっとしてるわけじゃないだろうし…」

「これからは鍛練続きの毎日ね」

『ま、待て！…其方達、妾の戦いに協力するつもりか？』

エルフィナの言葉に全員「え？今更？」という顔をしていた。

「ここまで聞いたら協力しなくちゃ…ね？エルダ」

「リリイの言う通りよ。私はこの世界の管理者なんだから守るのは当然だし」

「私も、イリナも助けて頂いた恩があります…」

「私もシオリと同じ気持ちです。是非手伝わせてください。貴女もそうでしょ？朔夜さん」

「私はエルダとリリイがやるなら手伝うわ」

『……皆、感謝する』

こうして、新たな敵の存在を知ったエルダ達はエルフィナとイリナとシオリを仲間に加えて次の戦いまで、何時もと変わらぬ日常に戻るのだった。

3・8 これからについて（後書き）

次回からはちょっとほのぼのした話を数話書こうかと思っています。

閑話　フィアナの料理（前書き）

あけましておめでとございます！新年になってからの初更新です！

今回はフィアナ目線で少し昔の話から始まります。

閑話 ファイナの料理

ファイナナSide

私は貴族の娘…他に兄弟、姉妹がない私はいずれ家の長女として政治の世界へと関わりを持つことになる。

私は貴族の規則に縛られた生活が大嫌いだった。

勉強、武術、魔法、ダンス…何においても私は完璧に振る舞うことを強要された。小さい頃の私はそんな事は当たり前なんだと何の疑問も持たなかった。

私が今の生活に疑問を持ったのは15歳の時にふと浮かんた好奇心からだった。

「（私は外の生活を何も知らない…）」

窓から外を見ても見えるのは15年間毎日見てきた広い庭とその先に見える大きな塀だった。一度も屋敷の敷地から出たことがない私にとってそこから先はまだ見たことがない世界。

「（見てみたい…）」

私の中に生まれた好奇心は消えず、逆に日に日に大きくなっていった。

そしてある夏の日 私は屋敷を抜け出した。

夜の町は物音一つしない。私が着ているのは真っ白なワンピース。たった一人で歩くはじめての町はとても寂しいものだった。

その日から私は毎日、真夜中にこっそりと屋敷を抜け出して夜の町を歩き続けた。理由はない、ただ歩きたかったからだ。

二週間が経ったある日、いつものように屋敷を抜け出して町を歩いていた。幸い、この町は治安が良くて真夜中に出歩く人は私以外おらず、私は自分の時間を満喫していた。

そう、この日までは…

いつものコースを歩きながら左右の建物を眺める。どこも明かりはついていない。私は町の真ん中にある噴水に向かって歩いた。そこでいつも夜空を見ながら歌をうたうことが私が唯一やることだった。

しばらく通りを歩き、町の中央にある噴水にたどり着いた。噴水は半径2メートルくらいの円形で、中心は魔法を使用する際に現れる魔法陣を象った形になっている。

私は噴水の前で立ち止まると、星が輝いている夜空を見上げる。

夜空の星は昼間に見える青空とはまた違う美しさがある。しばらく

く空を眺めた後、近くのベンチに腰掛けると目を閉じて風を感じながら歌をうたう。

私は星を見上げよう

私は籠の中の鳥だから

私の苦しみが、いつか誰かに届くように

星は全てを見ているから

私の思いを風に乗せ、今夜空に届けましょう

静かな町の中心で私の声だけが響く。

その時

「なんだか暗い歌だな」

「…っ!？」

突如背後から声をかけられて私は振り返った。

そこにいたのは茶髪で暗い赤の瞳をした少年だった。

「だ、誰!？」

私が脅えて一歩後ずさると少年はバツが悪そうに頭をかく。

「あゝ…怪しい者じゃないって言っても信じてくれないよな…」

少年は私と同じくらいの年頃だとわかった。身長は私より十センチほど高いだろうか。頭をかきながらため息をつく少年の様子から危険な感じがしなかったので、私は少し警戒を緩める。

「あんたが有名な真夜中の妖精か？」

「真夜中の…妖精？」

少年の言葉に私は首を傾げた。真夜中の妖精…いったい私と何の関係が…いや、だいたい予想はつくが

「最近噂になってたんだよ。真夜中に町の噴水に妖精が現れるって」

少年の言葉に私は額を押さえてため息をつく。どうやら流石に誰にも見つからないわけにはいかなかったようだ。二週間も毎日出歩けば誰かに見られるのも当然だ。

「私はただ真夜中の散歩を楽しんでいただけですわ…」

少年はふゝん、と顔を背けると大きく欠伸をした。

「普段は寝てる時間なんだけどな。なんでか目が覚めたんだ」

「そう…ですか」

私は少年から視線を外すと再び空を見上げる。

「じゃ、俺は帰るから。邪魔したな」

私が空を見上げていると、少年は背を向けて歩き出した。私は慌てて彼を呼び止める。

「あ…お待ちください!」

「ん?何だ?」

ここで出会ったのも何かの縁だから名前を聞いてから帰ろうと思ったのだ。

「お名前を…聞かせてくださいませんか?」

私の言葉に彼は一瞬驚いたようだったが、すぐに笑顔になった。

「サイマス・ハルバルトだ、皆からサイって呼ばれてるよ」

「サイマス…覚えておきますわ。私はフィアナ・ルツ・フレイラルです。また…会いましょう」

私とサイは同時に背を向け、一度も振り返らなかった。

それから三日後、夜中に歩いていたことがばれた私は外出できなくなり、再び屋敷にこもりつきりとなった。

そして二年後、私は両親の反対を押し切り学園に入学した。信用できる使用人を数人連れて家を出て寮での生活も始めた。

入学式を終えてクラス分けの結果を張り出した紙を眺める。私のクラスにはサイの名前もあった。

入学式で午後の授業がなかったので、私はサイの席へと向かった。彼は身長が伸びている以外はあんまり変わっていないかった。

「お久しぶりですわ、サイ」

私へと視線を向けたサイは少し驚いていた。

「フィアナか？二年ぶりだな、元気だったか？」

「当然ですわ。私を誰だと思っているのです？真夜中の妖精ですよ？」

私が微笑むとサイも微笑み返してくれた。その時から私は何かと彼のことが気になるようになった。

今になって思えば、この時から私は彼に……

「サイ、あなたお昼は食べているんですの？」

ある時、昼休みになってから私はサイを問いただしていた。というのも、毎日サイの様子を見ていたが彼が弁当を食べたり、購買で食べ物を買う姿を見たことがないからだ。

「いきなりだな、まあ、食べてないな。俺の家は貧乏だからな、余裕がないんだ」

私はこの時、彼の為に何かをしてあげたいと思った。そこで考えたのが…

「なら、私が明日からサイのお弁当を作ってあげますわ！」

「はあ？」

「私がサイのお弁当を作ると言っただけです。私には金銭的余裕もありますし、料理には昔から興味もありましたし」

何でもこなす私だが唯一やったことがないこと…それが料理だった。

私は彼の為に次の日から生まれてはじめての料理に挑戦した。結果は……まあ、散々と言ってもいい。サイは倒れるし、クラスの友人からは生物兵器だと言われる始末だ。

私は表面上強気な姿勢を保っていたが、心の中では悔しくてしかたがなかった。私は彼に何もしてやれないのか、と寮の部屋で何度も泣きそうになった。

でも、私は諦めない。絶対に美味しい料理が作れるようになりたい。そう思って毎日練習を続けた。

入学から一ヶ月経った頃、今日も中庭でサイに弁当を渡す。サ

イははじめて弁当を作った日から何度倒れようと、気分が悪くなる
うと一度も私の弁当を拒否したりしなかった。

「ん…ファイナ、料理上手くなったな」

「本当ですか!？」

「ああ、まあ最初から上手かったんだがな」

私は微笑みながら彼が弁当を食べるのを眺めていた。

「最初は酷かったですわね、私のお弁当…」

「そんなことないぞ?ファイナは味見してないみたいだからわから
ないかもしれないが…」

「…?」

「たしかに倒れたり気分が悪くなることもあったけど、味は凄く美
味かったんだぞ?」

「…え!？」

私は驚いて固まってしまった。サイは少し恥ずかしそうに再び弁
当を食べはじめた。

私が我に返った時、サイは丁度弁当を食べ終えた。

「サ、サイ…あの、美味しかったのはよかったのですが…よく倒れ
るとわかっているのに私の料理を食べてくださいましたね…」

サイが私の料理を食べなかったのはエルダの記憶喪失事件の時だけだ。あの時は本当に気分が悪かったらしい。

サイは私に弁当箱を渡すと背中を向けた。

「…俺の為に作ってくれたんだからな。食べなきゃいけないだろ？」

「サイ」

私は顔が熱くなるのを感じた。たぶん私の顔は真っ赤になっているだろう。よく見ると背を向けているサイの耳も少し赤い。

「…授業、遅れるなよ」

そう言うときサイは中庭から校舎の中に入っていった。

私はサイの後ろ姿を見つめ、しばらくその場に立ったままだった。

それからさらに一週間…現在私は寮の屋上にいた。時間は真夜中…寮は門限があるので夜の散歩は毎日屋上に行くことにしていた。

扉を開けて屋上の真ん中に立ち空を見上げる。

今日は綺麗な満月だった。

しばらく星空を見上げていると向かいにある男子寮の屋上に人影が見えた。

男子寮は女子寮の向かい側に建っていて、間の距離は25メートルくらいだ。私は目を懲らして人影を見る。どうやら人影の正体はサイのようだ。こんな時間に起きてるというのは珍しい。

どうやらサイも気づいたらしくこちらを向いた。私は軽く手を振る。すると、サイは少し後ろに下がったかと思うと……なんと、走り出したのだ。

そしてそのまま大きくジャンプする。はたから見たら今まさに自殺をしようとしている人に見えるだろう。

だがサイの体は落ちることなく男子寮から女子寮まで見事な大跳躍をみせた。

「サ、サイ！何をしたんですか！？」

私は目の前の事実が信じられなくてサイを問いただした。

「簡単だ、風の魔法を使って体を押したんだよ」

どうやら風の魔法を使って体を前に向かって押して飛距離をのばしたらしい。しかし一歩間違えたら大怪我をするような行為だ。

「何をやっているんです！？こんな危険なことを……！」

「はは……悪いな」

「まったく…」

頭をかきながら笑うサイの笑顔を見ていたら…もう、どうでもよくなってしまった。仕方がないので一番聞きたいことを尋ねることにした。

「サイは何故こちらに来たのですか？」

「ん？…ああ」

サイは月を見上げると一度息を吐いてから再び私に視線を向ける。

「真夜中の妖精が一人じゃ寂しそうだったからな」

「なっ…べ、別に寂しくなどありませんわ！！」

サイは私の反応が面白かったのか笑顔で私を見ていた。私はサイの顔を見ているとドキドキしてしまうので顔を反らして月を見た。

「あ…」

その時、月に重なるように三つの人影が見えた。大きな翼を広げる三人の少女、エルダ達だ。彼女達も夜の散歩だろうか。

「羨ましいですわ…私にも自由な翼があれば…彼女達のように何処までも飛んでいきますのに…」

「…空か」

私の呟きにサイは考えるようになしぐさをする。

「私は籠の中の鳥…今はただ家という籠から逃げているだけですわ。でも、飛べない私はいつか籠に戻される…そうなれば、二度と空は飛べないでしょう。自由になる時は私が必要なくなった時…」

そして…おそらくその時、私に飛ぶための力は残ってないのだろう。

「…なら、今飛んでみるか？」

「…え？」

サイの言葉に私は思わず振り返った。彼の姿は月明かりによってとても神秘的に見えた。

「数分だけなら飛べるぞ？…ほら！」

「え！？ちよつ…きゃあああ！？」

サイは私を抱き抱えると風の魔法を使い空に舞い上がった。突然だったので私は思わず目を閉じてサイに抱き着いていた。

「フィアナ、目を開けてみるよ」

耳元で聞こえるサイの声。私は恐る恐る目を開く。

「…綺麗」

私は思わず呟いていた。目の前に広がる町並み、普段とは違う視線で見る町は幻想的で…それが月明かりでさらに雰囲気を増して見

える。そして、遠くまで続く草原、遠くに見える山…全てが月明かりに照らされて青白く染まっていた。

「どうだ？はじめての空は…気持ちいいだろ？」

首を動かせば目の前にサイの顔がある。私はサイにお姫様抱っこされており、サイの首に両腕でしがみついている状態だった。

「…あ、あの」

「おっと、暴れるなよ？落ちるぞ？」

サイとこんなに密着したことはない。私は胸がドキドキしてさっきから落ち着かない。

「サイ…あの、そろそろ…」

「フィアナ…」

私の言葉を遮ってサイは私に視線を向ける。暗い赤の瞳が私を見る。

「フィアナは…何で俺に毎日弁当を作ってくれるんだ？」

「そ、それは…」

私は言葉に詰まり顔を反らす。

「わ、私は…サイがいつもお昼に何も食べないので…その…」

上手く言葉が出なくて私は俯く。困った、こんな時はなんと
言え
ばいいのか…

「俺はさ…二年前、フィアナが歌ってた歌を聞いていて思ったんだ」
サイは私から視線を外すと月を見上げる。その顔は何かを決意し
たような…凛々しい顔だった。

「俺はこの子を助けたいって思った。何でなのかはわからないけど
…フィアナはいつも苦しみを抱えてるみたいで見てられなかったん
だよ」

サイは私に向き直ると優しく微笑んだ。

「フィアナがはじめて俺の為に弁当を作ってくれた時、食べる俺を
見て本当に嬉しそうにしてたからな…俺がフィアナの苦しみを和ら
げることができてるんだって思ってた…俺も嬉しかった」

私は頬を何かが流れるのを感じたが気にせずサイを見つめ続けた。

「フィアナ…これからも俺の為に…料理を作ってくれないか？」

「…はい！」

私はサイに思いつきり抱き着いた。涙が出てきて…でも泣き顔は
見せなくなかったからサイの胸に顔を埋めて隠した。

私は貴族の娘、いつか両親は私を連れ戻そうとするだろう

でも、私は一人じゃない。私を必要としてくれる人がいるから……
きっと大丈夫。

だから、私はこの人を愛そう……

この人となら、私は自由に飛べる気がするのだ。

閑話 ファナナの料理（後書き）

この二人はいつかくっつけたかったですよ。

自分で思っているんですが…サイってこんなに格好よかったっけ？

4 - 1 猫として!?(前書き)

猫って可愛いですよね!

4 - 1 猫として!?

ある晴れた日のこと。エルダは自分の家の窓から空を眺めていた。

「……暇だわ」

そう、彼女は現在進行形で暇なのである。今日は休日、リリイと朔夜は買い物に出かけ、シオリとイリナも自分達の家を建てる為の土地を探しに出かけた。

つまり、現在彼女は一人ぼっちの状態であり、やることもないのでこうして窓から空を眺めているのである。

「（はあ…なんか面白いことないかしら）」

『退屈は魔女をも殺す…と、誰かが言うておったな』

エルダがため息をつくのと同時にエルフィナが語りかけてきた。

『そんなに暇ならば鍛練でもしたらどうだ？戦いはいつ起こるかわからぬのだぞ』

「うーん…それはわかるんだけど…何だか今日はそんな気分じゃないのよねえ」

エルダは再びため息をつくと椅子に座り、机の上に上半身だけ倒れ込む。机は日の光を浴びていて温かった。

『そうか、では妾は少し眠る故…後でまた話そう…』

エルフィナの気配が遠退くを感じながらエルダは再び窓から外を見つめる。

「依頼でもこないかなあ…」

エルダはそう呟くと暖かい日の光を浴びながらそのまま瞳を閉じた。

??? Side

もうすぐで着くはずだ。いつも遊ぶ仲間達から教えてもらった“依頼達成率100%”の人物が住むという家がある湖まで僕は歩いてきた。

早く何とかしないと僕のご主人様が危ない…！

僕なんかの依頼を受けてくれるかわからないけど…やるしかない！

「ここか…」

僕は湖のほとりに建つ一軒の家の前にいた。

「（見た感じは普通の家だ…）」

僕は家の周りを少し回ると窓から中を覗いてみた。そこには…

「…すう…すう」

可愛らしい少女が机に突っ伏した状態で寝ていた。顔はこちらを向いている。

「おお…」

僕は思わず声を出していた。それほどまでに少女は可愛かった。ご主人様も可愛らしい顔をしているが、この少女も負けてはいない。ご主人様より少し年上くらいだろうか。

少女の他に家の中は誰もいないようだ。この少女は僕の探している人の娘さんだろうか？

僕はそのまま窓から中に入ると机の上に上り、少女の頬を軽く叩いた。

「おゝい、起きてよゝ！」

僕が何度か叩いても少女はなかなか起きない。困った…どうすればいいのか…。

他にやることもなかった僕は仕方がないので少女が起きるまでその場で待つことにした。

エルダSide

ふと、目が覚めた。私はどれくらい寝ていたのだろうか…

時計を見るがまだ1時間も経っていない。午前10時くらいだ。

暖かくて気持ちいいのでまた寝ようかと再び寝る態勢に入った時、寝る前とは違う光景があることに気がついた。

机の上に一匹の黒猫が座っていたのだ。金色の瞳で私をじっと見ている。

ただの猫ならば外に出すなり愛でるなりするがこの猫、なんと魔力を感じるではないか。誰かの使い魔だろうか？

「私に何か用かしら？」

私が体を起こしながら尋ねると黒猫は「ニャー、ニャー」と鳴き声を上げる。というかそのままじゃ何と言っているかわからない。

「チェンジ、モデル猫…」

私は獣人族の力を発動させると、以前リリィに頼まれて猫になっ

た時のことを思い出して猫に変身した。

黒猫は驚いたようで目をパチパチとさせている。

「さて、これで大丈夫。改めて、私にご用かしら？」

黒猫はハッと我に返るとぺこりと頭を下げる。

「すみません、ちょっと驚いてしまって…」

「まあ、目の前で人間の姿から猫になれば誰でも驚くよね…」

私が苦笑いをするると黒猫は頭を上げて金色の目を私に向ける。

「僕は“ゼロ”といいます。お気づきかとは思いますが、使い魔です。本日は依頼をしにきました」

私をまつすぐに見つめて真剣に話すゼロ。どうやらそれなりにしつかりしているようだ。

「依頼の話を聞くのはいいのだけれど…普通はギルドに出すのが一般的じゃないかしら？」

「はい、わかつてはいるのですが…僕は人の姿にはなれませんので、依頼を出そうにも出せないんです…」

使い魔で人の姿になれないことは珍しい事ではない。遠くの相手への連絡や、魔法の発動の為に呼び出す使い魔は大抵獣の姿のままであったり、人間以外の姿であることが多いからだ。

「僕はこの町をまとめるストレイラル家の一人娘のアミイ様の遊び相手として奥様が呼び出した使い魔です。ですから人間の姿にはなれませんが、人間の言葉も喋れません。精々普通の猫より頭が良く、頑丈で、長生きで、怪我の治りが早いくらいです」

ストレイラル家は王家から直々にこの町の統治を任されている貴族である。何でも、現在の頭首であるアルス・ストレイラルは若かりし頃、先代の王の命を助けた事があるらしい。その功績が認められてこの町の統治を任されたんだとか…

以前フィアナから聞いた話はそんな感じだった。つまりゼロはこの町一番の家で生活していることになる。…羨ましい。

「それで、依頼についてですが…受けていただけますか？」

ゼロは緊張しているのかさっきから尻尾がピンツと伸びきっている。

「そんなに緊張しないでいいわよ。そもそもよくこの場所がわかったわね」

ゼロは少しリラックスしたのか尻尾をくるりと回した。

「知り合いの使い魔に聞いたんです。どんな依頼もこなす凄腕の人物が湖の近くに住んでるって…」

「へえー、私もいつの間にか有名になったものね…」

まさかそんなに有名になっていたとは知らなかった。もしかしたらパーティーメンバーが全員女であるのも原因の一つかもしれない。

「あの…」

私が考えこんでいるとゼロがおずおずと聞いてきた。

「ん？…どうかした？」

「貴女があ有名なエルダさんなんですか？」

「…そうだけど」

あれ、この子は私が本人だとは思っていなかったのか？

「ゼロ、貴方は私を誰だと思ってたの？」

「え？…あ、その…娘さんかな、と…」

「む、娘ねえ…まあ、普段の私を見たら誤解する人も多いからね…
うん、もう慣れたわよ…一々つつこむのも疲れたしね…」

「…あ、その…ご、ごめんなさい！悪気はなかったん…です」

「ええ、わかってるわ…大丈夫よ」

やっぱり身長！？身長が低いから皆私を子供扱いするの！？…みてなさいよ…身長なんて…す、すぐに伸びるんだから…！

「あの、エルダさん…大丈夫ですか？」

何か頬を伝ってるけど気のせいよね。これは心の汗よ、きつとそ

うだわ!!

「話がそれたわね。続きを話してもらえるかしら?」

私はできるだけ笑顔でゼロを見た。ゼロが「ひっ!?!」とか言うてたけど気にしないことにした。

「改めまして…依頼内容は僕のご主人様であるアミイ様の護衛です」
「護衛? 貴族の娘さんなら護衛くらいたくさんいるんじゃないの?」
私の返事にゼロは俯く。

「はい、本来ならば護衛の人数は足りているのですが…実は明日から旦那様と奥様が王都へとお出かけになるのです」

「…なるほど、その為に護衛の人数が分散されるのね?」

「はい…ご主人様王都が嫌いで、家に残ると言い張ってしまして…」

王都が嫌い…か、何か個人的に嫌な事でもあったのだろうか。

「それにしても、依頼を出す程までに護衛の数って少ないの?」

「あ、はい…最近になって護衛の仕事を辞めて別の仕事に就く人が多いんです。最近是不景気で護衛の人達への給料も減り始めてますから…」

なんと…前世の世界だけでなくこの世界も不景気だったとは…

命を懸ける仕事をしているのに給料が少ないのでは辞めたくもなるだろう。

「あと、この依頼は“護衛が少ないから”という理由だけではありません」

先程よりも真剣な顔をするゼロに私は自然と姿勢を正す。と、言っても他の人から見ればテーブルの上で二匹の猫がニャーニャー鳴き合っているだけにしか見えないだろうけど…

「実は、僕のご主人様…アミイ様を狙っている者がいるという情報が入ったのです」

「アミイ様が狙われている？」

「はい、狙われているんです。相手は反政府軍の者達です。…アミイ様を誘拐していざという時の人質にするつもりらしいのです」

反政府軍……草原で繰り広げたあの戦いを思い出した。

…辺り一面血の海だったのを思い出したらなんか気分悪くなってきた。

「あの…大丈夫ですか？」

おっと、顔に出てたみたいね…

「…大丈夫、ちょっと嫌な思い出があるだけだから。…とにかく、依頼は受けましょう」

「本当ですか！？ありがとうございます！！」

私も狙われているとわかっていて人を見殺しにするようなことはしたくないし…

「それで、何か気をつける事は？」

「そうですね…ご主人様は極度の人間嫌いにして…できればいざという時以外は猫の姿のままにいた方がいいと思います」

「ね、猫の姿のまま…」

「はい…。あ、言葉を喋るのは普通に大丈夫です。エルダさんは僕の知り合いの使い魔ということにしてください」

難しい年頃なのね、大丈夫なのかしら…。ちょっと不安だけど…

「ゼロ、一つ聞くけど…アミイ様は何歳なの？」

「はい、現在10歳ですね」

10歳…まだまだ子供だ。尚更守らなければ。

「では、明日から三日程護衛をしてもらっていいですか？」

「はい、わかりました」

明日から三日間何事もなければいいけど…

4 - 2 ゼロのご主人様（前書き）

明日からテストなのに…私、こんなことしてていいのか!?

4 - 2 ゼロのご主人様

私はゼロの後ろをついて行きながら町を眺めている。

今日はゼロのご主人様であるアミィと顔合わせに行くことにした。そして、そのままストレイラル家に泊まり、翌日から依頼開始である。

毎日歩く町を猫の姿で歩くのはなかなか新鮮である。

「あの…」

私が町を眺めているとゼロが歩きながら声をかけてきた。

「どうかした？」

「ご家族の方には泊まりがけだと連絡しないのですか？」

「ああ…それなら書き置きをしてきたから大丈夫よ」

リリィのことだ、私について来ると言い張って聞かないだろうからね。あえて依頼内容は書かずに「泊まりがけの仕事があるから家を空けます」とだけ書いておいた。…後は朔夜が何とかするでしょう。

「そうなんですか…」

今の説明でゼロは納得してくれたみたいだ。

「つきました」

そんな会話をしていたら目的地であるストレイラル家についたようだ。

ストレイラル家は町の中心から少し離れた丘の上に建っている。私の目の前にはまさしく豪邸と言っていい程の巨大な建物がある。猫の目線から見ているためか余計に大きくみえるけど…

「さあ、入ってください」

ゼロは門の隙間から体を滑りこませた。こんな時猫の体は便利だ。そのまま中心に噴水がある広い庭を横切っていく。

玄関は閉まっていたので近くの開いている窓から屋敷の中へと入る。

「こちらがご主人様のお部屋です」

二階の一番奥にある少し装飾の施された扉の前で立ち止まる。そして扉の下にある猫専用の小さな穴から中に入った。

部屋の中はぬいぐるみでいっぱいだった。熊、猫、犬…他にも沢山あっていかにも少女らしい部屋だった。

「あれ…ご主人様？」

部屋を見渡しても誰もいない。ゼロはきょろきょろと部屋を見渡すとベッドの上に飛び乗った。

「あ…寝ちゃったんですね」

よく見るとベッドが少し膨らんでいる。どうやら昼寝をしているようだ。私もベッドに飛び乗る。柔らかいベッドに足の半分が埋まって上手く歩けない。

「……うん」

「…ほお」

目の前で寝ている少女はとても可愛らしかった。肩より少し長いさらさらの金髪に整った顔…まさに美少女だった。歳は12〜3歳くらいに見える。

「……ん…ふぁ」

しばらくして少女の瞼がゆっくり開く。髪と同じ金色の瞳がトロンとしたまま私を見た。

「……白猫だ」

私を見たまま少女は可愛らしい顔を僅かに傾げる。

「ご主人様、おはようございます」

ゼロが挨拶をする…と言っても彼女には「にゃ〜、あにゃ〜」としか聞こえないが…

「あ、ゼロ…おはよう。何処に行ってたんだい？」

少女…アミイはゼロの頭を撫でる。するとゼロも気持ち良さそうに喉をゴロゴロ鳴らす。

「…ところで、ゼロ。あんた、こんな可愛い白猫を捕まえてきて…やるじゃないか」

アミイは顔に似合わないような姐御口調でゼロを見ながらニヤニヤと口元を緩める。

「な、何を言っんですか！」

ゼロは明らかにオロオロしながら「にゃー！にゃー！」と鳴きはじめた。私は少しからかってやろうと甘い鳴き声を出しながらゼロの顔に自分の顔を擦り寄せた。

「ふにゃん」

「な、ななな何を！？」

ゼロが顔から煙がでそうなほど赤くなって目を回しはじめたので私はそろそろかな、と思いゼロから体を離してアミイの方を見ると挨拶をする。

「はじめまして、お嬢様。私はエルダと申します。ゼロとはお友達です」

アミイは私を見て目を見開いて驚いた。

「あ、あんた…言葉が話せるのかい！？」

「はい」

アミイは私を同じ目線まで持ち上げると、しげしげと眺めた。
…
なんか恥ずかしいな。

「へえ…ゼロは喋れないけどあんたは喋れるんだねえ」

そう言つとアミイは目を輝かせて私に顔を近づける。

「…で？ゼロとはどんな経緯で恋人になつたんだい？」

耳打ちするように言つてきたアミイに私は慌てて首を振った。

「ち、違いますよ！私は別にゼロとは恋仲ではないです！」

「おや、そうなのかい？アタシはてつきりゼロにもようやく春が来たと思つただけだねえ」

この大人びた姐御口調…本当に子供なのか？実は中身は結構な歳だつたりして…

「エルダ、あんた今変なこと考えてなかったかい？」

「…え？」

「ちなみに、アタシは13歳だよ？」

私、何も言つてないんだけど！？

「顔に出てるよ?」

猫の表情を読むなんて…この子できるわね!

「だてにゼロといつも遊んでるわけじゃないよ」

そう言うとアミイは元気よく笑いだした。その顔は純粹に可愛い。口調は年上らしいけど見た目は美少女なのだ。笑顔がよく似合う。

それからは両親がいない間は私がゼロと一緒に彼女の遊び相手になるということ話を話して猫として普通に過ごした。なんてことはない、アミイとお喋りである。

「ご主人様、そろそろ夕食の時間です」

ゼロが前足で時計を指し示して鳴いた。

これ以降もゼロの喋っている内容を書きますがアミイには鳴き声として聞こえています。

夕食の時間となり私とゼロはアミイの足元に寄り添って一緒にご飯を食べた。

「ゼロ、何だか人が少くない?」

食事中であるアミイに悟られないように猫の言葉でゼロに尋ねる。

「…と、いいいますと?」

ゼロは首を僅かに傾げると私と向き合って座った。

私が気になったことはこの部屋の中にいる人間の数だ。私とゼロ、アミイの他にはメイドさんが三人ほどドアの近くにいるだけで護衛らしき人は誰もいない。

「いくら食事中であつてもちよつと無用心じゃないかしら？」

私の問いにゼロは僅かに顔を伏せる。

「…ご主人様が人間嫌いだということは話しましたね？」

私は頷いた。依頼を受ける時にたしかにその話しをしていた。

「ご主人様は五年前に一度、誘拐されそうになったことがあります」

「…え？」

五年…彼女が8歳の時か。

「その時はたまたま旦那様と奥様が仕事で家を離れている時でした。私もまだご主人様と出会ったばかりでしたので油断していたのかもしれない」

ゼロは目を閉じると俯いて再び口を開く。

「ご主人様を誘拐しようとしたのは…この家の護衛をしていた兵士の一人でした」

「…！」

私は自然と目を細めているのを感じた。身内に誘拐犯…か。

「幸い誘拐は失敗しました。…しかし、それからというもの、ご主人様は人との付き合いを一切しなくなりました。余程怖かったのでしょうか…旦那様と奥様、それから仲のよかった使用人以外は誰とも会わなくなりました」

ゼロは顔を上げて食事中的アミイを見た。

「本当は旦那様も奥様もアミイ様を家に残すのは不安だったのです。しかし、一緒に王都に連れて行っただとしてもアミイ様を苦しめるだけだと思われたでしょう…だから、アミイ様を守る為に貴女を雇うことにしたのです」

私もゼロと同じようにアミイを見上げる。黙って食事をしている彼女の顔はどこか寂しそうだった。

私はアミイの顔を見ながらしばらく彼女が此処に残った理由を考えていた。王都はこの大陸一番の大都市だ。勿論それだけ人間も沢山いる。そんな所に連れて行ったら彼女はきつと耐えられない。

いや、彼女の事だ…この町さえ歩く事はできないのかもしれない。

心の傷はそう簡単には癒せない。

食事が終わって部屋に戻ったアミイは風呂に入るとベッドに腰掛けながら本を読み始めた。何故か私とゼロを膝の上に乗せた状態で…

「…エルダ」

アミイが私を呼んだので顔を上げる。

「あんたのご主人様はどんな人なんだい？」

相変わらずの姐御口調で私に質問をしてきた。

しかし、困った。そもそも本当の使い魔ではない私にはご主人様なんて存在しない。仕方がないのでリリイのことを話しておこう。

「私のご主人様は17歳の少女です。…基本的には真面目な人ですよ。ただ、私を溺愛してるので今頃は泣いているんじゃないでしょうか…」

間違ったことは言っていない。ただ『ご主人様』の部分が『恋人』になっているだけだ。

「はは、随分と可愛いがられてるんだねえ」

「ええ、少しは自重してほしいです」

授業中に媚薬を作った事があつたくらいだ。もう少し周りの視線を考えてほしい。

「エルダはそんなご主人様の使い魔になったことを後悔したことがあるかい？」

少し真剣な顔で尋ねてきたアミイに私も真剣に返した。

「ありません」

リリイをパートナーにしたことを後悔したことはない。むしろ毎日
日が充実している程だ。

「そうかい…時々、ゼロはこんなアタシがご主人様であることを後悔
してるんじゃないかと考えるんだ」

アミイの言葉を聞いてゼロが驚いて顔を上げた。

「ご主人様、僕は後悔なんてしてません！」

私がゼロの言葉をそのまま伝えたとアミイは「ありがとう」と言
ってゼロの頭を撫でた。

「アタシはこうして引き込もってばかりだ。また昔みたいに町を歩
いてみたい…でもね、どうしてもダメなんだ。周りの視線がさ…い
つかまたアタシをさらっていいこうとする奴に見えて仕方ないんだ」

アミイは私とゼロを撫でながらすっかり暗くなった外を見た。今
夜は綺麗な満月だった。

「アタシとしたことが何を話してるんだか…疲れてるのかな」

アミイは私とゼロを枕元に降ろすとベッドに潜り込んだ。

「…おやすみ」

「おやすみなさい、ご主人様」

「おやすみなさい、お嬢様」

私とゼロの返事に微笑みを返すとすぐに小さな寝息が聞こえてきた。

私は人の姿に戻るとベッドに腰掛けて寝息をたてるアミイの頭を撫でればサラサラの金髪の感触が伝わってくる。

「ゼロ、アミイはもしかしたら変わりたいのかもしれないね…また堂々と人前に出られるように」

「そうでしょうか…」

ゼロもアミイの寝顔を見ながら呟いた。

「今、彼女は古傷から立ち直ろうとしてる。立派なことだよ…だから周りがしっかり支えてあげなくちゃいけない」

「はい…」

私とゼロは日付が変わる時間まで彼女の顔を眺め続けた。

4 - 3 負の感情（前書き）

ずいぶんと間を空けてすいませんでした！

4 - 3 負の感情

真夜中にふと私は目を覚ました。

隣を見ればゼロとアミィが寝息を立てている。

私はベッドから降りると、猫から元に戻り窓を開けてそこに座った。

『……エルダ、少しよいか？』

「……エルフィナ？」

私は夜風に揺れる髪を押さえながら窓の外を見た。

『あの少女についてなのだが……』

「彼女がどうかした？」

ベッドに視線を向ければ気持ち良さそうに眠るアミィの姿があり、枕元にはゼロが丸くなって寝ている。

『彼女は幼い頃からトラウマを抱えている……』

「そうね。人間嫌い……というより、どちらかと言えば“対人恐怖

症”に近いわね」

はつきりと彼女が怖がる場面を見ているわけではないので何とも言えないが……おそらく相当酷いものだと思う。ゼロが彼女の事を話す様子から判断したのだが、見ていられない程暗い顔をしていた。

「……それが何か？」

『……アベルが眷属を従えているのを其方には話したと思うが……』

「ああ、確か五人はいるって言っていたわね」

『そうだ。なあ、エルダ、アベルはどんな人間を眷属に選ぶと思う？』

「……？」

私は首を傾げた。アベルが眷属として選ぶ人間……何人も人を殺したりした犯罪者だろうか？

『今、其方は犯罪者ではないかと考えておるだろう……しかし、違うぞ』

「……じゃあ、一体どんな人間なの？」

気のせいだろうか……やけに自分の鼓動が早い気がする。

『奴が選ぶ人間はな、
トラウマや激しい憎悪を持った人間だ』

「……トラウマと憎悪？」

『そうだ、奴が選ぶのは精神的外傷を持った人間と激しい憎悪を持った人間だけなんだよ』

私はおそらく顔をしかめているに違いない。アベルの考えていることなど知らないが、彼の選択する人間の種類に何の意味があるのだろうか？

『奴は“負”という感情が具現化した存在だ。最早、一つの現象と言ってもおかしくはない。』

奴はね…エルダ、“真の負の感情”と“普通の負の感情”を分けて考えているんだよ』

「真の…負の感情？」

『そうだ。例えば二人の男がいたとしよう。』

一人は殺人鬼で、ただ見境なく毎日毎日、人を殺すことで快楽を得ている男。』

もう一人は人を殺すことに恐怖を覚えている。しかし、過去の虐待のトラウマから、知らない人間を見ると自己防衛で本人の意思とは関係なく人を殺してしまう…』

この二人、どちらが凶悪に見える？』

「…それは」

どちらも異常だが、普通に考えるなら前者の方が凶悪に思えてしまう。殺人に快楽を求めているならそれは異常としか言えないし、何より凶悪だ。

「…私は前者だと思う」

『ああ、そうだろうな。しかしだ、前者の男が必ずしも異常だとは言いい切れないんだよ』

「…どうして？」

『エルダは前者の男は殺人に快楽を覚えているから異常だと思ったんだろう？』

しかしね、彼にとってそれが“当たり前のこと”だったとしたら……どうだろうか？』

私は一瞬意味が解らずに首を傾げた。

『いいか？エルダからすればたしかにその男は異常だ。しかし、それはエルダが考えている常識の範疇での話だ。

だが、彼等にとってはそれが“当たり前”なんだよ。つまり、彼等からしてみればそれは負^{マイナス}なんかじゃない。正^{プラス}なんだ。

これが普通の負の感情だ。だからその男はアベルの対象にはならない。真の負の感情があるのは後者なんだよ』

エルフィナの言葉に私は言葉が出てこなかった。反射的に人に危害を加えてしてしまうとはいえ、殺人に恐怖を覚えるような人物のどこが凶悪なのだろうか……

『エルダ、よく考えてみるといい。後者の男は過去のトラウマから自己防衛の為に殺人を犯そうとする。しかし、本人はそれに恐怖を覚えている。身体と心に矛盾が生じているだろう？』

アベルはそこに付け入るんだ。奴は心と身体を切り離し、心を消

して、身体に残る“自己防衛の為の殺人”というトラウマの記憶だけを残すんだ。そうすればどうなるか…わかるだろう?。」

「なっ!?!」

私は驚きのあまり呆然としていた。

そんな事をしたら近づく者を殺すだけの存在になってしまう。

『後者の男は世間の常識からも、己の常識からも“異常”だと理解している。これが“真の負の感情”なんだ。

そして、心を失った身体はただの殺戮兵器に成り下がる』

しかし、彼の眷属であるメリーベルやシュナイダーの二人はまるで心を持っているかの様に振る舞っていた。あれは一体どういうことなのか……

『彼等に心はない……しかし心があつた時の“記憶”はあるんだよ。彼等はその記憶から生前の自分を演じているに過ぎないんだ。いいかエルダ。アベル達にとっての恰好の条件を満たしているのは心に傷を負った人物なんだよ。あの子のように、ね』

私はベッドで眠るアミイに視線を向ける。相変わらず気持ち良さそうに寝ている可愛らしい顔を見て、私は複雑な気分になった。

『…先程アベルの眷属らしき反応があつた』

「っ!?!」

私は思わずシャルを取り出して握りしめていた。シャルを持つ右

手に力が入りカタカタと小刻みに震える。

『落ち着け……まだ動きはない。向こうもこちらに気がついたようだ。気配を隠したからな。奴らは諦めが悪いからおそらく数日中に一度、彼女に接触してくるだろう……』

「……ない」

『エルダ？』

「……そんなことはさせない。私が止めてみせる。絶対に！」

彼女をあんな奴には渡さない。私はシャルを持つ手に力を入れた。

「マスター、リリィや朔夜に連絡はしないんですか？」

「シャル……そうね、エルフィナ、二人には一応連絡をしておいてくれる？」

『わかった』

私は再びベッドに戻ると、ゼロの隣に丸くなって目を閉じた。

私は彼女を守れるのだろうか……

いや、守らなきゃいけないんだ。もうこれ以上犠牲は出したくない。私の管理する世界で好き勝手にはやらせない。

密かな決意を胸に秘めて、私は再び眠りに落ちていった。

町外れの森の中に一人の人物がいた。見た目は黒い服に黒いコートを纏った青年だ。

ただ、彼からは黒い魔力が立ち上っており、彼がただ者ではないとわかる。

『シュナイダー、どうだ？』

何もない空間から声が聞こえた。それは少年のようでもあり、青年のようでもあり、老いた老人のような声でもあった。

「今、町全体を探知魔法で見渡したが、いい獲物がいた。……ただ、彼女もいた」

『…ほう』

シュナイダーの言葉に声の主はどこか苦笑いしたように答えた。

「どうするんだ、アベル？」

『……………』

シュナイダーの問いに声の主…アベルはしばらく黙る。

やがてどこか疲れたように返事が返ってきた。

『彼女がいるのは予想外だが…仕方ない。一応明日、獲物へ接触してみてくれ』

「ああ、了解だ」

シュナイダーがそう答えた次の瞬間、彼の姿は最初からなかったかのように消えていた。

後に残ったのは木々が風で揺れる音だけだった。

4 - 3 負の感情（後書き）

エルフィナの口調が途中から若干変わったのに気がついたでし
うか？

お知らせ（前書き）

この作品を読んで下さっている方々に、心からの感謝を
。

お知らせ

この度、この作品を一から書き直すことにしました。

今まで応援して下さいいただいていた方々には誠に申し訳ありません。

しかし、私の気の迷いといいますが…テンションがおかしくて変な表現等を入れている場面がありますので、そういった場面の編集も含めて初めから書き直したいと思います。

タイトルは『天使として…（完全版）』として載せたいと思いますので、どうか再び彼女達の活躍を見に来てやって下さい。

では、新しくなった作品で再びお会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6012m/>

天使として...

2011年7月24日06時41分発行